

---

# ネギポケ漫遊記

水竜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギポケ漫遊記

### 【Nコード】

N2550M

### 【作者名】

水竜

### 【あらすじ】

ポケットモンスターの世界で自由気ままに平和な生活をしていたポケモン達だったが、ロケット団の襲撃を受け、ミュウの作り出した「絶対脱出できる特殊な転移装置」の特殊オプション「実は一部のポケモンだけは別の世界のどこに飛ばされるか分かったもんじゃない」によって「ネギまの世界」にやってきてしまった！！  
そこで目を覚ましたミュウに訪れる様々な出会いや確執……、自分なりにそれをやり過ごすミュウだったが、ある時どういうわけかロケット団が麻帆良にも襲撃を仕掛けてきた！！

序章 あの世界を乗り越える猛者って、意外と口が軽いんだね（前書き）

ここはポケモンと人間が仲良く暮らす、ポケットモンスターの世界。

その、ポケモントレーナー達が多くいる大陸ではなく、人間が全くない、人が訪れることもない、未開の地。

塵芥未踏ともいえる、山を、谷を、川を越えた奥地には、雲や霧で包まれてその全貌を見ることがすら難しいとされる巨大な山があった。その山は緑溢れ、様々なポケモン達だけが平和に暮らしている、いわばポケモンの楽園だった。

この物語は、そんなポケモンの楽園で起きた事件から幕を開けた。

## 序章 あの罾を乗り越える猛者って、意外と口が軽いんだね

「ふ、何か暇だね」

「暇でも平和にや。平和が一番だにや」

のんきな言葉を交わす、サングラスをかけ、ロングチェアに身体をもたらせて日光浴を楽しむ2人のポケモン……、というか、僕とニヤースなんだけど、最初はわざとこ

この噂を流してみたのはいいけど、結構たくさん罾を仕掛けたら全く人間が寄りつかなくなって、本当に平和だって感じる。

え、何でここに人間を連れてこようとしたって？

そんな暇だからだよ。ポケモンをゲットすることを生き甲斐にしてるんだから、逆に人間を捕まえるのもいいかなあって思ったんだけどね、これが面白いくらい

罾に引つかつてくれて最初は楽しかったよ。でも、それからしばらくするとパツタリ来なくなっちゃったんだよね。だから暇なんだそりゃ、人間お断りのこの場所に

来られても堪らないけどさ、僕はちょっと遊びたかっただけなんだよ。僕は悪くない！

「いや、十分悪いにや」

「ニヤース、その突っ込みサイコー！」

「……だからあの2人に反省がにやいって言われたのに……」

そうそう、そんなことをしたから山守りの2人には思いっきり怒られたよ？

でもさ、罨作りは彼女たちもノリノリだったじゃない。

ま、それはいいけどさ、でもやっぱり平和すぎる毎日もどうなのかな？ ニヤースは暇だと思わない？

「にゃーは昔散々苦労したから今はこの平和が『いい感じー！』にゃ」

「それじゃ、今から起きることはやな感じー？」  
「にゃ？」

実はさっきから気付いてたんだけど、どうにもこの山の周囲にあった最大の難関を突破されちゃったみたいなんだよね（笑）

僕がニヤースにそれを告げようとした、ちょうどその時だった。

「にゃにゃにゃっ！？ 爆発にゃー！！」

この山の至る所で大爆発が発生し、

「にゃ、にゃんにゃのにゃ！？」

面白いことにニヤースがもう1つの起爆スイッチを押してくれた。その直後に流れてきたメロディを聴き、ニヤースの首がグギギッと動く。

僕とニヤースの視線の先にあつた雲が綺麗に霧払いで払われていき、そこにはニヤースにとっては昔の知り合いだろう人たちが団体さんでいらっしやってくれてた。

まさか復活してたとはね。でも、この2人の格好……………、幹

部？

いやいやいや、地球がひっくり返ってもあり得ないでしょ？  
そう思ってたなら、いつもの恒例のアレが始まった。

「にゃ、にゃんにゃにょにょ……、うつ、舌嚙んだっ」

「もう、何やってんのよ！！ にゃ、にゃんにゃんにゃんの声を聞き！！！」

「うつ、メチャクチャだよ」

「ムサシ、荒れてるにゃ……」

「肌も声もね」

「……くっ、光の速さでやってきた！」

「風よ！大地よ！大空よ！」

「世界に届けよデンジャランス！」

「宇宙に届けよクライシス！」

「天使が悪魔がその名を呼べば」

「誰もが震える魅惑の響き」

「ムサシ！」

「コジロウ！」

「次代の主役はあたし達！」

「我ら無敵のロケット団！！！」

2人で女性の方、ムサシの肌の値踏みを見てたら、ちょうど口上が終わったらしい。何故か他の団員さん達無表情で拍手したり花火挙げたりしてる。恥ずかしくないのかな？

それにしてもアレ、ニヤースがいた部分をつなげたりして2人で分けたみたいだね。変わってないというか、ワンパターンなのが惜しいと思うよ。そう思ってたら、今度は思いっきりきつい視線が飛んでくる。

「ちよつと、あんたたち!!! 人が気にしてることをよくも言ってくれるじゃないの!!!」

「そうだぞ!!! 今のムサシは肌がボロボロで大変なんだぞ、毎日!!!」

「んああ?」

ここでコジロウが地雷を踏んだ。どうやら相当やばいみたいだね、彼女の肌。

「……つたく、ここに来た以上、私たちの目的は分かってるんでしょ?」

「分かってるよ。ここのポケモンを全部奪いに来たんでしょ? しかもよくあの罠を突破できたよね?」

ここに来るまでの罠の中には、普通の悪の組織が絶対にできないこと、主にポケモンと固い友情や信頼で結ばれていないと乗り越えられない特殊な力ギや暗号や扉を作っておいたんだけど、どうやらこの2人はそれをくぐってからエスパータイプのポケモンで彼らを呼び寄せたみたいだ。僕の力がとっても強かったから、どうやらそれでへばってるみたいだね。ロケット団の飛行機の上で息絶え絶えになってるもん。

「残念だけど、あの罠は私とコジロウには、特にコジロウには効果がなかったわよ」

「俺たちは今じゃ幹部になったが、それでもガーちゃんやノクタス、チリーンにマネネ、マスキッパとの友情は変わらないんだぞ！」

あゝ、なるほどね。

そういえば、コジロウって結構ポケモンに好かれる体質だったっけ。

いやあ、失敗しちゃったかな？ てへ！

「てへ！じゃないにやー！」

分かってるよ。

「で、僕たちを捕まえるっていうならさ、この山の洞窟にある、冬眠中のレジガスとヒードランとデオキシスが入ったカプセルも奪っていくの？」

この直後、一部の飛行機が何処かに消えた。ムサシとコジロウがやけにニヤニヤしてる。

そりゃ、ロケット団は珍しいポケモンが好きだからね。

「それにしてもさ、どうして君らがロケット団なの？ 前に解散したときに別れたんじゃないっけ？ だからニヤースをスカウトしてきたんだけど」

そう、このニヤースは喋れる代わりに技の殆どが覚えなくなっただけだ。たといふととも変わった、喋れるだけのニヤース！



「喋れるだけとはなんにや!!」

まあ……、いいじゃん？

「何故に疑問!!!」

スルーツと。で、暇そうだったし、ここは僕が勝手に『始まりの森』って呼んでるけど、実際に僕とは別のミュウが守ってる『始まりの樹』にいるミュウが、とっても面白い、喋れるだけのニャースがいるって教えてくれたから、暇つぶしにスカウトしてこの山に連れてきたんだ。確かに喋れるだけだったけどさ、料理に洗濯掃除何でもこなしてくれるんだから、一家に一台ほしいよね。  
僕も運がよかったと思うよ、こんな奴隷が手に入ってさ！

「奴隷とはなんにや!! おみやーが散らかし放題で食っちゃ寝生活を送ってるからにやーが代わりにやってるだけにや!!!」

それを俗に奴隷と……、

「言わないにや!!! ……それでムサシとコジロウは何でロケット団に戻ったにや？ 借金返済しなくてもよくなったは……、……コジロウ、ムサシと駆け落ちはよくないにや」

「へえ、駆け落ちかあ。よくこんなお婆さんと駆け落ちしたね」

「絶対尻に敷かれるよ（にや）」

ニャースが絶対ないと思ってるみたいだけど、笑ってた。

だからそれに乗ってみた。

そしたらうまくユニゾンしてた。

「違ーーーーーう!!! 誰がこんな……いやいや、ムサシと……。俺は確かに無理矢理実家に連れ戻された。そして悪夢の女、ルミカとも結婚はさせられた。だが、それはもうどうでもいい!!!」

僕とニヤースがニヤニヤ笑つてると、ムサシは照れた顔をしてたけど、コジロウはすっぱりと否定した。その後口には仕掛けた言葉は修羅のごとく凶暴になったムサシの顔を見て喉の奥に飲み込んだみたいけど、

その後には非常に男らしく宣言をしている。2人で「おおつ」と声を上げると、その後は意外にもおとなしくなり、

「実家が不景気で破産しかけてな、ロケット団の幹部になって稼いだ金で実家を立て直してんだよ」

そう、ボソツと言った。

「世知辛い世の中になったもんだにや」

「うんうん、彼の家って君たちの借金を肩代わりしても痛手にならなかった家だね? ……どうしてそんなに破産しかけたのかな?」

「決まってるだろ? いろんなものに手を伸ばした結果、最も意味がなかったものが俺たちよりも酷い借金を作ったんだ!!!」

「何よ!!! アレは全部私にとって必要だったのよ!!! ちよつとくらい集めてもいいじゃないのよ!!!」

「何がちよつとくらいだ!!! お前が自称女優の事務所を俺の会社の系列の中に勝手に作った上にメチャクチャ散在して大豪遊し続けたのが破産の大きな原因じゃないか!!!」

どうやらコジロウの家が破産しかけたのは、元々雪に醤油をかけて食べる家庭に育った、コジロウとは真逆の人生を送っていた悪女、

ムサシの仕業だったらしい。多分、仕事も来ないから適当に遊んでコジロウの家のお金を勝手に食いつぶしたんだろう。彼女ならやりかねない。そして今、その付けが来てるんだね。

「ムサシって予想以上に悪女だったのにや〜」

「いや、彼女なら国家一つも軽くつぶせるんじゃない？」

「……勝手に入り込んでお金を食いつぶすことはできそうだな。でも……」

「色仕掛けはどうやっても絶対失敗に終わるのがベストだろうね（にや）」「」

またユニゾンした。

後ろで様子を見てる下っ端さん達も結構笑いを堪えてるのが分かる。コジロウも。

でも、ムサシは今の言葉でかなり怒り狂っていた。

「うわっ、この人、口から火炎放射を出したよ……」

「ムサシはひっかく、メガトンキックに怖い顔も使ってハブネークをゲットしてるにや」

「ここまで来ると人間離れしてるね。モンスターボール投げたらポケモン扱いされるんじゃない？」

「その時は何ポケモンにや？」

「う〜ん……、何だろ。悪女とか食いつぶしとかじゃない？」

「むしろ怪獣ポケモンにや」

「あ、それいいね！ お〜い、怪獣ポケモンのムサシ〜！」

この直後、今度は破壊光線が飛んできた。

分かりやすかったから避けやすかったと思つたら、連射された。

何だ、このチートな攻撃は。

1ターン休まないのか？

「無駄にや。ムサシは桁違いの非常識者だにや。ここで常識を求めた方が負けだにや」

昔は仲間だったはずなのに、ニヤースはメチャクチャ毒を吐いてる。そりゃ、今は敵と味方だもんね。

彼らの目的はここを乗っ取ってポケモンを捕まえることみたいだけれど……、あゝ、そろそろだね。

「ムサシ、別部隊からの通信だ！」

「ほい来た！ オーホッホッホッホ、そのミュウもニヤースもこれで終わりね！ あんた達の言つてたカプセルは私たちの手に落ちたわ！」

「他の場所でも捕獲活動は順調に進んでいる。ニヤースも降参しておとなしく捕まれば何もしないぞ。……俺はな」

つまり、さつき散々怒らせた方はおとなしく捕まっても何かしてくるんだろう。

あ、それにしても僕の正体、ばれちゃったね。

え、さつきからもうバレてた？

あゝ、別のミュウって言ってたもんね。

ま、でもさ、捕まることはないんだよね。

「ちょっとコジロウ!!」

「何だよ、ムサ……っ!!? な、何なんだ!？」

カプセルに手をかけたんだね。

あー、おかしいや。

実は、最初から珍しいポケモンが入ったカプセルなんてなかったんだ。

あるのは別の仕掛け。

「残念だったね。君たちが手に触れて開けようとしたものは、ここに住んでいるポケモンが全員、ランダムに何処かに転送されるようにした、特殊な転移装置なんだ。もし誰か人間に捕まっても、ボールから外に出て転移される仕組みになってるし、もう起動しちゃったんだよね? 残念だったね、きーみーたーちー!」

ちなみに家族や恋人は一緒に転移されるよ。

ただ……、アレって失敗作でもあるから何処に飛ぶか、分かったもんじゃないんだよ。

「改良しなかったにや？」

「したらさ、この山の僕とニャースと山守りの2人を含めた60匹

くらいのポケモンは別の世界に飛ばされちゃう仕組みになっちゃったんだよ、てへ！」

「にやつ……！？」

「だからさ、ポケモン世界とは当分お別れなんだよね。じゃあね、売れない死肌のおばさんとコサンジーツ！」

ちょうど転移装置の光が山を包んだらしい。

だからそう言ってやったら、

「次会ったときはあんただけは絶対に捕まえて私のことをお嬢様と呼ぶくらいに調教してあげるから待ってなさいよ！！」

「俺はコサンジじゃない！！ コジロウだ！！ あんな下っ端と同じにするな！！」

って、聞こえてきた。

あー、周囲が白くなったとき、ニヤースの爪が顔を掠めたんだよね。

危ない、危ない、避けてよかった。

というわけで、この山が襲われた事件では僕の作った転移装置のおかげで危機を脱した。

とはいってもさ、別の世界に飛ばされちゃったんだ。

「まー、暇つぶしができたらそれで楽しめそうだけどね」

そう思っていると、僕の前には巨大なユグドラシルって思うくらい

大きな大樹がある、ヨーロッパみたいな街並みの都市にたどり着いていた。

さう、何が起きるのかな？

## 序章 あの罫を乗り越える猛者って、意外と口が軽いんだね（後書き）

### 後書き

更新速度はエレメンタルデイズよりも更に輪をかけた不定期更新です。

ただ、ネギポケはやりたかったことなので、今回ようやく形になりました。

今までは多分、人間のトレーナーを作る必要があると思って断念していました。

でも、面白いことが大好きそうなミュウが変身すればいいって思ったので、喋れるポケモンを2、3体つけてこんな形になりました。

喋れるポケモンはミュウ、ニャースと、ミュウの言ってた山守りのポケモン2人になります。

誰なのかは秘密ですが、エレメンタルデイズの女性5人の誰かをポケモンに当てはめると自ずと見えるかもしれないです。

それはさておき、まだこの物語は探り探りでやる予定ですが、後に空間転移を行ってロケット団も出てくる予定です。

魔法使いが魔法の使えない結界を作り出されて弱ったりと、メチャクチャな設定を作ってます。



ただ、そこで飛ばされたポケモン達を誰のパートナーにするかで悩んでまして、彼女はこのポケモンがいいみたいな提案があったらできる限り採用したいと思ってます。

ちょっとたくさん意見を取り入れてみたいので、もしこんなのだうですかっというのがあったら聞かせてください。

飛ばされたポケモンは初代からダイヤモンド&パールまでに登場する、未進化のポケモン達の誰かです。

フリーザー、サンダー、ファイヤー、ミュウツー、スイクン、ライコウ、エンテイ、ホウオウ、ルギア、セレビィ、アンノーン、レジロック、レジスチル、  
レジアイス、ラティアス、ラティオス、カイオーガ、グラードン、レックウザ、ジラーチ、デオキシス、ミカルゲ、ロトム、ユクシー、エムリット、アゲノム、  
ディアルガ、パルキア、ヒードラン、レジギガス、ギラティナ、クレセリア、フィオネ、マナフィ、ダークライ、シェイミ、アルセウスは出すとややこしいので出しません。

既にミュウがチートキャラになりますから、伝説を織り交ぜると危険なんです（ミュウは全ての技を使います）。

所持は1人につき、1〜2体。大抵が1体を目安にしています。

ネギ・スプリングフィールド

相坂さよ

明石裕奈

綾瀬夕映

朝倉和美

和泉亜子

大河内アキラ

柿崎美砂

神楽坂明日菜

春日美空

絡繰茶々丸

釘宮円

古菲

近衛木乃香

早乙女ハルナ

佐々木まき絵

桜咲刹那

椎名桜子

龍宮真名

超鈴音

長瀬楓

那波千鶴

鳴滝風香：クチート

鳴滝史伽：パチリス

葉加瀬聡美

長谷川千雨

エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル

アナタシオティ

宮崎のどか

村上夏美

雪広あやか

四葉五月

ザジ・レニーディ

犬上小太郎

佐倉愛衣

月詠

ちなみに唯一考えているポケモンと一般生徒の遭遇&ロケット団が登場!??の話では双子を主体にする予定だったので、彼女たちのパートナーは決まっています。

特にパチリスと史伽は完全確定に決めてます。というわけで、首を長くしてご意見待ってますね。

1・何処に行ってもあの種族ほど、宿命にとらわれた種族はいないもんだね」

ロケット団の襲撃で離ればなれになった仲間を救うべく、ミュウは勇者となって立ち上がる！

ダンジョンを乗り越え、モンスターを倒し、荒ぶるドラゴンを倒し、ついにミュウは魔王の城へとたどり着いた！

「みんな、待っている！　きっと僕が助け出すからな！」

ここに始まる！

ミュウの新たな冒険劇が……！

「……なんて感じだったら面白いと思うんだけどなあ」

「おみゃーは真面目にやる気は……ないにや」

「ちよつ、そこは敢えて突っ込んでよーッ！　僕がただ痛いだけじゃん……！」

というわけで前回のあらすじ

ロケット団の襲撃に遭い、彼らにわざと転移装置を動かさせてポケモンを様々な場所にレポートさせる転移を行ったミュウだったが、ミュウ自身が作った装置にミュウ自身がつける気がなくもついてしまった、とんでもないオプション（ミュウとその一味と複数のポケモンが別の世界に飛ばされてしまう装置）の起動により、彼

らは他の世界に飛ばされてしまった。そしてミユウが目覚めたとき、彼の目の前にはヨーロッパ風の街並みと、もの凄く馬鹿でかい大樹が存在していた。

1・何処に行ってもあの種族ほど、宿命にとらわれた種族はいないもんだね

うーん、やっぱり別の世界だね。ポケモンがいなくて普通の生き物がいる。

別にポケモンの世界にも犬とか猫はいるんだよね、目立たないだけで。……じゃなかったら　ポケモンなんて学術名がつかないよ。

えっと、最初に目を覚ました時に森の中にいた僕は、今も森の中にいる。街に行ってもよかったけど、無駄に騒がれてもって想ったんだよね。

まずはここがどんなところなのか分からないといけないし……っ  
て思ってたなら、森の中で声が聞こえた。

「いたぞーッ！　見つけた！」

「あっちに行つたぞ、すぐに追え！！」

「何としても災害を生み出す悪魔を倒すんだ！！」

妙に緊迫した、とつても何か大変なことが起きているような、そんな声が聞こえてくる。

こつちの世界って悪魔がいるのかな？　ちょっと面白そうかもしれないやっと思いかけたら、姿と気配を消しながらその場を浮遊していた僕の眼前を、実に見覚えのある仲間が通り過ぎていく。森の中でも時々何かあればあんな感じの険しい表情で飛び回っていたかな。ただ、今のはもの凄く顔を引きつらせて逃げてる感じだった。

「やっぱりあの一族らしいね。でも、この世界はポケモンはいないはずなのに、どうして追われてるんだろう？」

『災害を生み出す悪魔』と言われて人間に追われるのは彼らの一族らしいと本当に思う。

そういう勘違いが繰り返されてきた一族だから仕方ないとか言いようがないけど、そんな彼を奇妙な光線がたくさん追いかけていく。僕もヤバイと思って避けたほどだよ。だって近くの木々や地面を挟るんだよ、それ。

また、それを何で彼に差し向けるのかなって思うほどで、本当に彼が殺されそうなんだって思う。その後しばらくして、ようやくそれを行った人たちが走ってきた。無論、僕のことには気付いていないみたいだった。

真っ黒なドレスみたいな服を着た金髪のお姉さんと、箒を持った女の子と、色黒のナイフを持った男の人、それに複数のローブを着ていてフードもかぶってるから顔も何も分からない男の人や女の人、そして、セーラー服姿のポニーテールの女の子、持ってるのは刀かな？

「うーん、何か物々しい人たちだったなあ。でも、本当に彼が殺されちゃいそうだし、助けないといけないな。……それにしてもランダムに選ばれるとはいえ、僕たちと一緒に飛んできたポケモンっていったい誰がいるんだろ？ ああ森にはそんなにヤバイ子はいなかったんだけどなあ、多分。伝説系は僕だけで十分だったから呼ばなかったし、ミカルゲのバカや暴走屋のロトムは問題起こしそうだから、自己意識が異様に強いフィオネ、シェイミ、アンノーンも含めて呼ばなかったし……、まあ、後々調べるかな。進化系は選ばないように設定したからそこまでヤバイ事にはならないはずだ」

僕は単純にそう思うことにして、後を追おうと思い、

「ん？」

ちよつと立ち止まった。

何か、僕の周囲を包んでる光の壁とリフレクタと神秘の守りと守るの4つの壁で作った『絶対普通の人には気付かれない、存在を消す障壁』に何かが当たったからだ。

しかも障壁にめり込んでる。拳銃の弾丸が何かかかって思ったら続けざまに5発も打ち込まれてきた。

うわっ、どうしてこんな可愛くて無害な僕に攻撃するんだよー！

……なんか突っ込みがないと本当に痛いだけだよ、ニヤースの奴は何処に行ったんだ？

「とりあえず……まずは居場所を……」

僕は目をつむって心の目で相手の居場所を探る。

しばらくすると結構離れた木の上に、黒い長い髪の毛の、色黒の女の人がスナイパーで僕を狙ってるのが分かった。

かなり離れてるのに僕を狙えるなんて相当な腕だね。

でも、見つけた以上、今度はこっちの番だよ？



「場所を見つけたら絶対逃がさないけど逃げられちゃいけないし、早く彼を追う必要もあるし……」

とりあえず目を開けて彼女がいた方向を見ると、僕は指で銃をパ  
ンと打つみたいなポーズをした。すると、僕の指から赤い光が飛び  
出ていく。しばらくすると僕の目には赤い光がその人物に付着した  
ことが判別できた。

今の技はロックオン、心の目と同じで確実に次の技が当たるよう  
にする技だ。心の目と違って、ロックオンによって放った光は相手  
に付着し、放った人物にだけ見えるような目印になる。

「さて、何を放とうかな？ 目立っても駄目だけど……そうだ！」

僕は身体に一杯力をため込んで、それを空に打ち上げる。

そして決めぜりふ！

「さあ、お前の罪を数えろ！！」

一階言ってみたかったんだあ。

てか、これって誰かにここにいるよって示すようなものだけださ、  
これが一番ちようどいいんだよね。

今の僕ってとっても悪だ。

決めぜりふは正義の味方なのにな（笑）

あゝ、でもやっぱり突っ込みが欲しいよ。

僕が空に打ち上げたものは、空に達すると花火みたいに破裂し、そして分裂した10個以上の流星が1カ所に向かって集中落下していく。

ドラゴンポケモンしか覚えることのできない技『流星群』だ。

でも、僕はその命中する姿を見るのはやめて、すぐに彼の後を追いかけた。

……戦場では何が起きるか分からない。それはどんな場所であってもだ。

だが、まさか攻撃を受けるとは思わなかった。

大枚をはたいて手に入れた転移符も意味をなさず、障壁符を費やしたが、商売道具の銃をライフルを3丁もなくす羽目になるとはな……。

身体に着弾した時の威力も高かった。これでは当分、立ち上がれそうにもないが、骨折していいだけマシだろう。

そんな私の耳元に聞こえてくるのは、麻帆良の通信司令部にいる魔法生徒の声だ。

【こ、こちら司令室、ポイント276にて発光現象出現!!】

『災害を生み出す悪魔』討伐部隊、遠距離攻撃兵が負傷、戦線を離脱！！』

私ほどの者が戦線離脱を余儀なくされたせいか、彼女もかなり焦燥しているらしい。

私が連絡を入れた時も絶句していたほどだから、その後で聞こえてきたクラスメイトの父親の、滅多に聞くこともない狼狽の声も正直おかしかったが……あの生き物、いったい何者だろうな？

魔法先生達は全く気付かずに通り過ぎていき、魔眼で見つけることができた以上、姿を隠していたことは考えられる。

しかし……あのような力を持った魔法生物が存在していたとは聞いたことがない。

それに……。

あの生き物たちはこちらが攻撃しないと何もしてこなかった。雇われている以上、侵入した魔法生物に対して攻撃する手を緩めるわけにもいかないが……本当に彼らは撃つべき存在なのか？

アレからしばらく森の中を追跡したら、ようやく見つけることができた。

奇妙な力の残存を追いかけていくとようやく見つけた。

けど、最悪な状態だった。

多勢に無勢というか、背後は崖の下、つまり行き止まりってところまで追い詰められてる。地面は多分彼が技を放ったんだろ、えぐれてるところが多いけど、彼らが怪我をした様子はない。その代わり、彼は身体のおちこちに傷を負っている。彼の自慢の触覚も傷ついている。地面の抉れが妙に軽いと思ったらそのせいか。触覚が傷ついてるから技を強く出せないんだね。

「ようやく追い詰めたぞ、災害の悪魔!!」

「今すぐにお前を倒して、麻帆良から災害を防ぐ!」

ロープのお兄さん達がそう言っただけ杖を向けると、光や雷が飛んで彼を攻撃していく。

「これ以上、麻帆良で悪事を起こすことはこの私が許しませんわ!」

金髪のお姉さんが声高々に叫ぶと、彼女の足下からたくさんの影の触手みたいなものが襲いかかっていく。彼は影分身でそれを避けていくけど、アレって影打ちかな?

でも、見た感じからして違うだろう。それに、触手の攻撃は彼にはあまり効果がないみたいだった。そりゃそうだ、彼は悪タイプだから、ゴーストタイプの技に似たあの攻撃は効果が薄い。

「さて、そろそろ助けた方がいいよね」

彼に向かって色黒のおじさんがナイフを向けてるし、刀を持った

女の子が今にも襲いかかろうとしてる。

「まずは気付かれないように近づいて、その後で彼を連れてテレポ  
ートするんだから……一度この障壁からでなきゃいけないんだっけ  
……」

絶対見つかるけど気付かれたくないしなあ……。

他の技を放つ上ではこの障壁を張っててもできるんだ。

ただ、テレポートだけは無理。

「よし、まずは……」

僕はとりあえず彼のそばに近づくと、彼の横に立つ。若干の気配  
から、彼は僕に気付いたみたいだ。顔は前に向けているが、ちらつ  
と横を見た時の目は……、

「遅い！！ 何で今になって来た！！ どうせその辺りで眺めてた  
んだろ？！」

完全に怒ってた。

まあ、それじゃやろうかな。僕の目が紫色に光ると同時に、目の  
前では混乱や動揺の声が上がる。僕たちと対峙していた人たちの手  
から、ナイフや銃、杖や剣が紫色に光り、その場に落ちていく。握  
っていたそれらも手からすり抜けるように落ちていき、彼らが拾お  
うとすると、微かな電撃みたいなのがそれを拒絶し、彼らに道具を  
触れさせない。これは相手に道具を使わせないようにする「差し押  
さえ」だ。これで自分、彼らは道具を使えな……、……えええっ！？

僕はここである人に目が向く。

周囲の人も同じなんだけど、金髪のお姉さんがすごいことになっていた。

お前、何したんだ？

彼が僕をジロツと睨み付けてくる。

実は彼を見つけてから、あのお姉さんに対しておもしろ半分に『恨み』をかけていた。

それで技が使えなくなつて動揺するかと思つたら、何と、黒いドレスが彼女の身体から消えていくじゃないか！！！！

「きゃああああっ！！！！？」

金髪のお姉さんは完全にパニックに陥り、その場にしゃがみ込む。

しかも、その余波を何故か隣にいた箒を持った女の子も受けていて、2人ともその場で胸と……を隠すように座り込んだ。男の人たちは顔を赤く染めながら背け、女の人たちが駆け寄ってローブを着せている。

ただ、武器を持っていたはずの2人の怒り顔は完全に彼に向いていた。どうやら君のせいだと思われちゃったみたいだね、てへ！

……後で死にたいか？

分かってるよ、今がチャンスなんだ。僕は『溶ける』ことで姿を地面と同化し、そのままアブソルの身体に巻き付く。彼らの目に僕はこれで映っていない。そしてレポートで飛んだ。

一体、今何が起きたんだ……。

突然夕風が手をすり抜けるように落ち、私の手を拒絶するように離れていく。

拾い上げようにも拒絶するような力が発動している。

私だけではない、ガンドルフィーニ先生や他の魔法使い達にも同じことが起き……、何が起きたのか分からないが、高音先輩と佐倉さんが一糸纏わぬ姿になった。

先ほどは『あの』龍宮が攻撃を受けて戦線を離脱したと聞く。

これも全て、さっきまで目の前にいたあの魔物の仕業に違いないだろう。

木乃香お嬢様がバナナを踏んで転んだのも、車に水をかけられたのも、全てあの魔物がいた近くで起きた！！

絶対アイツがお嬢様に不幸を呼び込んだに決まっている！！

ガンドルフィーニ先生も自分の自慢の魔法生徒をこんな姿にされ

て怒っているご様子だ、ここは同じ怒りを持つもの同士で何としてもアイツを捕まえなければ！！

そんなとき、魔法生徒のナツメグさんから連絡が入り、

「こ、こちら司令室っ！！ ポイント305から離脱した魔物がポイント1076に転移が確認されました！！ しかも発光現象が起きた場所にいたと思われる、新たな魔物がそばにいる模様！！ 至急、対処するように学園長から指示が放たれました！！ 繰り返しします……」

私たちは言葉を失った。

その森からしばらく歩くと私たちの寮があるではないか！！

くそっ……、やはり奴らはお嬢様を狙っていたんだな！！ これ  
は一刻も早く捕まえなければ！！！！！！

「……ふう、ようやく痛みが治まった。だが、どうしてももう少し早く来れなかったんだ？」

「仕方ないよ、僕はこっちに來たばかりだもん。君の様子や彼らの言葉から考えて、僕が最後っばいね」

彼の怪我をアロマセラピーや卵産み、癒しの鈴で治したら、何とか怒りは納めてくれた。



話を聞いてみれば、彼や他のポケモン達（といっても彼が見つけた何匹か）は3週間くらい前にこの世界にやってきたらしい。

そして侵入者といわれて攻撃を加えられながらも、こうしてみんな生き延びているという。どうやら僕たちのような存在がいらないせいか、悪魔や魔物と間違えられてるみたいなんだ。それでもまだ、誰一人として捕まっていないんだからすごいよね。

「それで、君はどうして追われてたの？ ……何か起きそうになるたびにその場所に行ったから？」

「ああ、どうやらそうらしい。その目撃が増えた結果、俺の種族らしく、災害を呼ぶ、生み出す悪魔といわれたよ」

「大変だよ、アブソル達ってさ」

僕も相当追われることはあったよ、ミュウだから。でも、それは別の意味で相当な経験をしてる彼……、アブソルをしみじみと見つめる。本来なら自然災害の予兆を感じ取るだけなんだけど、最近のアブソルって見境なく何か起きそうになるとそこに現れることが増えてるんだよね。

その結果がこれだろう。もう少しどうにかならないの？

「仕方ないだろう？ これが俺たちアブソルの宿命だ」

「ま、そうだけだよ。……あ、そういえばさ、ニヤースや山守りの2人を知らない？ 突っ込みがいなくて困ってたんだ」

「……全くお前はあいつらを何だと思ってるんだ。だが、残念ながら俺も見えていない。最近もクチートとパチリスがコンビを組んで逃げたのを見届けたのが最後だった」

「へえ、あの2人もいるんだ。ランダムに選ぶようにセットしたけど、結構濃いメンバーが選ばれたのかな？」

そう言ったら、その瞬間、アブソルがもの凄い勢いで僕を睨んできた。

「やはりこの原因はお前か！！！」

「あ、分かる？」

「お前しかいないとみんなで言っていたからな。ロケット団が出たと聞いた後のことだ。お前が何か奇妙な装置を作っているとも聞いていた。そのおかげでロケット団から逃げることもできたんだとは考えられたが……、……その分の弊害に関しては俺だけじゃない、みんな怒ってたぞ」

何もしてないのに襲撃を受けたから、やっぱり怒るよね。

だったら僕がこの状況を何とかするしかないか。

どうやら少しずつ何かが近づいてるみたいだし……。

「それじゃアブソルとはここでいったん別れようよ。僕が囹になるからさ」

「お前が囹？……何を企んでいる」

「え、何も企んでないよ？ただ、この状況を打開するために敵の懷に潜り込もうと思ってるね」

「……だから、それが企ん……、あゝ、もう分かったから俺は行くぞ！お前と付き合っていたら俺が突っ込みをする羽目になる！！」

そう言つと、アブソルはその場からすごい勢いで駆けだしていった。一瞬だけ、その直後に向かってくる彼らの足が止まったけど、僕がわざと姿を現して瞑想したら、すごい勢いで集まってきている。やっぱり力が高まったのを感じたみたいだね。

これは面白いや！ 懷に潜り込む前にちょっと遊んでいこうかな？  
あ、だったら『変身』しちゃおっと

この姿だと人間との接近戦は不利なんだよね、誰の姿を借りようかな……？

あ、とりあえずは昔旅に出てた時のハナダジムのジムリーダーの姿にしようっと！

アカネちゃんもいいんだけどさ、あの子の胸ってでかくて邪魔なんだよね、戦うには。

それに引き替え、彼女はハナダジム美人さん姉妹の「出がらし」だったから、体型はまな板並みにとってもスレンダー……（笑）

あ、本人は気にしてるみたいだけど、姿を借りる僕にはとっても好都合なんだよね、あの体型が。

まあ、本人に前に面と向かって話したらギャラドスぶつけられたんだよね……。

小回りは効きそうだし、それに、男より女の方が向こうも多少は油断するでしょ？

そして待っていたら、あの刀を持った女の子がまるで獲物を見つけた猛獣のように僕のところにやってきた。

「新たな魔物とは貴様だな！！ よくもこの街で騒ぎを起こし、しかも意気揚々とこの場所に現れたな！！」

何か、すごく怒ってる。

「うん、現れたわよ　私は世界の美少女、名はカスミ！　あなたはだあれ？」

「巫山戯るな！！　名前など語る必要はない！！　行くぞ！！」

あゝ、はね除けられちゃった。もう少し突っ込んで欲しかったよ……。

でも、やっぱり恥ずかしいや、世界の美少女なんて。

痛いだけじゃん……。

あー、石投げないでね。

そう思っていると、彼女は刀を僕に向かって振りかざした。だから、僕はそれを受け止めた。

「なっ……」

「ん？　何？　結構簡単に受け止めちゃったけど、何を驚いてるの？」

僕は両手からリーフブレードを出して刀を受け止めた。彼女からすれば手のひらから緑色の光の棒が現れたようなもので、しかもしっかりと攻撃を受け止めちゃってるもんだから驚いてても仕方ないよね。

でもさ、これだけじゃないんだよ。

「攻撃しないの？　だったらこっちから行くよ、答えは聞いてない

」  
「

彼女はその言葉に思わず刀を引いて、距離を取ろうとしたけど、僕の攻撃は既に始まっている。

「連続切り！！」

両手に生えたリーフブレードを握って彼女を斬りつける。といっても傷を負わせるわけにも行かないし、怪我をさせたくないから、当たりそうで当たらないギリギリの位置での攻撃を仕掛けていく。彼女が防げそうなところも含めてかな。その間に向こうは余裕を取り戻したみたいで、今度はちゃんと距離を取り、刀を瞬間的に横に流す。すると、彼女のいたところから斬撃が遠距離攻撃の形に変わって僕に向かってきた。これにはわざと当たっておく。結構痛かった。少しずつ自己再生してるけど、でも痛い。わざと当たったけど、当てられたように見せかけて、そしてわざと立ち止まった。

「隙有り！！」

彼女は刀を向けてくる。でも、僕は何もやってない訳じゃない。彼女が刀を僕に振り下ろしたが、刀は僕をすり抜けていく。

「なっ、何だと……！？」

刀を振り下ろしたはずなのに、何故か攻撃が通じなかった。そのことに驚きを隠せないでいる。

実はさっきの攻撃を受けた後に『テクスチャー2』で彼女の攻撃が効かないようにしたんだよね。

どうやらゴーストタイプになったらしい。

でも、嫌な予感がしたからすぐに戻した。

その直後、『斬魔剣』っていう声が聞こえて、攻撃は避けたけど、何かゴーストタイプに効果が抜群そうな技が駆け抜けていった。

「流石にアレは不味いや」

そんな時、今度は上空から気配が感じられる。ふと上を見上げると、杖や箒に乗った人たちがたくさん集まってきた。

「ふつ、これで貴様も終わったな！ おとなしく観念しろ！！」

救援が来たからか、彼女は心底っていうほどホッとしている。

「……よし、こうなったらこれで行くー！」

これ以上は僕でも分が悪い。実際は悪くないけど、相手の懷に潜る前に集中砲撃に遭いかねない。

僕は手を上にかざした。

その瞬間、彼女には何が起こったのか分からなかったみたいだけど、上空にいた人が一斉に落下してきた。

みんな、うまく落下の衝撃を防ぐような魔法？を使ってるけど、突然の落下に驚きを隠せないらしい。

使ったのは飛行ポケモンや浮遊ポケモンを地面に下ろす『重力』

だ。でも、ここまで思いつき落ちてくるとは僕も驚いたよ。

そしてその中で、何かとても大きな黒いマネキンみたいなものに  
乗っていた、あの金髪のお姉さんは……、……落下の衝撃を防ぎき  
れなかったのか、気絶していた。

しかも、また脱げてる……。

「うわあ、すごいや、あの人。脱げ女だ……」

思わず口走ると、周囲から鋭いまなざしが僕に集中してくる。

「チャンス！」

僕に視線が集まったのを見計らい、僕はアレを発動させた。

腰を振って、女らしいポーズでのセクシーポーズ！　そしてウイ  
ンク一つに投げキッス！

つまり『メロメロ』だ！

今はカスミちゃんの姿だから男に効くはず！

そう思ってたら、本当に効いた……！　何か僕が顔をしかめてし  
まう。だって、男の人たちの目が全員ハートマークになってるんだ  
もん。

周囲の女の人たちはみんなどん引きでした。流石にこれは厄介だ  
と思ったので、ついでにキノコの胞子もやっておいた。

「ふう〜、これで眠ったし、僕も行こうかな？」

もう少しで貞操が危うかったかな？

まあ、そうなったらカビゴンにでも変身しようかと思ってたんだけどさ。

あるいはルージユラに（笑）

そう思ってたなら、いつの間にか近くに男の人が立っていた。

「何処に行くのかな？ 申し訳ないが、君には聞きたいことがある。ついてきてもらえないかな？」

そこそこ渋い感じのひげ面のめがねの男の人だ。優しそうな顔をしてるけど、僕には分かる。相当な手練れだと。それに、これなら懷に潜れそうだ。

「いいですよ。それなら本来の姿に戻りますね」

僕はミュウの姿に戻り、若干男の人は驚いてたみたいだけど、危害を加えられそうにない様子だったから黙ってついて行くことにした。

そしたら、ふとつちよの男の人が現れて、何故かアブソルと一緒にいた。

何で君がここにいるの？ 逃げたんじゃなかったの？

逃げようと思ったが、こいつらが自分の言葉を俺たちの言葉に



合わせる何かを行って話しかけてきた。だから多少は俺自身の名誉を回復したところだ。それにしても……、お前は少しは手加減しろよな？

まあ、いいじゃん？ それじゃ、一緒に行こうか。何が待ってるか知らないけどさ、多分、話の分かりそうな何かがあるんじゃないかな？

僕は倒れている人々と僕とをあきれ顔に見比べるアブソルをなだめて、一緒に2人の男の人の後をついて行くのだった。

1・何処に行ってもあの種族ほど、宿命にとらわれた種族はいないもんだね〜

次回、僕の目の前には新たなポケモンが登場！！

こ、こんなに頭が長いポケモンがいたなんて！！！！

衝撃の事実！に頭を抱える僕は、後頭部が突出した謎のポケモンに戦いを挑む！！

その勝敗はいかに！？

「……って感じはどうか、アブソル？」

「お前……、アレはどう考えても……、……いや、アレもポケモンだな」

「やっぱりそう思う？」

「ああ、アレはヤドンの新たな進化系に違いない！！」

「だよね〜」

というわけで、次回、頭の長いヤドンをお送りします（嘘です）

2・まあ、いろいろあつたけどさ、僕の記憶は後頭部に全部持つて行かれたよ

「いやあ、この世界は飽きないと思うよ、うん。だって魔法使いがいる世界なんだからね」

「なんかノリノリだにや……」

「ノリノリだよ！ でもさ、ニヤースは今どこにいるんだよーっ！」

「にや？ にやーのことを心配してくれてたにや？」

「勿論！！ だって君がいないと僕が単純に痛いだけだもん」

「……………感動して損したにや。今回はコイツとこの世界の偉い奴が会う話だにや。レッツ、スタートにや！」

「ちよっ、それ僕のタイトルコール！！ 取らないでよーっ！」

「あ、その前に前回のあらすじにや」

「台本読むだけじゃん」

「いいんにやよ、これで」

えー、別の世界にやってきたミュウは『災害を生み出す悪魔』といわれて追われる仲間のアブソルを発見するが、銃で狙撃されたり剣を向けられたりと攻撃されることもあつた。だが、たった一人に問答無用で『流星群』を放ち、『恨み』で少女の身ぐるみをはがし、

『重力』で人々を地面に跪かせ、『メロメロ』で男どもを自分の下僕にしていく。そんな時に現れた男性に誘われ、ミュウは彼の後について行くが、ミュウは彼も下僕にしようと考えていた……。

「って、何処が前回のあらずじにゃーっ!! にゃーっ! いつの間にか脚本を書き換えたにゃー!!」

「え、ついさっきだよ? でもさ、これでいいじゃん」

「よくないにゃーっ!!!!」

2・まあ、いろいろあったけどさ、僕の記憶は後頭部に全部持つて行かれたよ

「ここ？」

「ああ、ここだよ」

謎の男の人に呼ばれて、これなら懷に飛び込めるって意気揚々についていった僕とアブソルがやってきたのは『麻帆良学園』っていう大きな学校だった。

ただ、ここに来るまでの間、僕たちに尋問の一つもない。アブソルもそうだったって不思議に思ってたみたいだし、この男の人は妙にポケモンのことを理解してる気がする。

なんていうか、この世界にはポケモンは僕たちじゃないはずなのに、もうずっと前からポケモンを知っているような、そんな気がした。

「学園長、連れてきましたよ」

途中で太っちょの男の人はさっき僕が眠らせた奴らのところに事後処理に戻っていき、今は僕たち3人しかない。何でもさっき連絡が入ったのか、あのままでは流石にいけないから事情を話すことも含めて呼んでくるってことみたい。そんなことしたらまたややこしくなる気はしたんだけど、

「それはないよ。きっとみんな分かってくれるから安心してほしい」

ってこの男の人は言っていた。だからそのつもりでいるけど、何

か腑に落ちない。

そして僕たちがたどり着いたのは『学園長室』っていう部屋だった。ここにいる『学園長』っていうのが僕たちを襲ってきた奴らやこの男の人たちのボスらしい。つまりこの場所の最大権力者だ。一体どんな奴なのかなって思う。ロケット団とかギンガ団のボスみたいにダンディな男なのかな？ アイツらは悪だったけど、内容がとにかくでかかった。だからそんなに嫌いじゃなかったよ、僕は。だって狙われはしたけどさ、僕とかとは対等に話せる奴だったもん。他の下っ端の雑魚や中途半端な幹部はその辺のところが全然駄目だったしね、特に借金コンビ。

「そいじゃ、失礼するよー……………お？」

一応サイコネシスでドアを開けて中に飛び込んだのはよかったんだけど、ノックするのを忘れたことを思い出すよりも早く、僕は入ってすぐにその場に浮いたまま固まった。そして思わずその『学園長』っていうのに近づいた。

僕の様子を不審そうに見ていたアブソルも、それを見てからは目を見開き、僕と一緒に『学園長』というのを近くでガン見している。

ねえ、この世界ってポケモンはいなかったんだよね？

ああ、何処にもいないはずだ。だが……………コイツ……………、なんて言うポケモンだ？

さあ？ ここまで後頭部の長い人間なんているはずないし、やっぱりポケモンが擬態してるのかもね

『学園長』という奴は老人のような姿をしてたけど、どう考えても尋常ないほどの長細い後頭部を持っている。

これは流石にあり得ないとかいいようがない。僕もアブソルも新種のポケモンを見つけたからか、結構心が躍っていた。

一体元はどんなポケモンなのかな？

ヤドンじゃねえのか？ アイツらみたいな感じだろ、シエルだーか何かが噛みついて伸びたんだろっよ

ああ、そっかぁ！！ それじゃ……きっとクチートじゃない？

おっ、それは可能性があるな！！ クチートがヤドンを噛みついて生まれた新たな進化か

結論、学園長はクチートがヤドンに噛みついて生まれた新種のポケモン……！！

そう思ってたら、

「わしは人間じゃー……！！」

学園長は怒り出した。

どうやら、こんなに人間離れた頭を持っているにもかかわらず、コイツは人間だったらしい。

ちよっと残念だった、せっかく新しい新種ポケモンを見つけれ

たと思っただから。

アブソルもそれは同じみたいで結構がっかりしている。

ま、世界中には僕も知らないようなポケモンがワンサカいるらしいから仕方ないかな。

「全く、お主らはわしを何じゃと思ってるんじゃない。で、わしじゃが、わしはこの麻帆良の学園全てを治める学園長じゃ。お主らポケモンが数ヶ月前からこの世界に現れだして、麻帆良は若干混乱しておる。その影響で勘違いした若い者達が攻撃を仕掛けてしまつて、本当にすまなかつたのう」

どうやら、『これ』は多少話の分かる人間らしい。

学園長は一度は怒つたものの、僕たちの様子からため息を吐き、すぐに話を始めた。

「いえいえ、そんなこ……ん？」

ただ、僕も形だけの返答を返しかけて、すぐにそれをやめた。

今の言葉は妙におかしかった。

ねえ、アブソル。君、ポケモンだって話した？ 別の世界のことも

……ん？ あ、そういえば俺、ポケモンだとは一度も言っていな。お前が作った転送装置の故障で気付いたら森にいたことは話したが……



僕とアブソルは不審そうな目で学園長を見る。

一度も口にしていないはずのポケモンのことを学園長が知っていたのだ。

しかも、別の世界から来たことも理解している。

ということは……！！！！

「なんだ。やっぱりポケモンなんだ！」

ごまかしたつもりらしいが、何十年と人に化け続けているメタモンやキュウコンの類だったかもな

「それにしてもその後頭部はどうやって進化したの？ やっぱリクチートに噛まれた？」

僕たちは再確認するように結論にたどり着き、

「じゃから、わしは人間じゃーっ！！」

再び怒られた。

「それじゃ、どうして僕たちがポケモンだって知ってるのさ。その様子だと特性や属性、技のことも含めて知ってるみたいだし、僕たちは話さなくても十分分かってくれるみたいだから面倒なことをしなくても済むんだけど、それって君がポケモンだって事の証明になるんじゃないの？」

「いや、学園長がポケモンではないことは僕が証明できるよ」

そんな時に助け船を出したのは、僕たちを連れてきた男の人、タカミチさんというらしい。タカミチさんが僕とアブソルに見せたのは古い写真だった。

でも、僕たちを驚かせるのに十分なものが映っていた。

「え、こいつってレントラー！？ デカツ！！ コイツって確か15メートルくらいのはずなのに、どう考えても5メートルの巨体じゃん！！ 羽まで生えてるし、もうグリフォンだよ……」

その隣にいるのは何ともガタイのいい男だな。横にいるカイリキーがみすばらしく見えてくるぞ

「それでもカイリキーも標準以上だよ。あれっ、カイリキーって腕6つもあつたっけ？ それにザングースにエビワラーまでいるし、何なのさ、この写真は……」

いわゆるイケメンっていう感じの赤い髪の少年の横にレントラーがいて、筋肉だるまの横にカイリキー、冷血そうな男の人の横にザングース、タカミチさんをもっと老化させた感じの男性の横には年老いた感じのエビワラーが立っている。ここに映ってる小さい男の子2人の片方はタカミチさんかな？ 何か自分の同類っぽく見える男の人もあるし……、写真の古さから考えて多分何十年も前なんじゃないかって思う。

「この世界でも一般的には知られていなく、魔物の一種として認識されていたんだが、実は20数年くらい前に君たちのようなポケモンが4体、こちらの世界に迷い込んだことがあったのさ。ここに映

っているのは『紅き翼』と呼ばれる世界の英雄でね、横にいるポケモン達がそれぞれパートナーだったんだよ」

どうやらこの世界ではポケモンとトレーナーの関係になると、トレーナーにだけは言葉が通じるようになるらしい。といってもテレパシーみたいなもので、他の人には言葉もそれを通じないということだ。ただ、そのおかげでポケモンの存在をこの『紅き翼』の人たちが認識し、僕の目の前にいる『ぬらりひょん』じゃなくて『学園長』のような一部の人も認識しているようだ。

「ふう〜ん、それで僕たちのことを知ってた訳か。アブソルの話を聞いて確信を持ったって感じ？」

「まさにその通りじゃよ。詳しいことを話す様子はなかったようじやが、幾つかの質問でナギから聞いておったことが確認できたから、お前さんも呼ぶことにしたんじゃよ」

何か最初からこの爺さんの手のひらの上で踊らされていたように感じちゃうのは気のせいじゃないと思う。

でも、ポケモンを知ってる人がいてよかったことには変わらない。

僕たちが無駄に説明しなくて済んで、めんどくさいことをしなくて済んだから本当によかったよ。

「それじゃ僕も自己紹介しておくよ。僕はミュウ、ポケモンの種族の中では古い方、僕の一族の遺伝子がきつかけでたくさんのポケモンが生まれたって言われてるよ。だからポケモンのあらゆる技が使えるの」

「ほほう、それはちとチートじゃな」

「うん、チートだよ。でも、それって結構面白いじゃん？」

僕がそう言つと、タカミチさんはものすごく当惑してるけど、学園長は楽しそうに頷いている。

もしかして、僕の同類？ 悪戯とか好きかな？ 話が分かりそうかも！！

内心すごく喜んでいたら、

ちよつとは自重しろ

ってアブソルに叩かれた。

ちよつ、だまし討ちのエネルギーで叩くのは辞めてよ！ 僕これでもエスパータイプなの！

悪タイプの技受けたら僕の力が弱まっちゃうし、こんなに可愛い僕の身体に傷がついちゃうよ！！

そしたら、

お前には自己再生があるだろ？

とはね除けられた。

さて、話に戻ろつか。

「でさ、僕たちのことはいいみたいだし、そつちのことを説明してくれないかな？ とりやえずさ、この街に魔法使いがたくさんいることは分かったし、この街が普通じゃないことは分かったよ。しか

も世界の英雄とかが存在する世の中なんてちょっと変わってるしね」

僕は学園長とタカミチさんにこの街のことを、魔法使いのことを聞く。

「この街は麻帆良という、小中高、そして大学を一環とした大きな学園都市なのじゃよ。そして、この世界には多くの魔法使いが存在し、世界のあちこちにあるゲートポートを経由して行くことのできる魔法界という世界が存在しておる。向こうからすればこちらの世界は旧世界と呼ばれておるのじゃが、とりあえず言ってしまうえば魔法使いがこの街にも多く存在しているのじゃよ」

つまり表向きは学園都市だけど、その裏側は魔法使いとか剣士とかみたいな人たちが住んでいたりする魔法関係の都市ということだろう。

「ってことは、この街には色々と普通の人が目に触れちゃいけないものもあるわけだ」

「さよう。まあ、色々と説明することはあるのじゃがな、この学園都市には君たちも見た、世界樹と呼ばれる大きな大樹が存在しておるし、魔法使いの関係者や、潜在的に魔力をたくさん宿しながらも魔法のことを知らずに生活している者もいる。そのうえ、この街の一角には図書館島と呼ばれる島一つがまるまる図書館という場所もある。そこには珍しい蔵書も多い。だからこの街の周囲にある結界を通過して忍び込んでくる侵入者も多いのじゃよ。時には彼らが魔物を使ってくるため、ポケモンの存在を知らない彼らが君たちを魔物と勘違いしてしまったところじゃ」

なるほどね。

つまり、普通に生活している人が気付かないところで結構魔法がらみの事件とかが起きてることもある、現実と非現実がごちゃごちゃした世界って事だ。

しかも、僕たちポケモンもポケモンの存在を知らない人が見れば、普通の動物が火を吐いたり空を飛んだりするわけで、魔物と勘違いしてしまってもおかしくはない。

学園長が言うには、この街の結界が多少の珍しいこと、不可思議なこと、非日常的、非現実的なものを普通だと認識させる効果を持っているから、大抵のことは何とかごまかせるらしい。

それでも限界はあって、その限界を超えたのがアブソルだったわけ。

自然災害だけじゃなく、トラブルが起きそうな場所に反応して至る所に姿を現していたから、魔法使い達に災害を生み出していると勘違いされてしまったのだ。

ただ、街の人たちにはアブソルって「大きな真っ白な『犬!』」と認識されていたらしく……、

俺が……犬……!?

アブソルはかなりショックを受けていた。

「あ、それじゃさ、魔法って秘密なの?」

「そうじゃよ。この世界では基本的に魔法は秘匿にしておる。じゃからわしたちは魔法の存在を一般の者達に知られぬように秘匿とし

ながら、影からの人助けを行ったり、誰かの手助けを行ったりと色々なことをしておるのじゃよ」

勿論、魔法を悪用される可能性があるからだったり、昔魔法使いを捕まえる事件が起きてたりとか、この世界の経歴と魔法が妙な形で組み合わさっているかららしくて、それで公表しちゃいけないことになってるみたい。

詳しいことは僕も分からないけど、とりあえず秘密にするって事だね。

「一応理解できたよ。詳しいことも追々聞いてくけどさ、それで僕たちはこれからどうすればいい？」

「それじゃが、とりあえず君たちの存在のことはナギ達から聞いている以上、ポケモンが魔物ではないという説明はできる。ここには紅き翼と行動を共にしておったタカミチ君もおるから、君たちがこれ以上危害を加えられることはないぞ。とはいったものの、危険じゃないと理解したところで解決したとも言えん。できればこちらの世界に迷い込んだポケモンを全員保護して、何かしらの保護者を見つけておくべきとは思うのじゃがな」

学園長は、監視の意味もつけるみたいだけど、こつちに來たバラバラになつてゐるポケモンをできれば一カ所に集めるか、あるいはトレーナーという名目の飼い主を見つけたらしい。そうすれば、ポケモンを危険因子扱いしている奴らもおとなしくさせられるということだった。『紅き翼』っていうのは、昔魔法界で起きた戦争で活躍したグループの名前みたいで、魔法使いの憧れみたいな存在らしい。だからそんな彼らのパートナーだった魔獣を探していた魔法使いもいたみたいで、僕たちポケモンの存在を知れば、態度をコロッ

と変えるかもしれない。それらを含めて学園長は保護したいらしいけど、多分、魔法使いがポケモンをパートナーにできる確率は低いだろう。

特にアブソルはかなり無理だと思う。

こいつはそれなりに結構強いポケモンだ。でも、コイツの種族の経歴のせいか、アブソルって人に懐かない。

その上、散々攻撃をしてきた相手の下に就くことを、プライドの高いコイツがするわけがない。

そうでしょ？

無論、そういうことだな。俺のことを理解できる者がいるならば別だが……

まあ、いないと思う。

僕もパートナーはあのニヤースで十分だし、唯一進化系でこつちに来てるはずの山守りの2人も好みがうるさいからパートナーがでる確率はかなり低いだろう。

アイリスはお人形みたいな子がいいって前に言ってたし、ミューズは頭で考えるよりも身体を動かすことの方が向いてる子がいいって言ってたけど、魔法使いってさっき見た限り、そういうのはいなかったしね。



そんな時だった。

廊下の方でバタバタと走る音がする。

学園長が言うには、さっき僕が倒した奴らが数人来たらしい。彼らは学園長室に入ってくるや否や、僕ではなく、アブソルを見つけると怒鳴り立ててきた。

「学園長、何で魔物がこの部屋にいるんですか！！ 早く処分すべきです！！ さもないとこの学園に災いが降りかかります！！」

ガングロの人がいうと、

「現にこの魔物を討伐する予定だった龍宮が負傷しました。そのうえ、高音先輩にも災難が降りかかりました！」

刀を持った女の子が続いて、

「そ、そうですね！！ あのようなことが起きたのはこの魔物の責任ですわ！！！」

僕がすっかり脱がせちゃった金髪の子が怒ってはふらつき、

「お、お姉様、しっかりなさってください！！！」

僕が見たときは箒を持っていたはずの女の子がその金髪の人を助け起こしている。

おいおい、僕は二の次ですか。

まあ、彼らにとって今日の獲物はアブソルだけみたいだし、僕は傍観でもしていようかな。

アブソルは至って無関心を装い、途中で一度だけ僕を睨んだ。

関係ない振りをするなって言ってるんだろう。

それにしても負傷ねえ……。

「……ああ、僕を攻撃して流星群の返り討ちにあった人か。それに僕が脱がせちゃった君って高音って言うんだね」

気付いたらそう呟いてたみたいで、ようやく彼らは僕の方を向いた。

金髪の人の形相が妙にすごいんだけど、何だろ……。 箒を持ってたはずの女の子から僕の仲間の気配を感じた。

アブソルもそれは同じみたいで、何か気にしてる。とりあえず今はせっかくのファーストコンタクトだからキャピキャピっとしとこつと！

「ヤッホー、僕、ミユウ！ 仲間と一緒にこっちの世界に迷い込んでちゃってさー、もう大変なんだー まあ、よろしく頼むよね！」

僕は「てへっ！」とつぶらな瞳を浮かべて話す。

でも、彼らは実に呆然と、当惑し、夢でも見てるんじゃないかと思っ  
ているようなそんな顔をした。

そういう顔できるんだって驚いて、思わず驚いちゃった。

そしたら、少しずつ話が分かってきたみたいで、その数秒後だった  
かな。

「学園長、コイツは一体なんですか！！！」

ようやく正気に返ったガングロさんが学園長に吠えたてる。

「き、貴様が龍宮を……！？　こんな小さいのがなのか！？」

失礼しちゃうな、この刀の子は。

「そうですか……、私をあんな姿に変えたのはあなたでしたのね！  
！！　よくも私の純情を……！！」

「お姉様、魔法生徒の恋人に裸を見られたくらいで落ち込まないで  
ください！　私はいつも凛々しいお姉様の方が……」

……どうやら、僕が二度目に脱がせた時に恋人に裸を見られたら  
しい。

僕のメロメロも関わり、どうやら破局寸前になっているようだ。  
ああ、これは申し訳ないことをしたね。

そう言いつつ、反省の色はなしか

えゝ、一応これでも反省してるんだけどなあ……。

聞くところによると、この人って結構強いらしいけど、負けると魔法で形成してる服の魔法が解けちゃうんだって。

だから『気絶』脱げる』ってわけで、ついさっき振られたらしい。

「ご愁傷様ゝ にしてもさ、君の妹さんが結構な毒を吐いてるのに、周りはスルーですか……。」

「実はじゃな、そこにいる者達も含めてのことなんじゃが……」

ここで学園長の話が始まった。

僕とアブソルは2人の後ろの安全圏に下がって話が終わるのを待っている。

最初はさ、当たり前だけど、

「ポケモン!? 別世界なんてそんなことを信じると言うのですか  
!?!」

「そんなことがあるというのですか!! そんな夢みたいな事を……」

っっていう風に反論された。

でもさ、魔法使いも同じようなものじゃないかって思ったよ、僕は。

そこにタカミチさんが入ってきて、あの写真を見せて、それからしばらくしたら4人とも呆然とした様子で僕たちを見ていた。

ただ一つ言えるのは、ようやく信じたらしい。

「つ、つまり……紅き翼のパートナーとされている誇り高き魔獣達と彼らは同じポケモンという生き物なんですね……」

紅き翼効果なのか、ガングロさんの声が震えている。

「で、では私の方々の保護者になりますわー！ 私立派な魔法使いになるための修行を欠かしていませんー！ 見事にパートナーになって見せますわー！」

金髪のお姉さんは勝手なことを言い始めた。

多分、他の魔法使いも言うだろう。

今更になつて、想像通り、態度をコロツと変えてきた彼女は僕たちに極上の笑みを浮かべるが、僕たちは呆れてしまって顔を背ける。

「あのさ、悪いけど僕たちを攻撃してきたうえに、早々に態度をコロコロ変える奴を信じろっていの？ ポケモンのトレーナーになる人物はポケモンと信頼しあえる人じゃなきゃ無理だし、悪いけど、あんたのポケモンになる気はないよ」

確かに

そう言ってやると金髪のお姉さんは、

「な、何故ですの！？ 立派な魔法使いになれる正義の魔法使いの言葉ですよ！！ 信じてくださってもいいじゃないのですか？」

と言ってきた。明らかに狼狽している。どうして理解できないのかが分からないという様子で、ガングロも同じ様子だ。

箒の女の子と刀の女の子は別の考えを持つてるような様子だけだね。

ただ、その時にまた新たな言葉を聞いた。

「……正義？」

「そうだ、我々魔法使いは立派な魔法使いになるために修行をし続けている。侵入者を倒し、悪者を倒して平和を守る。それが我々の正義だ！」

「つまり治安が乱れかけたり、コイツみたいに謎の生き物が災いを起こしてると考えられたら処分するのも正義として当たり前なの？」

「今はこうして無害だと分かったが、最初はそう考えるのが普通だった以上、処分するべきだと思って行動した。正義の元に行動していたのだから間違いだったとは思っていない」

「そうですね！ 人々を災いや悪魔から守ることも私たち魔法使いの指名ですもの」

そこまで聞いて、僕はもつと魔法使いの下に就くことが嫌になった。

アブソルも同じ様子なのが分かる。

つまりこの人達の語る正義って、自分勝手に思ってるだけの正義じゃないか。

自分たちが悪だと考えたら、それを悪として突き通し、正義の元に抹殺するということで、そんなのは正義じゃなくて傲慢だ。

学園長とタカミチさんを見ると、どうするべきか困っている様子なのが分かる。

まあ、間違っていると判断できることでもないけど、妥協点として出せる部分が決まらないんだよね。学園長が困ってた、迷ってた理由はこれだな。

「……あのさ、僕は昔から希少価値が高い存在だから珍しがられてたけど、コイツ、アブソルの種族は昔から忌み嫌われてきたんだよね、人間の勝手な思いこみで」

「忌み嫌われた……？」

うわっ、刀の方が身を乗り出してきてる。まさかこっちが反応するとはね……。

「うん、そうだよ。昔の人たちって真っ白な、純白とかの翼とか体毛とかを持った獣って神の使いか、悪魔って思ってたじゃん。アブソルの種族はまさにそうだし、しかもコイツラの種族は自然災害の予兆を感じ取る能力がある。だから自然災害が起きるたびにコイツラが目撃されていたわけだよ」

「そしてその度に災害を呼び寄せる存在だと決めつけられたのですか？」

「そゆこと」　しかも禁忌だ、タブーだなんて忌み嫌われててさ、殺戮された一族もあったと思うよ」

「禁忌にタブー……」

おおっと、どうやらこの刀の子には何かあるらしいね。

禁忌やタブーに反応してるよ。アブソル、君のパートナー候補じゃない？

巫山戯るな、誰が俺の触覚に傷をつけた奴と等……って、話を進める！！

わ、何だよ、アブソルの奴、デレやがって……。まあ、いいか。

「まあ、そういうわけでさ、人間が勝手に思いこみで迫害したかと思えば、今度は真逆の行為をするっていうのはアブソル達が何度も見てきてる人間の哀れなところなの。そして今まさにさ、それをこのお姉さんがやってくれちゃったわけ」

僕が金髪のお姉さんを指さすと、もの凄くいたたまれなさそうにしているお姉さんがいる。人間の、ある意味嫌らしい部分を自分が見せちゃったわけだからしょうがないよねって思ってたなら、今度はガングロさんが近づいてきた。

「それは申し訳ないことをした。しかし、我々が行っている行為は間違っているものではない。正義の魔法使いとして当然のことをし



ていただけなんだ。だから高音君のパートナーになつてくれないかな？　高音君は本当に……」

金髪のお姉さんが駄目だったから今度はガングロさんが頼みに来たかと思つたら……、流石に僕も呆れてしまったよ。

この人、僕の話聞いてたよね？

無駄だろうな、この2人にいつても何も意味はなさないだろう

あゝあ、アブソルもさじ投げちゃった。

で、どうしてくれようか、この状況を。

「あゝもう！！　だからさ、そっちの都合で勝手にパートナーになれっていうのはお門違いなの！！！！　こっちの世界には僕たち以外にも何匹か飛ばされてきてるから、そっちを当たってくれない？　といつても、一度でも攻撃した奴らだったら確実に不可能に近いけどね！！」

ガングロと金髪の頼む声は途中から更に大きくなったので、数秒後、僕はこう言い放った。

そうすると2人は残念そうな顔をしていたけど……、……そのすぐ後には、挨拶もそこそこに外に出て行ってしまった。

ちなみにこの部屋の外にも複数の魔法使いさんが何人かいたみたいだけど、その人達もいなくなってる。

「いや、みんな何とも滑稽だね」

「ふおつふお、今のはどう見ても君が彼らをけしかけたようにも見えたがのう」

「ま、けしかけたといえはけしかけたけどさ、ポケモンをパートナーにするために必要な道具もないのに捕まえられるかどうかが次の問題なんだよね」

僕は自分でもきつといやらしい顔をしてるだろうって思うくらいの顔を見せた。

「それはどうい……、ああ、そういうことか」

タカミチさんも理解できたらしい。金髪のお姉さんがさつさと出て行ったせいで取り残された箒の女の子と、刀の子と学園長はよく分かってないみたいだから、さつきの紅き翼の写真を撮りだして、ある場所を示した。

「まさかこつちの世界にもモンスターボールがあつたとは思わなかったけどね。まあ、きつと……僕たちの世界から飛ばされてきたんだと思うよ」

僕は理解できてない3人に、ポケモンをパートナーにするためには写真に載っているようなモンスターボールでポケモンを捕まえる必要があることを話した。それで捕まえなければポケモンは野生も同然、パートナーにしようにも野生動物と同じなのだ。

「だから仮に魔法使いがポケモンを捕まえたとしても、ポケモン達にとつては無理矢理捕まえられたようなものだから、どうなるかは

お先が見えちゃってるんだよね。」

もっと嫌らしい目を浮かべる僕だったけど……、

「あの……そのボールつてもしかしてこれのことですか？」

「あ、私も持ってます」

「へ……？」

くるっと首を動かしてみると、箒と刀の子の手には確かにモンス  
ターボールが握られていた。

思わず僕は「まもる」の壁を展開してアブソルのそばに逃げた。

でも、様子がおかしい。

まさかそんな……、そう思ったとき、それが当たった。

「あの……実はお姉様やガンドルフィーニ先生が魔物だと、捕獲だ  
と言ってらっしゃったので言いにくかったんですが……」

箒の女の子は、

「実は昨日、その、パートナーができちゃってるんです……」

驚く僕たちの前にポケモンを出した。

「チャモ！」

箒の女の子……魔法生徒の愛衣ちゃんが言うには、昨日アブソル  
を探していたときに樹から落下したポケモン……アチャモを捕まえ

ていたらしい。

「モンスターボールって言うんですね、これ。実は私、これを手に入れた覚えは全くなかったんです。でも、気付いたら手にして……」

しかもアチャモは助けてくれた愛衣ちゃんのボールに自分から飛び込んできたらしい。

ポケモンと人間の信頼関係ってというのはどういう形で生まれるかは定かじゃない。

でも、ポケモンが決めた以上、パートナーであることには変わらないんだよね。

ただ、ボールが手元にあつたって事は……。

「実は私も、気付いたら夕凧にストラップのようにつけていました。こういう事が知りませんが、クラスメイト全員が持っているようで……」

「な……っ、それは本当なのかい？」

「はい……」

「ふおお……、これはまた予想外じゃわい。……お主達から見て、これはどういう事と思うかのう？」

とある予想が僕の頭に生まれた。

聞くところによれば、タカミチさんが担任をしているクラスの生徒が一般生徒、魔法関係者問わずボールを所持しているということだ。それに紅き翼の人たちも気付いたらボールを持っていたという。

つまりそれから考え出せるのは、どのポケモンが誰のパートナーになるのかは定かじゃないものの、既にポケモンのパートナーになれる存在は、ボールが手元に出現したものに限定されるって事じゃないかな？しかも、パートナーになれるポケモンが自分たちもポケモン側も理解できないし、何も知らないけど、このボールは理解できてるみたい。というのも、僕がしつぽをさつきから刹那ちゃんのボールの

開閉装置、つまり、ポケモンが触れたら即刻ボールの中に吸い込まれちゃうボタンに当たってるんだよね。でも、何も変化がない。アチャモの時は普通に動いたそうだし、多分、ポケモンがこっちに飛ばされてきた関係で、何か神のような力が働いたんだと思う。

「僕たちの世界にもそういう神様系のポケモンがいるからね、そんな感じで力が働いたんじゃないのかな？」

「つまり、ポケモンがこちらの世界にやってきた時に、誰と誰がパートナーになるのかは運命として決められ、その時のためのボールがパートナーになれる人間の元に現れたということかな？」

「うん、それしか考えられないよ。本来のボールだったらここをさわったら即ゲットなんだもん。それが動かないって事はさ、僕は刹那ちゃんのパートナーじゃないって事だもん」

そういうわけで、僕は簡単にゲットされるわけでもないと分かったせいか、結構安心した。

僕のパートナーになる人がどんな人なのかは分からないけど、正直日々をグダグダと過ごすことを快く思ってくれるパートナーがいいると思うよ、うん。

そういつたら、何故かタカミチさんに苦笑されたけど。

その後であつたことを簡単に言えば、愛衣ちゃんはアチャモのパートナーになつてゐるわけだから、とりあえず100匹くらいいるんじゃないかっていうことだし、学園長が魔法でちょよいと表を作り出して、その中のトレーナーが決まっていなポケモンの欄に僕とアブソルを、パートナー関係が成立しているアチャモと愛衣ちゃんをその欄に書き入れた。こんな感じでパートナーが決まっていくなだろうと思う。ただこの時、僕はアブソルのいったクチート達のことはいわなかった。一応個人情報だし、魔法使いが見つけたら入れればいいよ。

「それでは私はここで失礼します」

「あ、私も失礼します！」

一通りのことが終わると、魔法関係者には後日通達もするらしく、刹那ちゃんと愛衣ちゃんは部屋を出て行った。聞けばまだ中学生なんだってさ。もう夜も遅いもんね。

俺も今日は失礼させてもらうぞ

その後でアブソルも窓を丁寧に触覚で開けて出て行った。

ただ差、君のパートナーってもう何となく予想ついてんだよね

ほっとけ、まだ俺にも向こうにも心の準備ができていない。特に彼女の心の整理がついていない以上はな

どうやらアブソルも何となく分かつてるようだ。

そりゃね、アレだけボールからポケモンにだけ分かるような奇妙な音が発せられてんだもんね。

そして学園長とタカミチさんと僕が残った時点で、学園長は唐突にそれを告げた。

「お主、ポケモンに関しても気になるじやろう？ この学園で生徒として過ごしてみぬか？」

「生徒？ …… それってもしかして」

「無論、ポケモンのパートナーのことがある以上はそれを説明できるものがクラスに一人いるべきじやろうからな」

唐突だったけど、何となくタカミチさんはそれを学園長が言うことを予想できてたらしく、また、僕も似たようなことを言われるんじゃないかとは思ってた。

そういうわけで、僕は女子生徒に変身して、2・Aに転入するこ  
とが決まった。

だってさ、勿論、OKに決まってるじゃないか！

こんな面白そうなことはないよ！

というわけで、僕の新たな生活が始まろうとしていた！！

2・まあ、いろいろあったけどさ、僕の記憶は後頭部に全部持つて行かれたよ

とりあえず、今回の第2話が終わり、次回からミュウは女の子として2・Aに転入することになりました。

この時点でまだネギは来ていません。ネギが来る数ヶ月前つていうところですよ。

しかも学園長はミュウにもネギのサポートをさせようと考えている様子ですが、ミュウは気付いていませんし、もし知っていても言葉には出しません。

ミュウはミュウなりに楽しむだけですから。

さて、ネギまキャラクターとのパートナーになるポケモンを募集しているわけですが、今回、それにも触れました。

ご都合主義と思っちゃっていいです、そうじゃなきゃできませんから。

募集の方はまだまだ続けていく予定ですので、こんなのがいいとというのがありましたらお教え願います。

とりあえず、カゲシンさんのリクエストも含めて決定したメンバーがいるので、キャラクター名だけ明かしておきます。

早乙女ハルナ、桜咲刹那、鳴滝風香、鳴滝史香、四葉五月、佐倉愛衣の以上6人は決定しました。



それ以外に関してはまだ決まっていませんし、迷い中だったりしますので、ドシドシご意見ご感想もお聞かせ願います。

### 3・僕の予想の範疇を超えることって一日に普通は何回も起きないもんだよ、普

「さあ、今回も行ってみよう!」

「……えらく元気がいいにや」

「当たり前じゃん、学校だよ! 休み時間に昼休みに学食にクラブ活動に……」

「……勉強する気はなさそうにや。って、おみゃー、性別はないはずにや?」

「うん、ないからどっちでも行けちゃうの さて、誰の姿になるのかなあ」

「……できるだけ既存のキャラクターにかぶるのは辞めた方がいいにや」

「そのつもりだよ? あ、でも……実は決めちゃったんだよね! これ!」

「にや!? これ……思いっきり既存にや」

「うん、そうだよ! でも、彼女が一番いいかなって。まあ、大丈夫だよ、大丈夫!」

「それを言ってるのが一番だいじよばないはずだったにや」

「でも、大丈夫!」

「はあ……、この姿で言われるとポツチャマがどれだけ大変だったかも分かるもんだにや……」

「あはははは……」

### 3・僕の予想の範疇を超えることって一日に普通は何回も起きないもんだよ、普

ミュウが麻帆良学園に転入することが急遽決まった次の日のことだった。

彼（？）が転入するクラス、2・Aは麻帆良学園で一番騒がしく賑やかなクラスとしてある意味有名でもあり、それはこの日も変わらない。

「聞いて、聞いてーっ！！！！いきなりだけど、うちのクラスに転入生が来るんだってーっ！」

「ホント！？」

「うわっ、すぐく時季外れじゃない？」

「そんな話初めて聞いたんだけど？」

赤いパイナップルのような髪型の少女……朝倉和美がカメラとメモ帳を片手に教室に飛び込んでくると、彼女の言葉を聞きつけたクラスメイトが一斉に彼女の元に集まってくる。

「私も知ったのは今日の朝だったからさ、まだ何も情報は入ってないんだけどね」

「えゝ、朝倉、報道部じゃん！！」

「そうだけどさ、最近妙な事件とかが続いてるからそっちの取材とかで忙しいんだよね」

無論、その事件の原因がポケモン達であるのだが、ポケモンのことを知らない彼女たちは不可思議な事件を「よく起きてる」の一言ですませている。

麻帆良にある結界の効果『認識阻害』によって特に気にしないように施されているからだろう。

「それにしてもさ、誰か私の机、いじった？」

「え、何で？」

「うん……、最近このクラスってよく机と椅子の並びがおかしくなってるでしょ？　なんか私の机の中がごちゃごちゃになっててさ……」

朝倉が机の中の置き勉の教科書などをまとめながら言つと、それに同意するものが何人も現れていく。

「そういえば、教壇が逆さまだったこともあるよね？」

「机と椅子が全部後ろむいとったし……」

「妙に並びが歪んでることもあったよ」

”最近ムーちゃんと練習してるとなっちゃうんですよ”

「最初は風香達の悪戯だと思ってたけどさ」

「僕たちはそんなことするはずないじゃん！！　史伽も何とか言っ……、アレ？　史伽がいないし、何か変な声が聞こえなかった？」

同意しては一斉にしゃべり出すクラスメイト達だが、その時に風香が気付いた。最初はいつもならすぐに続けて声を発するはずの史伽がいないことに疑問を思ったが、それよりも前に知らない声を聞いたような気がしたのだ。

「え？　何のこと？」

「空耳じゃないの？」

「それに、今日は風香、一人で来たじゃん」

「へ？」

風香は疑問の声を上げるが、彼女たちは謎の声を全く聞かなかったらしく、不思議そうに風香を見ている。また、風香は気付いていなかったらしいが、今日は鳴滝姉妹は風香だけが先に投稿したようだ。

「おかしいなあ……、部屋を出たのは一緒だったはずなのに……」

「駅でも一緒だったわよね？」

「最近の散歩部も休んでるって聞いたけど？」

「そうなんだよ。全く一体何………あ、また捨て猫でも見つけてこっそり飼ってるのかも……」

風香はそう呟いていると、こそこそと教室に入ってくる史伽の姿を見つけた。そのため、すぐに彼女の元に走っていく。それを横目で見ながらも他のクラスメイト達は会話を続けているようだったが、この日はいつものように

集まる運動部とチアリーディング部の面々は別として、妙にクラスの賛同率が低い。いつもよりも集まる人数が減っているように感じられる。それに最初に気付いたのは朝倉だった。

何か人が少ないと思ったら、今日は幾つかのグループができてんだ

朝倉は話しながら周囲を見回すと、クラスには朝倉の挙げた話題に普段なら乗っかってくるはずの生徒達がそれぞれグループを既に作って話しているようで、朝倉の言葉にも多少耳を傾けた程度だったようだ。今日に限っては噂話が

好きなハルナも入ってこない。そう思って彼女の方を見れば、珍しく机に突っ伏している。

またネタが出てこなくて悩んでるのかな？

彼女はよく妙な漫画を描いていることが多い。朝倉はそう判断すると、クラスメイトが新たに話題に出した『世界樹に出現した、動く謎の花』の話の輪へと入っていった。

「私が聞いた話だと赤い小さな花がよく動いてるらしくてさ……」

朝倉が取材内容の一部を話し始めると、登校したての生徒がまた少ばかり集まってくる。その中には先ほど来たばかりの史伽と、史伽にはぐらかされた風香の他に、神楽坂明日菜と近衛木乃香の姿もある。ただ、木乃香はそこで

ふと幼なじみの姿を徐に探した。だが、鞆はあれど教室にはいない。当たり前だ、刹那は珍しく、護衛担当の木乃香から少し離れた場所……、教室を出たすぐの廊下に立っていた。

「むむっ？ 龍宮殿が入院でござるか？」

「ええ、ちよつと昨日怪我をしまして、数日ほどで退院できるそうです」

刹那が話している相手は同じクラスの長瀬楓だった。

「あの龍宮殿が入院とは……また何かあったでござるか？」

「い、いえ……、それはこちらの事情でして、その……」

刹那が理由を話ずに話せない様子になると、楓もこれ以上は聞く気がないらしく、黙って首を振る。すると、刹那も幾分かは安心したようだ。バカブルーの称号を持つ楓だが、全てにおいてバカではない。

「それにしても最近は妙なことが続くでござる。龍宮殿の入院もそうでござるが……」

楓は不意にクラスの一カ所に目を向けた。そこにはクラスメイトの中華系少女、古菲の姿がある。普段なら噂話をしている朝倉達の中に混ざっているか、適当な場所でカンフーの練習をしているはずの彼女が、今日はやけにおとなしい。

いや、ここ最近、どことなく落ち込んだ様子を見せていたのだ。彼女と龍宮、刹那、楓の4人はクラスの中では武道四天王と呼ばれており、なかなかの強者と言われている。だからか多少の交流もあるようで、刹那も心配そうな顔をする。

「確か数日前からでしたよね？」

「そうでござるよ。修行仲間ができた喜んでいたでござるが……」

「また古さんの練習に付き合わされて逃げ帰られたのでは？」

「いや、今回は逆に古が振り回されたそうでござるよ？」

「え、そうなんですか!？」

思わず刹那は驚いた。古菲は小柄な体格の割にもの凄いパワーを持つており、大柄な体格のいい男を軽く一撃で吹っ飛ばせる程だ。

クラスメイトからはそれでもバカの認識をされているが、中国武術研究会では大学生やプロの格闘家を差し置いて

部長と名誉顧問の称号さえも貰っている。そのため、一度修行を始めればその内容は普通の格闘家でも顔をしかめるほどのハードなものだったりし、一度付き合ったことのある刹那もそれはそれは大変だったのだ。そんな修行を軽くこなし、逆に

古菲を振り回せるものが現れたこと事態が恐るべき、である。

「一体、どのような人なのでしょううか？」



「拙者も古からよく聞いてなかったでござるが、自分よりも小柄らしいでござるよ」

「く、古さんよりも小柄、ですか……」

その体格を聞き、どんな猛者かと想像をする刹那は更に絶句する。そんな彼女の視線の先では、クラスにいるもう一人の中家系少女、超が古菲の元に近づいていた。彼女の手には蒸籠が一つだけ乗っている。その横にはその肉まんの制作者だろう

四葉五月の姿もあるが、いつもと違って妙にビクビクしているような気がした。

「古、どうしたネ。元気ナイヨ？」

「超……、実は人捜しをしてるアル。でも、何処にもいないア……今日は蒸籠一つだけアルカ？」

古菲は蒸籠からこぼれる肉まんの匂いで顔を上げたが、その蒸籠が普段は5、6個積まれているにも関わらず、今日は1つしかない。

これには古菲でも疑問に思っただけらしい。

「一つだけヨ、最近うちの店舗で食材がよくなるネ。防犯カメラには怪しい奴は写てなかつたシ……、五月も見えてないと言てたヨ」  
「え、あ、あの、はい、その……私も全然気付いてなくて……」  
「………というわけネ。だから申し訳ないが、今日の肉まんは一つだけネ」

超は横にやってきた五月に振ると、五月は普段のおっとり大らかな彼女のそぶりとはかけ離れた、妙なりアクションを取っている。その様子を不審に感じる超だったが、それを顔には出さずに古菲に肉まんを差し出した。

いつもならここにいるはずの超の店の仲間の葉加瀬は今日は遅刻するつもりなのか、まだ教室にやってきていない。超が言うには最近新たな研究テーマが決まったらしかった。超が再び五月に目を戻すと、彼女の様子は

いつもと同じようになっているし、古菲もお腹が空いていたのか、蒸籠1つ分の大きさの肉まんを美味しそうに食べ進めている。彼女もまたいつもと同じ様子だった。

「ところで人捜しと言ってたが？」

「そうアルヨ。修行仲間がいきなり姿をくらましたアルヨ！！その上、数日前から格闘関係の同好会や部活に所属している猛者が通り魔にあって倒されているアルヨ。これはまだ内密だから触れ回らないで欲しい事アルガ、ワタシも狙われてるとかで

当分研究会の活動を自粛を余儀なくされたアル。だから修行できなくて本当に悔しいアル！！」

「ほほう、それは確かに古菲にはきつい事ネ……」

超は話題を振るとすぐに熱くなり始める古菲をなだめていく。それは隣にいる五月もフォローしてくれているからいいのだが、通り魔事件のことは古菲動揺中国武術研究会に所属している超も初耳だった。活動が休みになったのは聞いていたが、

他の部活とブッキングしているために特に気にしていなかったのだ。ただ、それを普通に話したせいか、既に朝倉が聞き耳を立てていたりもする。古菲に秘密を行わせることの方が難しいのだから、ばれることは想定内だと超は思っておくことにした。

それにしても通り魔事件力。……刹那さん達も初耳の様子ネ、これはただごとじゃないかもしれないヨ

超は古菲の発言直後に、刹那と楓が当惑した表情になったのを見

逃さずにいたのだ。楓は兎も角として、刹那が何も知らされていないと言うことは、魔法関係者もあまり知らないことなのだろう。このクラスにはもう一人魔法生徒がいるが、そちらは朝倉達の会話にはまっぴり気付いた様子もないため、超も無視している。そんな中、超は古菲の発言直後に周囲が主だった反応をあまり見せなかった異変に気付いていた。超は学年一頭が良かったために、この違和感には先ほどの朝倉と同様、ちゃんと気付いていた。それだけ、クラスで色々なことが同時に起きているのだろう。超が視線を巡らせると、不意に目に映ったのは教室前方だった。

いいんちよが珍しく図鑑を見てるネ。魚の図鑑を食い入るように見ているとは、これは新たな趣味に目覚めた力ナ？ それはそれで面白いが……

超が珍しげに眺めたいいいんちよこと、2-Aのクラス委員長の雪広あやかは本当に熱心に、かつ、かなり食い入るように魚の図鑑を読み続けている。いや、見ていると言うより何かを探し続けているといった感じだろうか。

それは彼女のルームメイトの那波千鶴と村上夏美も同様で、千鶴は花の図鑑を、夏美に至ってはマイナーな魚の図鑑を熱心に見ていた。

「千鶴さん、夏美さん、どうでした？ 見つかりましたか？」

「ううん、全然だよ、いいんちよ」

「私のところも同じ。ねえ、あやか、私は動物の図鑑を見た方がいいんじゃないかしら？」

「それもそうですが、アレは蕾みみたいな植物のように見えましたもの。それに、先日飼いだめたあのお魚さんも見たことありませんでしたわ。あのような姿では可哀相ではありませんか」

「まあ、確かにみすばらしい姿だったよね。水槽の中で生きてるのがすごいって思ったよ」

お金持ちの実家の次女でもあるあやかはどうやら部屋で魚を飼いはじめたようだ。ただ、話を聞けばその魚は捨ったらしく、夏美の発言によれば、かなりみすばらしい姿をしているらしい。だが、何かを感じ取った

あやかはそれを飼うといいだし、結局水槽の中で飼い始めていた。ただ、そのみすばらしい姿を何とかできないかと治療法を探すことに決め、まずは種類を把握しようと言うことにしたのだが、なかなかそれが見つからない。

「千鶴姉が花壇で見つけた植物だって今はもういないでしょ？」

「やっぱり動物じゃないかな？」

「そうですね、まずは探すよりも調べる方が先ですわ！」

「うん、分かった。もう少し探してみるよ。後で本屋ちゃんにもまだ図鑑がないか聞いてみる」

「私も図書館島で図鑑を見てこようかしら。図書室の図鑑では限られそうですね」

そう言っただけ千鶴が図書委員の宮崎のどこを探すと、彼女は教室の後ろの方の席にいるのが見える。ただ、そこに歩きかけようとしてすぐに思いとどまった。のどかは今、いつものように同じ図書館探検部の夕映とハルナと一緒にいるのだが、

様子が何処かおかしい。ハルナが突っ伏しており、それを普通ならほおっておくはずの2人が励まし続けているのが見える。

何かあったみたいだし、今は話しかけない方がいいかもしれないわね

千鶴はそう思い、再び図鑑に見入り始めた。

さて、教室の後ろにいるのどかたちだが、本当に懸命にハルナをなだめ、励ましている。

「ハルナ、大丈夫ですよ。きっと何とかなるです」

「そうだよ、親切な人が見つけてくれるかもしれないよ」

「駄目……！！ そんなことになったら身の破滅よ……！！」

「いえ、ハルナの場合はだいぶ前から身の破滅だったです。それが今回、そうなりかけているだけです」

「夕映！！ 本当のことを言っちゃ駄目だよ！」

「しかし、のどか。ハルナの場合、あんなものを私たちに手伝わせた上で描いた以上、いつ身の破滅が起きてもおかしくありません」

「でも、そうになったらハルナが可哀相だよ！！」

「だからこうして少しはマシになるように励ましてるんです」

「お前ら、何処が励ましてるんだ……？」

離れた場所から見ているものには励ましているようにも見えただろう。だが、会話の内容を聞く限りだと夕映ものどかかなり存外なことをハルナに言っている。夕映の言葉にたみかけるようにのどかが『本当のこと』と言った時点でそれは完全に存外扱いだ。

それを唯一近くで見っていた千雨は思わず声を上げていた。先ほどまではニヤニヤした様子でパソコンに向かっていた彼女だが、今はそのパソコンを閉じている。ただ、最近は彼女の趣味が異様に発達し始めているらしく、実のところファンが急上昇なのだとか。

「千雨さん、私はこれでもハルナにいつも言い聞かせてきたつもりです。でも、こうなってしまった以上は諦めさせるのもいい方法だと思つのです」

「……………何があつたんだ？」

夕映が真顔で言うと、千雨はハルナがとんでもないことをしでかしたのだらうと察し、声のトーンを落としてそつと夕映に尋ねる。朝倉が何処で耳を澄ませているかも分からないからだ。のどかは言い難そうだったが、夕映はすぐに教えてくれた。

「実はハルナが前からBLにはまっていることはご存じだと思うですが、最近GLにもはまり始めまして……」

ハルナが描く漫画が大抵は普通ではないBL関係であることはクラスでも周知の事実だ。それでも絵がうまいことも有名ではあるが、大抵はBLをはじめとした漫画を描いているため、それをやっているときの彼女には図書館探検部ののどか、夕映、木乃香くらいしか近づこうとせず、突っ伏しているときはネタ切れが起きてうなづいているのだという認識がされている。そんなハルナがGLに手を染めたと聞き、千雨は嫌な予感を感じた。ここで何で千雨が知っているかは問題にならない。席が近いから聞こえてしまっただけだと知っていると考えたからだろう。不意に夕映が教室の2点をチラ見する。それに千雨が続き、その2点を見て、思わず顔をゆがめた。

「おいおい、よりによって神楽坂といいんちよかよ……」

クラス内のいわば犬猿の仲であり、一部のものから見れば目映い青春の中の親友という扱いの2人がハルナの漫画のモデルのようだ。千雨はもう一度明日菜の方を見ると、何を話しているのかの大凡を察したらしい、木乃香が苦笑した面持ちで夕映や千雨達を見ている。この様子から木乃香も知っていると見ていいだろう。

「のどかと木乃香さんはヤバくない部分しかやっていませんが、私は大半を手伝いましたので、その……」

夕映は机から『締め鯖コーヒーマックス、抹茶アボガド風味』というジュースを取り出して飲み始め、

「今千雨さんがこのジュースのパッケージを見て反応したその顔が更に歪むくらいのもものが描かれてるです」

唐突にそう言い放った。ちなみにこのジュースは味覚が破壊されるくらいのパンチが効いていて、逆に後味が面白く、飲み始めるとはまってしまふジュースとのことだが、今のところ夕映以外に挑戦した者はいないそうだ。聞くところによれば、夕映がコップに入れて放置したところ、謝って飲んだ図書館探検部の部員が救急車で運ばれたため、そのジュースの入ったケースがごっそりと捨てられたという噂もある。あくまでも噂だが……、このジュースを引き合いに出すくらいだ。相当なものなのだろう、千雨は想像できる範疇にないことを知って思わず机に突っ伏した。

「早乙女、お前は何でそんなものに手を出した……」

「ハルナが言うには相当ヤバイものを描いて気持ちを切り替えたらBLが更に深いものになるとかどうとかで……」

「で、作品ができて、それを落としたんだな？」

「そうです。しかもその手の同業者に製本のために封筒に入れたのですが、その封筒を落としたですよ。封筒は封はされてるですが、外には住所が書かれていない上に、ハルナの名前やら何やらは住所カードと一緒に封筒の中でして……」

もし開けられたら普通の人が見られるようなものじゃないものを見る羽目になるわけであり、警察にも届けられないし、おおっぴらに探することもできない。そのうえ、明日菜とあやかの顔はリアルに本物そっくりに描いてしまっているという。それを見てここに尋ねてくる

生徒もいる可能性が高いし、教師に見られたらもつとヤバイ。そのためどうしたらいいかも分からず、この状態になってしまったというわけだ。

「なるほど、そりゃ身の破滅だな」

「分かってもらえたようですね」

「そりゃそうだろ、どうしていいんちよと那波辺りにしなかったんだ？ あのだったら多少深くてもあり得そうだろ？」

千雨は明日菜が切れてあやかがパニックになった状況を想像し、笑ってすませ、同時にあやかをなだめそうな千鶴の名前を挙げるが……、

「その……」

「うふふふ、何の話をしているのかしら？」

いつの間にか千雨の背後にはとんでもないオーラを立ち上らせた千鶴が立っていたのだった。

この後、彼女に連れて行かれた千雨がボロボロになって帰ってきたという。

後から聞いた話によれば……、

ハルナも最初はそのつもりだったそうですが、いつかぎつけたのか、那波さんが部屋の外のブレーカーから全てを止めてしまった上に戻せないように接着剤で固めて妨害してくるという暴挙に出まして、それを抗議に出た隙に、今度は入れ違いに部屋に侵入してハルナの漫画を

かすめ取っていいんちよさんに見せようとしたですよ。まあ、私と



のどかが聞いたのはその後でしたが、ハルナが真っ白になってましたからね

と、どういふ感覚を持っているのか、当の昔に散々妨害されていたようだ。

それならば、どうしてあやかを残しているのかというと、

あやかはどうちでもOKよ

という、正直「……」な言葉まで残されたからだったりする。

そんなクラスメイトを傍観するのが後3人いた。

そのうちの2人はたった今、予鈴ギリギリになってから登校してきた。

「マスター、やはり各所から反応があるようです」

「やはりか、しかし何故うちのクラスなんだ？」

ガイノイドの絡繰茶々丸がそういうと、マスターと呼ばれたエヴァンジェリンは面白くなさそうに机にどっしりと座る。

「やはり\*\*\*さんが言っていたとおり、このクラスだからではないでしょうか？」

「だとしても呆れを通り越すな」

茶々丸の言葉にエヴァはハッと鼻で笑う。

「……………」

その後ろをクラスで全く一言もしゃべらない、謎多き少女のザジが変わった鳥を肩に乗せて登校してきた。曲芸部に所属しているため、手品の道具かサーカスの仲間なのだろうと当たりをつけているのか、クラスメイトは特に主だった反応をしない。また、その小さな丸い、緑色の身体の鳥も黙って教室を眺めていた。

そうして、朝の時間はゆっくりと過ぎていった……………。

「初めまして、森山美優です。よろしく！」

朝礼時、僕はみんなに挨拶をした。

勿論、女の子に変身している。当分はこの仮の姿で生活することになりそうだけど、正直面白いと思う

ただ、このクラスって何なんだろうね。妙な力をいっぱいあちこちに感じるし、明らかにポケモンの気配をあちこちから感じるんだもん。

一体、誰がゲットしてるのかな？って思ったよ。分かる範囲でも関わってるだけだとしても10人はくだらない。

はっきり言って、予想の範疇を大いに飛び越えてるね。正直、笑いが出てくるよ。

「美優さんはこれまでに旅行好きのご両親とずっと海外を飛び回っていたそうですが、おじいさんの薦めで麻帆良学園に転入してきたそうです。仲良くしてあげてくださいね」

僕の隣にいる20前半くらいで巨乳の女性の先生が話している。

彼女は一応魔法のことを知ってるっぽい普通の先生みたいで、昨日いたタカミチさんが出張でいないから、代わりなんだってさ。

ちなみに僕のプロフの設定は大半を学園長が考えたらしい。おもしろ半分なところもいっぱいあるけど、正直面白かったから採用した。

「くくくくよろしく〜〜!!」「くく」

今日からクラスメイトになるみんなも元気に挨拶をしてくれる。

何か突っ込みどころの多い人がいっぱい……って、早々にポケモンを見つけるってどうなんだろう？

一番後ろの席に一匹いるじゃん!!!

あ、目をそらしやがった!!

僕が顔に出さずにそう思っていると、質問タイムに入ってた。

気付くと僕の前にはパイナップルみたいな頭のお姉さんがいる。しまったなあ、もう少し巨乳で背の高いキャラにしておけばよかったかな？

今の僕の姿は黒くて長い髪をした、ドレスアップして髪の毛を整えればヒロインっぽく映える感じの女の子……、シンオウのミシロタウンの女の子と同じ姿になっている。オプシオンをつけようか迷ったんだけど、正直変につけると動きにくいかもしれないから彼女にした。それにこの姿ならニヤースも気付いてくれるはずだと思う。散々ロケット団の襲撃をかけてるから覚えてるんだと思うよ、多分。

で、今適当に質問を答えていた。多少は学園長が考えついたプロフを僕が少しやばくない程度に改造して話してる。

でも、一人のクラスメイトの姿を目にした時、とある直感が働いた。

多分、彼女が持っているポケモンはアイツだ。だとしたら……、

「美優はなんて呼ばれたい？」

「うーん、よくみんなには美優だと言いつらいからミュウって呼ばれてたの。だからミュウでいいよ」

「了解、ミュウね。それじゃ、趣味とかは？　この中で多少は趣味がかぶる奴もいるんじゃないかな？」

「うーん、身体を動かすのも好きだけど、私は散歩と食べ歩きと機械いじりが好きかな。最近機械いじりをしてないし、そう言うのが触れられる場所があったらいいんだけど……」

「だってさ。超、葉加瀬、ちょうどいいから放課後に案内してあげなよ？」

僕は一応機械いじりは得意だ。

だから、彼女のためにも趣味はこれにした。チラッと見ると、彼女が若干、何らかの反応を見せたような気もする。

「それじゃ、席は早乙女さんの後ろね」

しばらくして質問タイムも終わり、授業が始まった。

僕の席はさつきからうんうん唸って突っ伏してる、妙な触覚みたいな髪の毛を持った早乙女ハルナさんの席の後ろだ。

彼女からはポケモンの反応はしないけど……、……近々出会う可能性がある未来が一瞬見えた。誰だったのかは不明だけどね。それより……、

”おい、ネイティー!! さつきからこの僕を無視するとは、いい度胸だよな?”

僕は前の席にいるザジさんの肩に止まってるポケモンに声をかけた。

どうやらザジさんのパートナーらしいけど、また君も変わってるよ。見た感じ、ザジさんも侮れなさそうなタイプだし、ネイティがパートナーに選んだって事は相当、すごいんだろうね。そう思ってたら、

”無視じゃなくてシカトしてるだけですわ。私はあなたのテンションに追いつきたいとは全く思っていないせんもの、できれば一生話しかけないでくだらないかしら?”

一度だけ、そう言い放ってきた。しかもニヤツと笑ってる。無性

に腹が立つたけど、そっちに夢中になりすぎて授業で当たったことに気づけず、開始早々、新田っていう先生に説教された。

あゝ最悪だ。ネイティに話しかけるんじゃないかったよ。

あ、そこ、笑うんじゃない！！

一瞬だけど声が聞こえたよ？ 君、姿を隠してるけど僕の近くにいるよね？ その人を驚かす声ですぐ分かるよ！

それにしても君のパートナーって……、……へえ、また君も変わったのをパートナーにしたよ。ま、クチバ方面のゴースや、チヨウジタウンの方にいたキュウコンも似たようなものだったから別におかしくはないだろうけどさ。

さて、その日の放課後です。

授業は何とかなったよ、僕だもん

でも面白かったよ、僕の席の近くにいる明日菜って子が面白いよ。うな間違いをやってくれるからさ。どうすれば『question』を『ハックション』と読んだり、『風が吹いたら桶屋が儲かる』を『昔の人はビーチパラソルじゃなくて風呂桶をかぶって太陽から身を守ってた』って自信満々に言えるんだろうって思ったよ。

その割に体育ではもの凄い力を発揮するし、あのクラスは変わってるね、本当に。刹那ちゃんも僕だって気付かなかったみたいだし、そのうえ……、

「貴様が何者か知らぬが、お嬢様を傷つけたら……」

って啖呵をぶつけてくるし、明らかに年上っぽい人や、正直トレーナーの双子ちゃんと思える子がいたり、本当に異色のクラスだと思った。

あ、そうだ。あの人に年上発言は禁止ね、ニヤースあたりが見つかったら畏にかけようと思ってるけどさ、まさかあそこまでしてくるとは思わなかったよ。本当に容赦がないもん……。

「森山さん、こっちですよ」

そんな僕を呼ぶ声がする。クラスメイトの頭がいい2人、超と葉加瀬だ。あのパイナップルのお姉さんが案内を頼んだからかもね。

「五月さんも一緒に行きませんか？」

「あ、あの……私はちよつと用事があるので……」

葉加瀬はクラスの中で一番おっとりほのぼのしてる四葉さんも誘ってたけど、今日は本当にいつもと違うらしく、駆け足で帰ってしまっている。クラスの間みなも驚いてたから相当なんだろう。

この後で色々と案内してもらい、僕は2人が使っている工房にも案内してもらった。

「ところで森山さんは何か機械でも作ろうと思ってるカナ？」

「今は工房にはたくさん廃材がありますし、特に必要としてませんから作りたいものがありましたら何でも作ってしまっていていいですよ」

「本当？ それなら早速作ろうかな」

工房は都会ではなく、ちょっとした森の中にあつた。聞けば大学の方にも研究所があるらしいけど、工房の方が色々そろってるし、内容がマッド過ぎるから人前にさらしたくないのだとか。

「ここが私と超さんの工房ですよ、……今カギを開け……、あれっ？」

葉加瀬がそう言つてドアを開けようとした。

でも、何故かドアはもう開いていた。

「おかしいネ、昨日使た以降は一度も入てないはずだたヨ？」

「五月さんでしょうか？ 用事があるとか言っていましたか……」

それを聞いて僕は確信した。

僕がアレを作るよりも前に動き出しちゃったみたいだと。

僕たちが入ると、物音が奥から聞こえる。

「台所の方ですね、四葉さんでしょうか？」

「でも五月はワタシ達に無断で入る人だた力？」

「それもそうですよね」

僕たちは工房の奥の台所に近づいていく。



そつとゆつくりと入っていくと、

「ほら、今日はこれだけしかないけど食べてくださいね」

四葉さんの声と、

「ゴンゴン!!」

予想通りの声だし、僕たちはドアの隙間から見えるポケモンの姿を確認した。

あゝ……、やっぱりお前だよ、ゴンベ!!

僕は思わずため息をついてしまい、そのまま黙ってドアを開けた。

その物音で振り返った四葉さんはハッとした様子で、顔を青く変えて立ち上がった。彼女の前には肉まんが山積みになっていて、ゴンベが美味しそうに食べ続けている。その上、彼女が取り落としたのは超というマークのついた幾つかの袋だった。

「さ、五月さんだったんですか……？ 超包子の食料紛失の犯人は……」

葉加瀬はもの凄く驚いた様子で立ちつくし、

「やはり五月だったか。怪しいとは思ってたが……」

実は既に確信してましたっていう超が四葉さんに近づいていく。その目の前では今の空気を全く分かってもないゴンベが山積みの

肉まんを一気にたいらげた。

そしてゴンベは本当に何も分かつちやいない様子で四葉さんを見上げる。明らかにまだ食べたいっていう様子だ。

っていうか、食料紛失か。

四葉さんがゴンベをボールに戻してるし、どうやら彼女がゴンベのパートナーみたいだね。

そりゃこの世界じゃゴンベは底なしだもん。食料がたくさん必要になるよね……。

「五月、実は言いたいことがあるネ。ワタシは……………」

超は納得した様子で四葉さんに近づいた。

でも、動いたのは四葉さんの方が早かった。多分、怒られるか、何か言われるかと思ったんだろう。僕もそう思ったから、彼女が取り出したものを見て思わず絶句して行動が遅れてしまった。

「あ、あの……、ごめんなさい、超さん！！ 本当にすいませんでしたー！！」

四葉さんは飛び出してしまったのだ。

「五月さ「葉加瀬、今は何を言っても多分勘違いされかねないネ」「追いかけてよとする葉加瀬を超が止めると、不意に超は僕の方を見た。」

「正直に話してもらいたいことだが、森山さんは人間ではないネ？」  
「へ？」

この時の僕はまたしても不意を突かれてしまった。本当はとぼけたりしたかったよ？ でもさ、超って完全に確信についたって言う顔してるもん。これは言い訳できるような顔じゃないよ。ただ、精一杯の抵抗はしようかな？ 昨日のこともあるし。

「人間じゃなかったら？」

「ポケモンネ」

「……っ！？」

「超さん……って、反応した！？」

精一杯の抵抗をしようと思った。でも、ポケモンだって即答されると何も言えないよ、僕も。葉加瀬も何か知ってるみたいだし……、ここはバラすかな

「どうして知ってるのか、聞いてもいい？」

「えっ、本当なんですか！？」

「実は昨日の一部始終をワタシが作成した特殊なカメラで見っていたネ。龍宮さんが無惨にやられていくと言う珍しい姿を取れるとは思ってなかったガナ」

超はそう言うと、近くのモニターの電源をつけて映像を映し出した。そこには僕が映ってて、流星群で誰かを攻撃する姿が映っている。攻撃されているのはどうやら銃を持った色黒のお姉さんみたいだった。

「さあ、お前の罪を数えろ！！」

……って、声まで入ってるし……。

「ここまで見られたら言わないわけにも行けないけど、君たちって魔法使いか何か？ 正義の魔法使いだったら話す気はさらさらないよ、一部を除いて」

一部って言うのは愛衣ちゃんと刹那ちゃん、あと学園長とタカミチさんくらいかな。そしたら、意外なことに2人とも首を振った。魔法使いとか魔法のことは知ってるみたいだけど、そうじゃないみたいだ。そのあとで聞いたら、クラスメイトの茶々丸さんを作成したのがこの2人らしい。動力の一部に魔法を使ってるから魔法を知ってるらしいけど、魔法って何でも有りだね。ポケモン魔法みたいなのと違って。

「それじゃ見せるよ、僕の正体」

僕は元の姿を見せた。

「僕はミュウっていうの。諸事情で君たちのクラスに転入したんだ」

「諸事情と言いますと、これのことですか？」

「うん、そう！」

葉加瀬が取り出したのはモンスターボールで、どうやら2人とも中身入りのようだ。

「でも、君たちはいつから持ってたの？」

「私はつい最近、仲良くなったばかりですよ。超さんはだいぶ前からいたそうですけど、私は先日、森の中で大きなポケモンに襲われ

てしましまして……」

葉加瀬はどうやらその時に助けられたらしい。

「大きなポケモンってどんなの？」

「岩かと思ったんですけど、それが尻尾だったんですよ。岩の蛇みたいなポケモンでしたね、穴を掘って逃げていきましたし」

つまり、この森の何処かにイワークがいるって事か。

あれっ？

でも、僕の森にイワークはいなかったはずだけどな……？

「ねえ、それって本当に岩の蛇だった？」

「はい、間違いありませんよ。モニターにも映像が残っていますし」

「何を考えているかは知らないが、去年から時折この世界にはよくポケモンが迷い込んでるネ。ミュウと一緒にやてきたポケモンじゃなかった力ナ？」

「うん。……でも、まさか他にもいたとはね。この世界とポケモン世界が妙に繋がっちゃてるのかな？」

「非科学的なことですが、一度繋がった世界同士が簡単にリンクを切ってしまう可能性は少ないでしょうし、互いの世界に何らかの影響を与える可能性もありますから、繋がっていると考えるのがいいかもしれませんよ？」

「なるほどね」

というわけで、多分麻帆良には僕の森にいなかったポケモンも紛れ込んでいる可能性が高まった。

「それじゃそろそろ五月を探しに行こうか」

「そうですね、先ほどよりは落ち着いているかもしれませんが……私たちもポケモンを見せたら話してくれるかもしれませんね。ミュウさんもいますし」

そのあとで僕たちは四葉さんを探しに森に入った。

でも、入った直後、僕は奇妙な気配と力を感じた。だから立ち止まってしまったんだけど、そしたら超と葉加瀬も反応していた。

「ミュウさん、何かあったんですか？」

「この辺りに奇妙な磁場が生まれているのを観測したガ、何か関係あるノカナ？」

「うん、何か変な力を感じた」

僕はゆっくりと近づこうと思った。でも、そんな僕たちの元に聞こえてきたのは

「きゃあああつつー!!」

「ゴンゴン!？」

四葉さんとゴンベ、2種類の悲鳴だった。だから思わず急いで向かってしまった僕たちだったけど、磁場が強くなった辺りでそつと茂みから覗き込んでみた。ちょうど少しだけ樹が少ない開けた場所があるみたい。

そこに四葉さんとゴンベの姿があるにはあったんだけど……、どうしてここについて思うような奴らが立ってるのが分かった。

「何でしょうか、あの黒づくめの人たちは……」

「センスのない制服ネ……」

あははは、容赦ないな。事実だけど。

「どうしてこの世界にいるのか分からないけど、アイツらはロケット団の下っ端だよ。僕たちの世界にいる、最近復活した悪の組織の奴ら。でも、どうしてここにいるんだよ……」

「もしかしたら先ほど葉加瀬の言たコトが的を射たかもしれないヨ？」

「さっきの事って世界がリンクしたって事？」

「確かにミユウさん達以外に人間がこちらに来たと考えればそれは確実かもしれませんね」

おいおい、お前らは来るなよ。

嫌な予感はちゃっかり的中した。

でも、何とかして四葉さん達を助けないと行けないから、僕たちは少しかだけ様子を見ることにした。ロケット団の下っ端は3人いるけど、何故か四葉さんの方にはあまり見向きもしていない。狙っているみたいだけど、

距離を取っている。でも、それ以上に僕たちは驚くものを見た。

「おい、こいつをどうすんだ？」

「知るかよ、俺たちはこの機械で特殊な磁場を作り、謎のロープ姿の奴らを襲って誘拐することしか指示されてないんだぞ？」

「まあ、いいじゃないか。何かやろうとしてたみたいだが、こいつとそこにいる目撃者を連れ帰ればいいんだからな」

下っ端の一人が抱え起こしたのはフードをかぶり、ロープを身に

つけた魔法使いだった。しかも杖を手にしているけど、それがボツキリと折られてしまっている。しかも連れ帰るって言うてるってことは、元の世界に帰る方法があるのかな？

「ま、そうだな。それにしてもうちの幹部達も変わってるよな、こんな奴を何人連れ帰れば済むんだ？」

「もう5人目だったろ？」

「とはいえ、そいつらを研究してこの世界に来れたんだからな。早くそいつらも連れて行くぞ！ アーボック、そいつらに巻き付け！」

なんというか、ロケット団の下っ端は結構バカだから何でも口に出すし、調子に乗せると勝手に好き勝手にしゃべってくれるから、多少の奴らの考えも分かったことは分かった。でも、これ以上は見ているわけにも行かない。

コブラみたいな姿の大きな大蛇のポケモン、アーボックは四葉さんにねらいを定めて尻尾を伸ばしていた。

これはもう見てるわけにはいかない、そう思ったその時だった。

「突進です！」

隣でポケモンの飛び出てくる声がして、葉加瀬の声が響く。それと共に水色の物体が茂みから飛び出してアーボックに思いっきりぶつかった。

「な……うわっ！？」

突進で奇襲を仕掛けたからか、アーボックは飛び出そうとしてすぐにぶつかられ、吹っ飛ばされ、しかもロケット団の下っ端3人を巻き込んで倒れている。



「五月さん、大丈夫ですか!!」

「葉加瀬さんに超さん、どうして? 私……」

「今はそんなことは関係ないヨ? それに五月がこそそしてたのは気付いてたネ。貯めていたお金を結構使って食料を買い込んでるのも聞いてたから何かあたのか気になってたヨ。もう少しワタシ達も頼てほしかたヨ」

「そうですね、五月さん。困ったことがあったら仲間なんですから言ってくれていいんですよ」

四葉さんは超と葉加瀬の姿を見て戸惑ってたけど、2人は前から四葉さんの様子がおかしいことに気付いてたみたいで、怒った様子を微塵も全く見せていない。だから四葉さんも安心したみたいだ。

「さて、ワタシ達のクラスメイトを襲った罪は償ってもらおうヨ。アサナン、出るネ!」

「ダンバルも力を貸してください!」

超が出したのはアサナンだった。その横には葉加瀬のポケモンのダンバルがつく。僕も出てもよかったけど、今僕が出たらロケット団が反応しかねなかったから、とりあえず倒れている魔法使いを僕の方にサイコキネシスで運んでおいた。

「くそつ、こつちの世界にトレーナーがいるなんて聞いてないぞ!」

「どうせ出会ったばかりのにわかトレーナーだろう。リングマ、お前も行ってこい!」

ロケット団の下っ端はアーボックに続いてリングマも出してきた。

「アーボック、アサナンに蛇にらみだ！」

「リングマはダンバルにアームハンマー！」

アーボックはアサナンを麻痺させようと睨み付け、リングマは身体の重心を両腕に一気に移し、その両腕を振り上げてジャンプし、ダンバルに振り下ろそうとする。

「葉加瀬、交代ネ！」

「はい！ ダンバル、アサナンと位置を交代して！」

「そしてアサナンは猫だましネ！」

その直後にダンバルとアサナンが位置を交代し、アサナンは両手をリングマに向け、激しく両手を叩く。その音を聞いた瞬間、リングマはビクツと怯んでしまい、そのまま攻撃ができずにその場に落下してしまった。また、

アーボックの蛇にらみはクリアボディの特性を持つダンバルには効果がなく、

「ダンバル、思念の頭突きです！」

その身体に思念のエネルギーを込めた一撃がアーボックを簡単にノックアウトさせていく。

「アサナン、今度は爆裂パンチネ」

その横ではアサナンが爆裂パンチをリングマの腹に与え、リングマもノックアウトさせていた。こうなると動揺を隠せないのはロケット団の下っ端達だ。

「おい、どういうことだよ！！ にわかトレーナーじゃないじゃないか！！」

「俺が知るわけないだろ！？ こんなに強い奴がいるなんてさ」

「もうこうなったらスカタンク、そのガキに火炎放射だ！！」

下っ端のまだポケモンを出してなかった1人は破れかぶれとでも言うようにスカタンクを出し、よりもよって四葉さんにそれを放っていた。

「危ない！」

僕は思わず飛び出しかけたのだけど、今回、僕の出る幕は本当じゃないようだ。

「ゴン！！ ゴンゴンゴンゴン！！」

四葉さんに危機が迫った瞬間、ゴンベが四葉さんの前に立ち、しかも飛び上がったかと思うと着地と同時に転がり始め、炎を突き破ってスカタンクを吹っ飛ばした。四葉さんは攻撃の指示を出してないけど、ゴンベが食べ物のお礼に

四葉さんを守ろうとしたのだろう。それにしても、あのゴンベ、確か先月生まれたばかりでまだレベルも低いんだけどなあ……、あの下っ端達、相当弱いんだね。

「くっそ、覚えてやがれ！！」

「この次は絶対承知しないからな！！」

アーボック、リングマ、スカタンクが倒されると、下っ端達は何かの機械を操作して逃げ帰っていった。ただ、その時に超のアサナンが何かをしていた。よく見てると、アサナンの持っていた小石が

下っ端の持っていた謎の機械の一つと

すり替わっている。どうやらアサナンは『トリック』で持ち物を交換したようだ。

ま、そんなわけで超達3人、クラスメイト内の相性で言えば『中華と肉まん』のトリオはロケット団の下っ端3人に勝利した。

ただ、アイツらがいなくなると、何故か人の気配がたくさん近づきだしたから、僕たちは急いで超達の工房に戻った。

そう言えば、どうして他の魔法使いとかが異変に気付いて駆けつけたりしなかったのか、僕たちはまだ何も知らないんだよね。

「2週間くらい前だったんです、この子と会ったのは」

工房に戻ったあと、僕は四葉さんにも正体を見せた。当然、四葉さんは驚いたよ。アサナン達は僕の森にいた奴らばかりだったから、アサナンとダンバルはこの世界に飛ばされた原因が僕だと知って「やっぱり」と思ったようだけど、特に何か気にしてる様子はなかった。

それよりもパートナーに巡り会えたからなんだろうね。ただ、ゴンベはそんなことはどうでもいいみたいで、お腹を空かせているのが分かった。そのため、四葉さんが事情を話し始めた横で、さっき四葉さんが作ったばかりの山積み肉まんをせっせと食べ続けている。

「超包子の生ゴミを捨てに行ったとき、この子がゴミ捨て場を漁ってたんですよ」

どうやら食べるものがなかったからゴミ捨て場を漁ったようだ。

だが、所詮ゴミを食べるのは難しい。

そんな時に封の切っていないジュースのパックが大量に入ったケースを見つけ、ケースからパッケージごと口に流し込んだらしい。

「一部始終を見てはいたんですけど、それを食べたたん、ゴンベがとても苦しそうに倒れてしまったので……」

「ええええっ！？ ゴンベが腹を下したの！？ コイツの種族は何食べても平気で毒を食べても平然としてるのに……」

僕は正直、世界が破滅するんじゃないかって言うくらい驚いた。それはアサナンとダンバルも同じようで、僕たちは呆然とした感じでゴンベを見ている。ゴンベは注目されたからか、何故か照れていた。

「ものすごく苦しそうだったんですよ。だから介抱して、残り物を挙げたらとっても幸せそうに味わって食べてくれたんです」

四葉さんは自分の料理を味わって食べてくれる人が好きらしい。ゴンベが言うには、世界にこんな料理が存在していたのかって思うくらい美味しかったらしく、それ以降四葉さんの料理が気に入り、四葉さんもそれを食べてくれるゴンベが気に入ったようだ。

ただ、それでパートナーの関係ができたのはよかったけど、問題は残ってるわけで、ゴンベのこの食欲が四葉さんを苦しめたらしい。

「私のお小遣いでも足りなくて、それであとで返すつもりでお店の食材をお借りしていたんですが、超さんが気付き始めていたので……」

そして今日に至ったというわけだ。ゴンベも我慢はしてくれていたらしいけど、コイツに食事を我慢させることは無理に等しい。食べるのを我慢したところ、空腹に苦しんで倒れてしまったようだ。

あゝ、だから誉めてないってば!!

そこで結局食材を持ち出しては作り続けて1週間が過ぎ、ここまできると食材がごっそりと減ってしまったため、超が感づきだしたというわけだ。ただ、この2人は銀行とかにハッキングして四葉さんの貯金が急激に減っていくのを見つけたらしく、近いうちに聞き出そうと思っていたらしい。

「私たちもポケモンを持っていましたから相談できたんですよ。とはいっても、そのことを周囲に打ち明けるのは危険だとも分かっていますから言えませんでしたけど」

「でも、超さんと葉加瀬さんがポケモンを持っているって分かったのでよかったです。ただ……、この子の食事はこれからどうしましょうか？」

再び、今度は全員の視線がゴンベに向かい、ゴンベは照れまくっているせいか、シリアスっぽい空気は微妙なものになっている。

ま、そこで僕の発明が役に立つんだよね。

「それじゃ、これを使ってみようか」

僕はさっき作った機械を取り出した。その横には僕がある場所に保管していた大量の袋が山積みになってい……、あゝ……！！！！ゴンベ、食べるなよ！！！！ 数が限られてんだぞ！！！！

「これは何なのですか？」

「僕たちがいた世界にあった、ポロックっていうポケモン用のご飯を作る機械だよ。ポケモンフーズっていうのもあるんだけど、それよりは……って、ゴンベやめろー！！！！ もう、アサナンとダンバルも手伝ってよ！！！！ これじゃコイツに木の実が全部食われて意味がなくなっちゃうー！！！！」

~~~~~2時間が経過~~~~~

大量にあった袋が3分の1に減少したところで、ようやくゴンベが止まった。僕とアサナンのサイコネシスを振り切って木の実を平らげるゴンベを止めるのは本当に大変だった。とりあえず、木の実全種類はちゃんと残ったからいいかな。ただ、これでダンバルがメタングに進化するとは思わなかったな。それでもゴンベを止める力にはならなかったけどさ。

「それじゃ、説明を続けるね」

僕の前にはゴンベの尋常じゃない食事風景に圧倒された超と葉加瀬、ゴンベを止めるために疲れ切ったアサナンとメタング、そして暴飲暴食を怒られるゴンベと、それを説教をする四葉さんがいた。やっぱり四葉さんの「そんなことをしたらもう何も作らない」は効いたみたいだね。

「これはポケモンのご飯を作るポロック製造器っていうの。これに木の実を入れるとポロックができるんだ。それと、このレシピ通りの調合をすると、ゴンベみたいにたくさん食べるポケモンでも、ポロック1つでお腹いっぱいになったりするんだ。木の実は適当な植木鉢に入れて育てれば僕たちの世界では数日もかからずに育ったし、この世界もそれで行けるかもしれないし、これで木の実を増やしていけばゴンベの食欲をこのままに、食材確保をしなくても何とかかなると思うよ」

僕が説明し、四葉さんがそのレシピ通りに作ったところ、ゴンベはちゃんとお腹いっぱいになっていた。

木の実もやっぱりすぐに育つらしい。

ただ、ポロック製造器は僕じゃしつかり作れなかったから、超と葉加瀬が改良していく形になった。それでも、とりあえず僕とアサナン、メタング、ゴンベはポロックの恩恵を受けられるんだからいいことだと思うよ。

「でも、こんなレシピをよく知っていましたね？」

「ミュウが作ったノカナ？」

「いんやー、前にポケモン研究の権威の博士の研究所に忍び込んだ



時に、その博士に教えてもらっただー」

あの時はスケッチブックを片手にしてる男の子をからかって遊びまくったなあ。そしたら居合わせたニャースには怒られたけど、人懐っこいベトベトンとか色々いたし。

「それでもさ、コイツが進化したらもつとでかくなるからね、そうならかなり食べるし、これがあつた方が便利だし、ちょうどよかったよね」

というわけで、僕の最初の学生生活一日目はこんな感じで終わのだった。

たださ、工房を出てすぐに何かが大きな男の人を蹴倒して逃げていくのが見えたんだよね。

アレって多分アイツだし、まだまだポケモンの事件が多そうで、僕の出番も今後なくなりそうじゃないんだろうなあ……。

3・僕の予想の範疇を超えることって一日に普通は何回も起きないもんだよ、普

というわけで、第3話、最後はちょっとグダグダですが、終われました。

今回は通り魔事件です。だから誰が主人公になるのかは予想できるかと思っています。

ロケット団もこんな感じで登場しますし、まだまだやれてないこともありますし、当分はこんな感じで10話以上続いていく予定なので楽しみにしてください。

超のポケモンはカゲシンさんのリクエスト通り、アサナンになりました。

葉加瀬はダンバルです。とは言っても進化したので今はメタングですが。

そして五月は自分の考えでもリクエストでもゴンベだったので、ほぼ確定的でした。

2・Aの会話の幾つかでもおわकारの通り、ポケモンと関わってる生徒が多かったりしています。

既にあやかやさよ、ザジなどは決定してます。でも、まだ決まっていけないキャラクターも多いんです。

だから、この次に一度今後随時追加していく形のキャラクター設定を出します。

募集はまだ続けるので、これを見て募集に参加してみてください。

では、次回もお楽しみに！

## キャラクター設定（今後追加修正変更は随時）（前書き）

今回はキャラクター設定集です。

今のところは選定中の部分もあり、そこは決定してから随時追加していく予定にしています。

## キャラクター設定（今後追加修正変更は随時）

・ポケモンキャラクター紹介

主人公：ミュウ

性別：　らしいが、特に自覚がないため、後に女子生徒として入学。

人間の名前：森山美優もりやまみゆう

容姿：ポケットモンスター、ダイヤモンド&パールに登場する女の子の主人公と同じ姿らしいが、ミュウ、ニャースによれば、アニメのヒカリの姿らしい。

一人称：ミュウの姿、あるいは素だと僕。少女に変身しているときは私。

使える技：全てのポケモンの技が使える。人間の姿に変身していてもポケモンの技は使用可能。

パートナー：ミュウと同じで悪戯大好き、面白いこと大好き、食っちゃ寝るで既に彼に決めています。

ニャース

元ロケット団の喋れるニャース。ロケット団解散後、ミュウに誘われて始まりの森に住み着いた。ミュウには突っ込み役だの、下僕だの、奴隷だのいわれているが、実際にそう言う扱いをされているわけではない。ただ、突っ込み役になってしまうのは仕方ないところ。

現在、何処にいるのかは不明。

#### 山守りその1

名前はアイリス。他は今不明。パートナーはお人形みたいな子がいいと言っていたらしい。既に進化を終えている。

#### 山守りその2

名前はミューズ。とある場所で目撃情報が寄せられている。他は今不明。パートナーは頭で考えるよりも身体を動かすことの方が向いてる子がいいって言っていたらしい。既に進化を終えている。

#### ネギまキャラクターとそのパートナーポケモンの一覧

完全に決定していないキャラもあります。ちなみに所持ポケモンは1人2体にしましたが、状況によっては1体になるキャラもいるかもしれません。選考ではあらゆるネギま作品を参考にしています。

#### ネギまスプリングフィールド

・電気タイプと飛行タイプを中心に選考中です。未熟な魔法使いと父への憧れから若干幅は狭まっていますが、今のところ、候補としてはピチュー、コリンク、ラクライ、メリープ、スバメが上がります。

#### 相坂さよ

・鳴き声を出して驚かせるポケモン、さよ曰くムーちゃんという親友。

・アーマーカードに似たようなのがいたのでこれにしようかと思っ

てます。

明石裕奈

・バスケット、ボール、丸くなるなどから2体を選考中です。

綾瀬夕映

・結局はスカカードのこれが無難でした。

・今のところ、草タイプで選考中です。候補としてはマスキップ、マダツボミ、チコリータ、フシギダネ等が挙げられます。

朝倉和美

・飛行・浮遊タイプを中心に選考中です。候補としてはペラップ、ズバット、タマンタ、カゲボウス等が挙げられます。

和泉亜子

・看護師イメージで1体は考えましたが、まだ選考中です。

大河内アキラ

・1体はアーマーカードより、もう1体は特性よりこれにしようかと思ったんですが、まだ水タイプで選考中です。

柿崎美砂

・色々考えてたら虫タイプ2体になっちゃいました。とりあえず選考中ですが、アニメの吟遊詩人の影響が……。

神楽坂明日菜

・1体はとりあえずスカカードにしようかと思ったものの、まだ選考中です。

・もう1体は彼女の設定を作った時点で明日菜しかパートナーにならないと思いました。

春日美空

・選考中です。いたずらとダッシュ、どっちにしようかで迷ってます。

絡繰茶々丸

・今のところ、2体とも確定してます。彼女の場合、アーティファクトがアレなので、結果的にその2匹がパートナーにちょうどよかったんです。

釘宮円

・どういうわけか、彼女は岩タイプの選考になりました。1体はアクセサリー関係、正確には工芸細工でアレにしようかと思ってます。

古菲

・修行仲間として存在し、現在行方不明になってるうえに通り魔事件を起こしてくれちゃってるのが1体です。もう1体はいつの間にか仲間になる予定ですが、両方とも格闘タイプです。

近衛木乃香

・1体は幸せ、祝福という感じで決めてます。  
・もう1体は選考中ですが、修学旅行があるので『癒しの願い』か『癒しの鈴』が使えるポケモンで選考中です。

早乙女ハルナ

・もう名前を出しますが、1体目はドールです。後に原稿紛失事件で出会う予定です。  
・2体目は選考中で、まだ考えてません。

佐々木まき絵



・選考中です。正直、まき絵が一番難しいです。桃色アホドリがいたらよかったんですが……。

#### 桜咲刹那

- ・アブソルです。後にパートナーになる話を出す予定です。
- ・2体目は鳥ポケモンで選考中です。

#### 椎名桜子

- ・希少価値が高い、愛くるしくて人気のあるポケモンで1体決めます。
- ・2体目は選考中ですが、今のところは名前にちなんだポケモンにしようかと考えてます。

#### 龍宮真名

- ・そのポケモンの名前によって既に1体、決めました。
- ・2体目は草、虫、ゴーストの中からで選考中です。

#### 超鈴音

- ・1体はアサナンです。話中には出ませんが、超が麻帆良に来るより前からパートナーだった設定にしています。
- ・2体目は選考中ですが、こちらはエスパークタイプか格闘タイプのどちらかにしようと思っています。

#### 長瀬楓

- ・最初のゲットは1匹ですが、進化すれば2体になるのでこれで決定です。

#### 那波千鶴

- ・選考中です、ホルスタインも考えたんですが……。

鳴滝風香

- ・クチートです。後にゲットする話があります。
- ・2体目は楓が決まっちゃったので、実質的に風香がこれをゲットする形になりました。楓いじめではありませんが、進化後は実質的に楓いじめになっちゃいますね。

鳴滝史伽

- ・パチリスです。後にゲットする話があります。
- ・2体目は見た目がおとなしそうで、アニメでもおとなしめのポケモンを選んできますが、こっちは検討中です。ただ、風香とタイプはかぶらないように考えてます。

葉加瀬聡美

- ・1体はダンバルです。イワークから葉加瀬を助けてくれた縁で仲間になりました。でも、もうゴンベを止めるために頑張りすぎて進化して、メタングになっちゃってます。
- ・2体目は選考中ですが、実験や研究の力になりそうなポケモンを選考中です。

長谷川千雨

- ・パソコンと言ったらこのポケモンでした。
- ・2体目は選考中ですが、できるだけ進化しても可愛いポケモンにしようと思っています。

エヴァンジェリンアナタシオティ A II K II マグダウエル

- ・正直に言えばエレメンタルデイズの氷雨みたいなポケモン（進化後）です。
- ・2体目は悪タイプで選考中です。

宮崎のどか

・イメージ的におとなしく、見た目が髪型を変える前ののどかだったので、これに決めました。

・2体目は選考中です。

村上夏美

・進化したら絶句しそうな彼女にしようかと考えてます。ネタ的には面白いけど、夏美の気にしてる部分に触れそうです。

・2体目は選考中です。

雪広あやか

・第3話で多少触れましたが、1体は進化前だとみすばらしいあのポケモンです。

・2体目は草タイプで決めました。あやかはネギま！？ではアーマーで鞭、コスプレでパフューマーでしたし。

四葉五月

・1体目はゴンベです。もはやこれはすぐに決まりましたが……、ゴンベでさえも腹を下したあのジューズを美味しく飲む夕映って……。

・2体目は選考中ですが、今のところはよく食べるポケモンで選考中です。即決まりにするとゴクリンになっちゃうけど、それはちょっと……なので。

ザジレニーディ

・1体目はネイティです。

・2体目も不思議なポケモンにしようかと選考中です。

犬上小太郎

・犬なので、犬らしいポケモンにしようかと選考中です。  
・ポケスぺのブルーみたく、水陸空を進めるポケモンにしようかと

選考中です。

佐倉愛衣

- ・第2話で登場しているように1体目はアチャモです。
- ・2体目は彼女の武器が箒なので、箒を武器として扱えるようサポートできそうな、あの鳥ポケモンにしようかと考えてます。

高音ⅡDⅡグッドマン

- ・今のところ2体とも、彼女をサポートできるけど、彼女のような魔法使いとは思いが合わなさそうなポケモンで選考中です。候補としてはヨマワル、マネネ、ソーナノ、ヘイガニ、ベトベター等が挙げられます。

月詠

- ・とりあえず刹那と戦えるように選びましたが、1体は虫タイプ、2体目は鋼タイプにしようと考えてます。ただ1体目は今のところ、ストライクで決定の予定です。

アーニャⅡユーリエウナⅡココロウア

- ・せっかくなので持たせました。アーニャは炎を使うので、炎タイプで決めています。
- ・2体目は選考中です。

ネカネⅡスプリングフィールド

- ・可愛いポケモンを2体、進化後は考えずに選びました。ネカネとアーニャのポケモンは一度原作に入る前に話を入れるので、その時に登場させます。

天ヶ崎千草

- ・今のところ検討中ですが、ネギポケなのでせっかくなので持たせ

ることにしました。彼女はミュウ達とは別で迷い込んだ進化後のポケモンにしようと思っています。

フェイト「アーウェルンクス

・ナギ達が所持しているので彼も持っていないでも変わりはないかと思  
い、持たせることにしました。ただ、選考中です。

キャラクター設定（今後追加修正変更は随時）（後書き）

以上が今のところのキャラクター設定になります。時々、随時追加修正していく予定です。

募集も随時、続けていきます。

第4話 頭の中身もそうだけど、『バカ』っていう存在も、存在してていいのよ

「うーん……」

「どうしたにや？ えらく難しい顔をしてるにや。明日は雨にや？」

「ニヤースー！！ 僕だって真面目になるときはあるよー！」

「……確かにいたずらを仕掛けるときは大真面目にや。で、今度は何を企んでるにや？」

「違うつて、明日抜き打ちテストがあるんだよー！ 僕まで来たばかりなんだよ！」

「それは大変にや。……でも、おみゃーのクラスは真正のバカがいたはずにや？」

「ああ、アレは次元が狂ったところに落ちたんだよ。あるいはパートナーがコダツクなんじゃないかな？」

「酷い言い方にや……」

「ニヤースもはつきり言ってるじゃん。でもさ、作者も最初は神楽坂さんのパートナーはマンキーとコダツクを考えてたらしいよ？」

（事実です、当初はその予定でした。今は全く違います）

「……なんか理由が分かりやすいにや」

「だよね」  
『バカ猿』と『頭が空っぽ』の組み合わせなんだっ  
て」

「……どうしたん、明日菜、いきなりバット振り回して」  
「ちょっと何処かで私がぞんざいな扱いを受けてるような気がした  
のよね……」  
「気のせいじゃない？」  
「だといんだけどなあ……」



#### 第4話 頭の中身もそうだけど、『バカ』っていう存在も、存在してていいのよ

「ふう〜……、何とか終わってよかったあ……」

突然昨日、範囲を説明され、今日行われた抜き打ちテスト。僕の場合は転校したてだったから教師側がわざわざ教えてくれたんだけど、同じクラスメートのみんながそれを知るわけがなく、僕もわざと教えなかったんだよね。そしたら結果は悲鳴の坩堝になった。ちなみに教科は英語だったんだけど、今日は出張から帰ってきたタカミチさんがちゃんと先生をしてる。で、テストが終わったらすぐ授業だったんだけど、久々に頑張りすぎたせいかな、今日ちょっと眠いんだよね。それでもまあ、結果は結構よくできたと思う。僕は元々頭がいいんだよ、エスパーポケモンだし、全部のポケモンの技が使えるすごい子だからね、てへっ

……うゝ、誰か突っ込んでよーっ！！！！ニヤース、カムバーツクー！！！！

それにしてもテストを早めに終わらせて人間観察をしてみれば、本当にこのクラスは面白いと思う。テスト中だけど始まって数秒で机に突っ伏したのが4人……、いやそうじゃないのも含めて6人か。絶対異次元の壁をくぐり抜けて来たとは思えないような授業の答えを自信満々に言う神楽坂さんに、

一日中新体操のリボンを肌身離さず持つてる佐々木さん、僕が転校

してきたときから妙に元気がない、超が言うにはいつもだったらバトルジャンキーモンキーのような底抜けに明るい見た目でバカと分かる存在で、結構みんなにその異変を心配されている古菲、時々気を消しては教室を歩き回り、壁や天井に立っていることもある（それでもみんなが普通に受け止めている）ことがある長瀬さん、明らかに頭がいいはずのロボットなのに、開始早々頭の後ろがカパツと開いてレンズが飛び出し、エヴァンジェリンさんの回答をスクリーンしたら2、3問解いただけでやめてしまった茶々丸さん、そして僕が心の目でそつと覗き見たところ、冷静に解いているように見せかけて実際は書いている振りをしていることが多く、回答欄が全く埋まっでない刹那ちゃん……。ちなみに回答欄の内容は結構みんな酷かったね。茶々丸さんは何故か書いてないだけだったけど。あ、それとさつき出したエヴァンジェリンさんも茶々丸さんよりも5、6問多く書いたらやめちゃってたし、僕の近くに座ってる綾瀬さんは途中から回答をするのが飽きたようにペン回しを始めてた。こんな感じで黙々と頑張ってテストを解いている僕たちがいる中、こんな人たちもいたわけで、こつそりと人間観察するのは本当に楽しかったりするよ。それでもさあ、みんなこのクラスには姿が見えないだけで答案覗いては笑ってる奴がいるんだからもつと危機感持った方がいいよ？

それにしてもなあ……やっぱり昨日は少し夜更かしして勉強してたから眠くてしょうがないんだ。

だから今、授業中だけど突っ伏してる。僕の場合は早乙女さん達の後ろだからこうやって突っ伏していると前から見えないんだよね、あまり。

「……山さん」

授業がつまらない訳じゃないよ、タカミチさんは結構海外出張が多いから海外の話も交えてるし、真面目に授業受けてない僕たちが乗ってくるような話に英語を交ぜたりして教えてくれるから分かりやすかったりもする。まあ、はてなをポコーンと浮かべてる佐々木さんとかもいるけどね。みんなが笑うところは同調して笑ってるみたいだけど、きっと理解はしてないんだろうなあ。僕はそれを見て面白がってるんだけどさ。

「……山さん」

それにしても今日の授業は静かだなあ。時々さっきから笑いが起きてるけど何だろ？ でもまあ、静かだから寝やすくてしょうがない。きつとタカミチさんに惚れてる神楽坂さんは兎も角、佐々木さんや綾瀬さん辺りは寝てるかもしれないよね。

「……森山さん」

そう、今僕の名前を呼んだのが綾瀬さんだ。何か普段から難しそうな本ばかり読んでるんだけどその割に勉強ができない……、いや、できないんじゃないかってやらないんだっけ。で、その綾瀬さんが僕の……んっ？ ……アレ？ 僕の名前を呼んだ？

「ん？ どうかした？」

ムクツと起き上がると、綾瀬さんが隣の列から立ち上がって僕を起こしていた。クラスメイトのみんなは僕の方をじーっと見ていて、神楽坂さんはかなり激怒した様子で睨んできていて、タカミチさんは苦笑いしてる。そして綾瀬さんは僕の方をじーっと見つめ、

「あの、さっきから呼んでたですが、高畑先生が森山さんを当てた

ですよ。この文章です」

どうやらさつきから英文を訳すように当てられていたらしい。でも考え事をしてた僕が返していたのは小さな寝息だったため、一瞬笑いも起きたそうだ。その後、綾瀬さんが起こそうとしたが、僕が考え事に夢中でなかなか起きなかった。そしてこうなった。

「森山さん！！ 授業中に居眠りなんかしたら駄目じゃないの！！  
せつかく高畑先生が授業をしてくれてるのよ！！」

神楽坂さんが偉く真面目な顔つきで僕に怒っている。この発言を受けてクラス中はどよめいた。でも、神楽坂さんはそれを気にせずに僕に怒っている。ほぼ敵意むき出しだ。そりやそうでしょ、タカミチさんに当てられたのが自分じゃないんだから。しかも当てられた僕がずっと寝てたわけだし。

「……うわぁ、神楽坂さんが真面目だ。明日、雨が降るのかな？」

つい思わず口を零してしまった。その瞬間、周囲に笑いが伝染していく。

「わ、私はいつだって真面目じゃないの！！」

「そうなの？」

「当たり前じゃない！！」

「それじゃ、昨日の英語の授業で代わりの先生に来たときに、当てられても高畑先生の写真をうつとり見つめていて注意されたら睨み付けたり、漫画読んでたり、早弁してたことも真面目なの？ 昨日も確か購買のパンをガツガツと……」

続けてこの、昨日見かけた神楽坂さんの授業放棄の姿を事細かに

喋ってみたなら、神楽坂さんはぴきんと凍り付いた。そして教壇の近くではため息が聞こえてきて、不意に僕らが視線を向けると、

「明日菜君、そんなことをしていたのかい？　僕は君が英語を真剣に受けてくれているから今度のテストは期待したんだけど……」

タカミチさんがシヨックめいた様子で立っていた。神楽坂さんはその言葉を聞いて絶望を浴びたように更に石化していく。何とか返答したいらしいけど、言葉が全く出てこないのだろう。その直後、運が悪いことにチャイムが鳴り響き、英語の授業は終わってしまった。神楽坂さんにとって悪夢のような

出来事だっただろう。僕は正直おかしくて内心笑い転げていたんだけど、そうしたら何故か教室のあちこちから呆れた視線が飛んでくる。といってもモンスターボールに入っているネイティ、メタング、アサナンと、さっきから透明になってこのクラスを飛び回ってる奴の4人の視線なんだけどね。でも、流石に石像をこのままにするわけにもいかない。

「……神楽坂さん、授業終わっちゃったよ？　早く高畑先生を追いかけなくていいの？」

そう耳元で囁くと、一気に石化から解放された状態になっていく。でも、まださっきのシヨックは消えていない様子だ。だから追撃をかけた。

「高畑先生って転校してきたときに色々と助けてくれたのよ。だからかつこいい先生だなあって思ったの。神楽坂さんが行かないなら奪ってもいい？」

その言葉を最後まで言うよりも早く、神楽坂さんの姿は消えた。

目にもとまらぬスピードで教室の外にかけだしていったようだ。それにしても扱いやすいな、まるであの2人を見てるみたいだ。そう思っていると、隣から声が聞こえてきた。

「明日菜さんをあの状態から突き動かす言動はなかなかですね。森山さん、この際、私たちバカレンジャーの参謀にならないですか？」  
「参謀に？　って、バカレンジャーって何？」

「このクラスで最も成績が悪く、テストの点数も最下位の生徒5人のことを総称してそう呼んでいるんです。最初はそう言う呼び名ではなかったんですが、私以外の4人が運動神経の良さを誇っていましたが、いつの間にか戦隊ヒーローものに当てはめられていまして……、まあ、それを考えたのは数日前からそこで突っ伏し続けているハルナなんです。それと、私は単純に学校の勉強するのが嫌いなので成績が悪いだけです。バカレンジャーの呼称は面白い呼称です。で別に気にしてもいいです」

「ふうん」

綾瀬さんは大真面目な顔でバカレンジャーについて語ってくれた。その時点で大体バカレンジャーが誰なのかは予想ついた。

「それで、バカレンジャーって誰なの？」

でもとりあえず、わざと聞いてみた。

「私と明日菜さん、それに楓さん、古菲さん、まき絵さんの5人になります。最も他にも予備軍と呼ばれてる人が何人かいますが、極端に成績が低いのが私たち5人ですので滅多に新加入することはないと思いますよ」

「例えば？」

「……流石に私の口から申し上げるわけにはいきらないです。それで、

「どうでしょうか？」

「参謀？ …… うーん、考えとくことでいい？」

綾瀬さんは流石にバカレンジャー予備軍の名前は挙げなかった。ただ、誰なのかを把握してはいる様子だった。多分刹那ちゃんや茶々丸さん辺りじゃないかなって思う。参謀は面白そうだと思ったけど、とりあえず返答はまた今度にした。

「では、その時は何色になるのかも聞かせてくださいです」

「……色？」

「はい、バカレンジャーは5色の色分けをしています。私はブラツク、まき絵さんはピンク、楓さんは青、古菲さんは黄色で、明日菜さんがレッドです」

「へえー、ピツタリの色なんだあ。特に神楽坂さんとか赤が似合いそうね。なんていうか、熱血バカ？」

この時僕が言ったのは普通に本音だった。わざわざ色分けまでしてるなんて凝ってるんだと思っただし、話を聞いてたのか、長瀬さんや佐々木さんは自分の名前が呼ばれると決めポーズまでしている。それに色が似合ってるっていったら佐々木さんは照れて笑ってた。だから神楽坂さんも似合ってるって言ったんだけど、その瞬間、その神楽坂さんが僕たちの方をジロツと睨んできた。

「あのさ……私はそんな呼び方、認めたことは一度もないんだけど？ 英語だって全く分からない訳じゃないのよ！！ 昨日だってこの洋画を最後まで見たんだから……！！」

「「えええっ！？」」

「な、何よ、夕映ちゃんまで……。そんなに驚くこと、言った？」

神楽坂さんが取り出したのは誰かから借りたと思われるビデオで、

全て英語で書かれている洋画のケースだった。しかも難しそうな英文をすらすると読み始めているから、僕も綾瀬さんも、周囲にいたみんなも驚いている。中には『神は死んだ』とか『明日は嵐が来る』とか叫んでる人もいる。そして神楽坂さんは勝ち誇った顔をした。

「ね？ 言っただでしょ、私も夕映ちゃんと同じで勉強が嫌いなだけなのよ！！ 英語は得意だけどやりたくないだけなのよ！！！」

自信満々に神楽坂さんは言い放つ。でも、そんな神楽坂さんの気分を叩き落とせる猛者が現れた。

「明日菜ー、そんなこと言っつてもすぐバレてまうえー。単に明日菜の好みのタイプが出てる洋画だっただけやし、それ以外の英語は駄目だったやん」

それは神楽坂さんと同じ部屋に住んでいる近衛さんだった。あのポケモンみたいな学園長の孫と聞いたけど、アレの孫とは思えない。きつとまだ異次元の壁をくぐり抜けてないからなんだろうと思う。さて、そんな近衛さんがネタ晴らしをした瞬間、神楽坂さんの顔は面白いほどに変化した。

「こ、木乃香！！ それ言っっちゃ駄目だつて！！」

「言っっちゃ駄目も何も……昨日の小テストの問題、そこに書いてある英文と同じのが出たけど解けなかったやん……」

「え………？ 出た？」

「出とったよー。明日菜、自分の許容範囲があるもの以外やと全然やえ？ 威張っても後で恥じかくだけやし、明日菜はバカなんやで諦めやー」

そついうと今日が日直なのか、近衛さんは教室を出て行き、神楽



坂さんが慌てて追いかけていく。トドメまで刺されてるけど、それでもその発言は覆したいんだろう。僕が面白がっていると、綾瀬さんは突然話を変えた。

「それにしても……」

「どうかしたの？」

「いえ、そのハルナは兎も角、先日から古菲さんの様子がおかしいんです」

「ああ、そうらしいね。昨日も超さんが霰の代わりに『お菓子のあられ』が降ってきてもおかしくないって言ってたし……」

僕の発言の直後、クラスの幾つかの厳しそうな視線が超に向かった。

超がそしらぬ振りをしている様子だったけど、額に脂汗を浮かべている。そして僕の方を見て視線を絡ませてきた。多分余計なことを言うなっていつてるんだろうなあ。言うなって言ったから言ったんだけどさ」

「く、古……、肉まん食べるネ？」

いたたまれない空気になったのか、超が蒸籠ごと肉まんを古菲に渡してるけど、古菲は机に突っ伏した顔を上げたものの、声も発さずにいらぬことをジェスチャーし、再び突っ伏している。

「アレって重傷よね？」

「今まで同じクラスでしたが、古菲さんのあの様子はあり得ないことですよ。朝倉さん、何か知らないですか？」

クラス中が重い空気になり、ほぼ全員が複雑そうな顔をしている。

さっきの発言云々じゃなく、底抜けに明るいクラスメイトの豹変を何とかしたいとクラス中が思っているようだった。そこで綾瀬さんが呼んだのは真っ赤なパイナップルの頭のお姉さんこと、朝倉さんだった。報道部に入ってるから

情報は知り尽くしているらしい。それで分かったのは、古菲は最近知り合った修行仲間が姿をくらまし、さらに所属している格闘サークルの猛者達が次々に通り魔に遭い続けていることから、自主練習を含む活動の全てを停止させられたらしい。その結果、強くなるための夢を目の前で中止させられた反動からこうなってしまったとか。数日前の僕が転校してきた日くらいまではまだ大丈夫だったようだけど、いつも続けてることを突然中断させられた影響は大きいって事だね。

ただ……その通り魔の正体は先日目撃しちゃってるから誰か分かっているんだよね。そんな時、古菲に動きが見られた。

「それがさ、通り魔の正体は目撃情報が微妙なんだよね、子供みたいなので証言ばかりでさ」

朝倉さんがこれを発した直後だったかな。もの凄く驚いたような顔をしたかと思えば、何かを理解したような顔になっていた。

「……っていうわけでき、多分そういうことなんだよ、うん!!」  
「何がという訳力？」

「一人で納得されたらここに集まる理由もないと思いますよ?」

あゝ、突っ込みが来たあ！感謝感謝！

「うん、分かってるよ。今から説明するから」

放課後になつてから古菲は勢いよく教室から飛び出していった。どういふわけか全てを教室に置いたまま、一瞬でチャイナ服に早着替えして走っていったからクラスは騒然となった。

「お待ちなさい！！ 鞆を置き忘れて服を脱ぎ散らかしてますよ！！」

という、この学園を覆う結界の影響なのか、ピントが外れた制止の声をいいんちよさんが上げたりもして、授業中もノートパソコンに没頭してる長谷川さんが突っ込んだりもしてたけど、それは今は別にいいかな。クラスは古菲に元気が戻ったって騒いでた。でも、実際には違うんだよね。だから僕は事情が通じる超、葉加瀬を誘って工房に集まった。四葉さんは別の部屋で木の実の採集とか料理に没頭中で今は不在。ちなみにポケモンは全部この部屋にいて、ゴンベはお腹いっぱいポロツクを食べて熟睡中。で、本題本題っと。

「多分さ、通り魔の正体が古菲の修行相手で、古菲のパートナーかもしれないポケモンなんだ」

「それは本当なんですか？」

「僕の森にいた奴の中にそのアサナンに修行と称して跳び蹴りを吹っかける奴がいたんだよ。あのパイナ……朝倉さんの話と古菲の反応を合わせてみてもそれが一番可能性が高いよ」

今パイナップルって言いかけたような……

朝倉「パイナップルカ。まあ、間違ってはいないガナ……」

僕が言い間違えたとき超と葉加瀬が複雑な顔をしてたけどまあいいや。アサナンも誰のことか思い出したらしく、超に耳打ちしている。パートナーになった相手にだけ、そのポケモンの言葉が分かるらしいんだ。だから四葉さんもゴンベの好みを事細かに聞いてたし、アサナンの声も僕は分かるけど、普通人間には鳴き声でしか聞こえない。けど、超にはしっかりと伝わっていた。メタングも誰のことかが分かったみたいで葉加瀬に話してる。

「ふむ……、古と共感しそうなポケモンネ……」

「それじゃ、古菲さんはそのポケモンを探すために飛び出したということでしょうか……？ 古菲さんの前から姿を消したことを考えると、古菲さんと距離を取っているように思えますが……」

「それでも多分通り魔事件の犯人」修行相手ってことは分かったから探さずにはいられないって事だよ」

というわけで、僕たちは二手に分かれて搜索することにした。まだ麻帆良をよく分かっていない僕は古菲が修行場所に使用している世界樹広場を中心にした範囲、超と葉加瀬は格闘サークルの活動場所を中心にした範囲だ。まあ、超と葉加瀬のパートナーはエスパータイプだから大丈夫だろう。

それで僕は世界樹広場にやってきた。

そしたら何か奇妙な視線を感じたんだよね。アブソルかと思ったけど違うっぽい。アブソルとかじゃなくて、じーっと僕の方を観察してるみたい。じろじろ見られるなんてゴンベじゃないけどさ、照れちゃうよ、てへっ！

「照れるなー!!」

恥ずかしがる振りをしてたら、不意に声がして何かが飛んできた。避けようとしたら、避けた瞬間地面に当たらずに僕を追いかけてくる。光る緑色の葉っぱ……マジカルリーフだ。ということは……彼女か。

このまま逃げるわけにも行かないって言うか、攻撃してきた理由が何となく分かったからミュウの姿になって、守る攻撃でそれらはね除けた。そして世界樹に近づくと、彼女はすぐに姿を現した。

「やほ、元気そうだね、ミューズ」

「……やほ、じゃないわよ。でも元気そうね、ミュウも。私の縄張りに何しに来たの？」

「いやちよつとき、クラスメイトのパートナーかもしれない通り魔してるバカを探しに來ただけって、縄張り!？」

「反応が遅いのはわざとらしいわね。リーフブレード食らう?」

「その時は守るけど?」

「でしようね」

そして互いに顔を見合わせて笑う。どうやら彼女は勝手に別の世界に飛ばす対象にしたことを怒っていないようだ。

僕が世界樹で出会ったのは僕の森の山守りの一人でキレイハナのミューズだった。観察したり攻撃したりしてきた割にフレンドリーに話しかけると普通に返してくる。こういう性格なんだよね、ミューズは。だから僕が事情を話すと、さっきの僕の姿を思い出したみたいで驚いたように目を見開き、いきなりリーフブレードを突き出してきた。

「ん？ 何？ いきなり物騒だよ？」

「は？ 物騒も何も、何考えてんのよ！！ あんた一応 でしょ？」  
「でも性別学上ミュウに性別はないよ？」

「そうじゃなくて、どうしてヒカリちゃんの姿にちゃっかり変身して生徒をやってるのよ！！」

「ああ、それはね……」

どうやら僕がよからぬ事を考えてるから女の子の変身して生徒になつてると思ったらしい。失礼だな、僕がいつそんなことをやつ……、……そう言えば前に似たようなことをしたっけ。

思い出したけど、今はそれも置いておこう。とりあえず、僕は生徒になつた経緯を話した。

「……パートナー云々のことは分かったわ。ただ、その……ポケモンみたいな学園長も相当ね」

「でしょ？」

「ええ、絶対過去に次元の穴を通り抜けて変わり果てちゃったのよ。だからあんたを女子生徒として入学することだつてできちゃうんでしょうね」

ミューズはすごく呆れた顔をし、同時にミューズもあの学園長はポケモンの認識になつたらしい。

「で、あんたは古菲っていう子だっけ？ あの見た目が底抜けに明るそうなバカっぽい子とその修行仲間を探しに来たのよね？」

「うん。てか偉くぞんざいな言いようだね」

「だって見た目がバカでしょ？」

「数日同じクラスでみんながそう言ってるのを聞いてると流石に否定はできないけどね。……で、知ってるの？」

「知ってるわよ」

なんだかんだでミューズは古菲を知っているようだった。

でも……、

「この世界に来てから、この世界樹の上が過ごしやすかったのよ。だからずっとここにいろ。時々魔法使いだっけ？ そいつらが私を捕まえに来てるけど、あほらしいことばっか叫んでるから無視してるわ。私のパートナーはもう決まってるみたいだもの」

「えっ、ゲットされちゃったの？」

「んなわけないじゃない、この近くを毎朝走ってるから覗き見てたら、その子に何かを感じたのよ。だから、ああ、あの子が私のパートナーかって思ったの。見た目からして私の好み合ってるからいやじゃないけど、自由も捨てがたいのよ。で、気が向いたらパートナーになってあげる程度でいいかなって

思ったところよ。だってあの子はまだポケモンのこと知らなさそうだし、絶対、真正のバカだと思うもん、あの顔からして」

古菲のことを聞く前にミューズはそれ以外のことを話し始めた。そのことも僕は聞きたいんだけど、後にしたいなって正直思った。けどさ、ミューズも話し始めたら止まらないし、少しくらいいいかな。だけどミューズのパートナーって誰だろ？ 真正のバカっていったら明日菜だろうけど……明日菜とミューズが似てるとは思わなから違う人なんだろうなあ。これで明日菜がホントにミューズのパートナーだったら爆笑物だけども！ それにしてもミューズはモン스터ボールのこともパートナーのことも理解しちゃってるらしくて、ここにも結構長くいるみたいだって分かった。

「でさ、古菲のことなんだけど……」

「あ……、そういえばそうだったわね、すっかり忘れてたわ」  
「おいおい……」

すぐ忘れるのは老化現象……って言ったら葉っぱカッターが飛んできた。一応女の子だからね、一応。

「……正直、その一応は突っ込みたいところだけどまた今度にしてあげるわ。……古菲？はよくこの下に修行に来てるのよ。だから修行仲間のこともよく知ってるわ。通り魔事件も目撃したし、何でそう言うことをやってるのかも聞いたのよね」

「え、会ってたの？」

「だって、でっかい巨体のおじさんに向かって後ろから頭に跳び蹴り食らわしてるのよ？ 酒乱かと思って聞いてみたのよ。真顔だったから驚いてけど」

「へえ……、で、何だって？」

「単純に彼らしいわ。強くなりたいそうよ」

普通にそう言われると、何か首をひねる物がある。あの種族は元々そう言う願望を持つてる奴らばかりだった気がするんだけどな？

「そりゃそうだけど、多分負けたくないのよ」

「誰に？」

「古菲ちゃん。だって修行で勝負して勝利してるの古菲ちゃんばかりよ？ まあ……アレの何処が格闘技の訓練って思うことばっかりやってたわけだけど、あの子結構マジで頑張ってる古菲ちゃんが振り回されてたのよね。でも組合になると負けてたのよ」

「ふうん……」

「あ、それで古菲ちゃんの場合でしょ？ さっき、あっちの森の方に歩いて行ったわよ？」



ミューズがそう言った直後だった。

僕は直感的に森の方から底知れぬ嫌々な予感を感じた。それはミューズも同じだったみたいで、

「……ねえ、何よ、この気配」

同じように嫌な予感と気配を感じ取ったらしい。

この気配、嫌な予感、僕は何となくだけど先日のゴンベの一件と同じだと感じた。

「実はさ……」

それをミューズにも話してみると、

「ええっ！？ アイツらもこっちに来たの！？ ったく、何処にでも沸いて出てくるわね……、あんたがあつたのが3匹で、今度は30匹かしら？ 殺虫剤とかぶっかける？ あ、それでも生きてそうね、無駄にしつこいし……」

ミューズにとってロケット団は一般的に女の子が大嫌いな黒光りのアレと同格だった。だからそれと同格の扱いをしている。しかも真顔で質問してきたから対処に困ったんで、

「それじゃ、急ぐからこれ……」

その場をさっさと離れようとしたら蔓の鞭が身体に巻き付いてきた。そして背中にミューズが飛び乗ってくる。

「何言ってるのよ、私も行くに決まってるでしょ？　せつかくこつちの世界を満喫してるんだもの、ぶち壊されてたまるもんですか！　」

やはりトラブルには自分から飛び込んでくるらしい。そういうわけで僕とミューズは一緒に森の方へ向かうことにした。その時に下の方で騒がしい声が幾つか聞こえたけど、とりあえず聞き覚えのある魔法使いの声だったから今は後回しにすることにした。

これは一体どういう事なのだろうか？

いや、何も目の前の出来事が理解できないというわけではない。ただ、何もできないのであればその場から逃げ出すことも可能だと思うのに、何故かその場で頭を抱えたその人物は数秒後には捕まり、今日の前でボコボコにされている。それも……アレは超の作ったロボットの失敗作だろうか？　金属のような身体をした生き物、牛とかを思わせる角や頭をした変わった生き物が一方的に白いローブ姿の男性をボコボコにのし続ける。それも既にこれで3人目……、その近くには見た目からして大して強そうでもないひよろひよろの男達が5人くらい立っている。彼らはその生き物、あるいはロボットを操っていることでもいい気になり、威張りちらしていた。私が不意を突かれていなければ、何故か意識はあるのに全く身体が動かなくなっているこの状況が何とかできればあれくらいの男達を倒すことは簡単なことだ。でも、今は何故か鏡みたいな形をした物から発せられた光を受けた直後、全く動けなくなっている。それは、私の横に

いる、ようやく見つけることができた修行仲間も同じ状態だった。しかも私以上に苦しそうにしている。

……この修行仲間に出会ったのはいつの頃だったか？

それははつきりとも覚えていない。ただ、いきなり背後から飛びかかってきて、その攻撃を一つずつ受け止めては反撃していたらそれが楽しくなって、気付いたら夜遅くまでそれが続いていて、そして修行仲間となった。流石にその日は遅くなりすぎて散々怒られたが、毎日世界樹広場の近くで修行を行うようになり、刹那や楓さえも舌を巻くはずの私の修行メニューを楽々とこなし続け、私と戦うことを楽しそうに行っていた。麻帆良に強い相手を求めにやってきた私から見て、ここまで嬉しい修行仲間はいないと思った。ただ時々、今目の前でボコボコにされているような白いローブの男性や女性を世界樹の近くで見かけることもあり、その度に修行を中断することもあったが、特に気にせず毎日行えていたと思う。とはいえ、何故か世界樹広場に来ようとする足が重くなり、疲れたわけでもないのに行きたくないと思うようになった。そして自分の歩くペースも乱れ、早くそこから離れたいという思いがドンドン高まってきた。しかし、行きたくないと思ってしまう、その思いだけが何故か大きくなり続けてしまうせいで私は妙に早く世界樹広場にたどり着きたいとも思い至り、足を進め、彼との修行を楽しむこともあった。

しかし、確か私がアレを口にした次の日くらいだったろうか、彼が修行場所に姿を現さなくなっていた。

そして、格闘サークルの者達が通り魔にあって倒されることが起き始めていた。最初は何が起きたのかも分からず、私の修行自体も事件が解決するまでは行わないように言われてしまった。私が食べることと同じくらい大好きで毎日やり続けたいこと（部屋でできる

ことは部屋でやってる」を封じられるまでされて、流石に私も参りかけた。クラスのみんなも心配してくれているのは分かったし、超もからかい半分に心配しているのは分かった。お菓子のがれが降るといふのは流石に怒りを持ったが、それを口にする転入生にも呆れは持った。でも、それも別にどうでもよくなりかけていた、朝倉の話聞くまでは。

「通り魔の正体は目撃情報が微妙なんだよね、子供みたいなのって証言ばかりだし」

この時点で私は通り魔の正体が修行仲間の彼であることを確信した。

多分、私がアレを言ったから、それを実行したのだろう。

「もっと強くなるためアルか？ この学園にいる猛者を倒していけばそれなりに強くなるアル」

実際、私も道場破りを超から教えられて実行に移していた。その結果、今に至るわけだが……まさか通り魔を行うとは思わなかった。いや、本人は大真面目に戦いを挑んだに違いないが、それが全て奇襲になってしまったのは彼も私と同様に頭が弱いのもかもしれない。

そう言うわけで犯人の目星をつけた私は彼を捜して走り回った結果、ようやく彼を見つけることができた。

だが、突然白いローブの男達が3人も現れ、同時に何もないはずの場所から黒い服の男達が現れて……そして今、目の前で一方的に白いローブの男がやられているという光景が生まれている。

よくよく考えればこの鏡みたいなのも、彼も、牛のような巨体もみんな同じ生き物なんだと思う。でも、それが何故ここにいて、こういうことが起きているのかはさっぱり分からない。頭をひねっても浮かび上がらない。一つだけ分かるのは、あの黒い服の男達と鏡と牛が悪い奴らと言うことだけだ。早く身体が動くようになってほしい、そうすれば今度は私が相手になる。そう思っていた。でも、それよりも早く、上空から声が聞こえてきた。彼らも私も思わず空を見上げたら……、

「うわっ、ちよつとミューズ何処触つ……、なんか重いよ、太つ……痛っ!!」

「いきなり何言い出すのよ!!　ちよつと最近成長しただけよ!!　断じて太ってない!!」

前にハルナが漫画のネタとかで再現していたような、猫も食べない（犬も食わない）という、羊に殴られる（馬に蹴られる）とかいうチワワ喧嘩（痴話喧嘩）が行われていた……。

「おい、あいつらは!!」

「ああ、ボスが言っていた逃げた奴らに違いないぞ!」

テレポートで古菲がいるだろう場所の上空に飛んでみたら、案の定ロケット団がいた。ただミューズが変なところを触るか……、

「触ってないわよ!!　ちよつと抱きついてるだけでしょ!!」

はいはい、……で、僕たちが喋っていると下からはモンスターボールが飛んできていた。よく見るとロケット団が強制的に僕たちを捕まえることのできるマスターボールの偽物ばかりだった。だけど……、

「ねえ、ミユウ」

「うん、僕も思ったよ」

ボールは何度が僕たちに当たったけど、何の反応もなく落下していく。

「なああああつっ！！　どういうことだ、これは！！」

「マスターボールが反応しないだとおおおっっ！！？」

多分この世界ではパートナーがもう確定してるから、僕たちを捕まえられるのは僕たちのマスターだけなんだと思う。だからそれ以外のボールは全く反応しないっていうことで、ロケット団がどれだけ僕を捕まえようとしても全く無駄って事だね！

「仕方ない！！コイツラだけでもつれていくぞ！！」

「そうだ、魔法の研究だとか言う馬鹿馬鹿しいことを幹部がやってるんだ！　コイツラを連れて行かないとボスにどやされる！！」

ミユーズとハイタッチして喜んでたら、ロケット団はとっても重要なことを叫び始めた。だからコイツラはバカなんだよ。前回の時の話と組み合わせると、多分この世界には僕たちよりも前にやってきたか何かしている可能性がある。そして魔法のことは知っていて、魔法が使えなくなる場所を作り出せる機械を作ったんだと思う。それから麻帆良で魔法使いを捕まえてるんだろう。前回の時

に5人目って言うてたし、後であのポケモンみたいなのに聞いてみようかな。とりあえずは僕たちの平和な生活のためにロケット団の悪事を阻むのが先決だ！

「ミューズ！」

「OK!!」

ミューズは僕の背中から飛び降りると同時にマジカルリーフを大量に出現させ、大きな階段を作り出して下りていく。マジカルリーフがミューズの足場になってるんだ。そしてロケット団の身体と、鉄の鎧に覆われた身体を持つポケモン……ボスゴドラの頭に蔓の鞭を巻き付けて動きを封じている。

「おい、何処触ってんだ!!」

「ちよっ……、動くな!! やめろ、バカ!!」

「そっちこそ、やめろ!! 食い込んでるって!!」

5人の男の身体を一気に密着させて締め付けてるせいか、妙に怪しい声が聞こえてくる。でも、とりあえずミューズが楽しそうに遊んでるからほっておこう。ここは突っ込んだじゃいけない。僕は今のうちに古菲のところに行こうとしたら……まだいたみたい。

「あのさ、邪魔なんだよね、そこ」

目の前には昔の人が使ってた銅鏡のような形をしたポケモン、ドミラーがいた。こいつの封印と催眠術、神通力で古菲達が捕まっている。そう思ったら高速回転し始めた。ジャイロボールだ。

「攻撃するつもり？ だったら僕はこれだ!!」

ジャイロボールで向かってくるドーミラーを影分身でかわすと、そのまま黒い中が空洞の大きな球体……ダークホールに入れて眠らせる。その隙に炎のパンチを叩き込んだら簡単に倒せた。どうやら特性は浮遊のようだ。今のうちに僕の身体を発光させてアロマセラピーを行い、尻尾から取り出した卵を

古菲の横に寝ているポケモン……手頃な相手を見つけると殴りかかっていく喧嘩ポケモンのバルキーを回復させる。古菲に至っては突然何が起きたんだらうって言う顔をしていた。

「とりあえず大丈夫……？」

「あ、うゝ、大丈夫ア……って、その声は転入生アルか！？」

わざと声だけ変えて喋ったら案の定、食いついた。

「本当はこつちが地声でこつちが本当の姿なんだけどね」  
それ  
は後で超に聞いてよ」

「超！？ どういう事アル！？」

「今は後回し。まずはアレを何とかしないとね」

元の声に戻って元の姿のまま古菲に話す。既に古菲は訳が分からない様子だったけど、バルキーは何をするべきかが分かったらしい。そんな時、ボスゴドラの横にはヘルガーやペルシアンが現れてミューズをはね飛ばした。その隙に彼らも蔓から解放されていくけど、みんな一様に下半身押さえて顔は真っ赤になっている。ミューズ、何したのさ……。

「えへへ、ちょっと男性のプライドをいじくっただけ」

……聞かなかったことにしよう。古菲は目の前に喋るポケモンが2体いても、ポケモン自体を初めて見ているのか、今までバルキー



の事を疑問に思わなかつ……、……ああ、古菲はバカだったつけ。  
疑問に思わなくて当然か。

「むむつ、今言われようのないことを言われた気がするアル……」  
「気のせい、気のせい。でさ、とりあえず、アイツらを倒さない  
ね」

「お前達、どれだけレベルが高かろうと大勢いる我々を倒せるとお  
もつ……、うわあっ!？」

ボスゴドラが2体に、ヘルガーが4体、ペルシアンが3体いて、  
ロケット団が5人。いきなり大所帯になったと思いながらも奴らを  
倒そうと喋ってたら、ロケット団が自分がまるで優勢になったとで  
も言うような気になって歩いてくる。そして、いきなり全員が一斉  
に転んだ。古菲とバルキー、僕は驚いたけど、ミューズは腹を抱え  
て大笑いしている。よく見ると彼らの足下の植物に変化が起きてい  
た。植物が絡み合って転びやすくなっている。どうやら草結びを使  
って罠を仕掛けていたようだ。草結びは体重が重いポケモンほど効  
果があり、今のトラップによってヘルガーとペルシアンが殆どボス  
ゴドラに潰されていた。

「今のうちよ、アイツらはみんな格闘タイプの技に弱い。思いつ  
きり力を込めた一撃なら倒せるはずよ!」

「うゝむむ……、よく意味が分からないが、アレを倒せばいいアル  
ネ? 分かったアル!」

古菲とバルキーが同時に飛び出した。それらに対して生き残った  
ヘルガーとペルシアンが一对ずつ、古菲達に襲いかかる。でも、そ  
んな2体には水の波動とエナジーボールがぶつかった。僕とミュー  
ズの援護射撃だ。僕たちの攻撃を受けて足の止まった2体の懷に、  
古菲とバルキーのパンチが叩き込まれる。よく見ると2人が使って

いるのはマツハパンチだった。とてつもないスピードで相手に素早く拳の一撃を叩き込むこの技によってヘルガーとペルシアンはすぐノックアウトになる。そこで2人の動きは止まるかと思えば、すぐにそれらを飛び越えてロケット団とボスゴドラの元にかけだしていた。

「すごい！！ 2人とも修行の成果が出てるじゃない！！」

「まさか人間がマツハパンチを使うとは……古菲ならあり得……っ、ん？」

「えええ……！？」

ボスゴドラの態勢が整ってなかったから今のうちだと思っ僕たちは特に援護射撃も何もしていない。やったとすれば捕まりかけた魔法使いを別の場所にテレポートさせたことくらいかな。ボスゴドラにボコボコにされて見るに見れないくらい顔が腫れ上がってるし、傷だらけだった。一応人間にも聞くと思う回復効果のある技、アロマテラピーとか癒しの鈴とかを使っておいたけど、それでもすぐに回復はしないだろうね。そして古菲とバルキーの様子を見ていたんだけど、驚くことが起きた。突然古菲とバルキーの姿が重なり、古菲の姿だけになったからだ。

「ミュウ、アレってどういう事？」

「いやあ、僕も初めて見たよ……バルキーが完全に古菲に同化してるみたいだね」

姿は古菲のままだけど、動きの中にバルキーの動きが加わっている。それに古菲の身体からバルキーの力や気配が感じられた。よく見れば全ての動きや力が上昇しているのも分かる。この世界ではもしかしたらトレーナーとパートナーポケモンの絆が深まっているとこつという事が起きるのかもしれない。僕たちが驚いている前ではボ

スゴドラが片方は口から水の波動を吐き出し、もう1体が尻尾を振り回してアイアンテールを行おうとしている。でも、古菲の身体がいきなり分身してそれらをかわしていく。影分身を使ったらしい。でも、まさかポケモンの技まで使えるとは……、もしかしたらさっきのマッハパンチも本当はこういう事だったのかな。

「ボスゴドラ、小娘一人に何をやっている!!」

「そうだそうだ!! メタルクローでたたきつぶせ!」

「こっちは影分身からラスターカノンだ!」

ロケット団も負けじと指示を飛ばし、1体は爪に力を込めて古菲に向かい、もう1体はその周囲に分身を作り出し、いつでも口から光線が発射できるように身構える。すると、古菲はそのメタルクローを受け止めるのでも攻撃で打ち返すのでもなく、メタルクローの上に飛び乗っていた。そしてそのまま高くジャンプする。その時に古菲の目が若干色を変えた。そして落下と同時にマッハパンチの一撃を影分身をしていたボスゴドラに叩き込む。影分身で回避率が上がった相手は確実にマッハパンチでしとめたところを見ると、さっきのは見破る攻撃だったと思われる。でも、ボスゴドラはもう1体いた。そいつが攻撃を終えたばかりの古菲を狙っている。

「古菲!! 後ろ!!」

叫ぶけどちょっと見とれすぎて僕の動きすら遅い。でも、ここにはもう1人いて、ちゃっかりミューズが気付いていたらしい。古菲を背後から攻撃しようとするボスゴドラの眼前にはピンク色のもやが吹き出された。ミューズの甘い香りだ。これを受けて思わずむせ、回避率が下げられると同時に動きが鈍くなった。その隙に古菲がボスゴドラから距離を取ると、ミューズがおもむろに口に木の実を含み、思いっきり口から息を吐き出す。でも、吐き出されたのは息で

はなく、火炎放射だった。これは木の実の力によって攻撃を出す自然の恵みという技だ。至近距離から炎を受けてよろけるボスゴドラに古菲の最後の一撃が決まり、ボスゴドラも倒された。

「くそつ、覚えてろ!!」

「次はこうはいかないからな!!」

ポケモン達が全て倒されてしまい、ロケット団は機械を使って空間に穴を作り出し、我先にと逃げ出していく。

「ミューズ!」

「ええ、これ以上来させるわけにも行かないわ!!」

僕は身体中のエネルギーを集め、ミューズは光を集める。そして破壊光線とソーラービームを彼らが逃げ出していく穴の中に思いっきり突っ込ませた。その時の彼らの顔はもの凄く青ざめていたけど、僕たちから見ればこれ以上の侵略は溜まったもんじゃない。だから思いっきりやってやった。でも、彼らの姿がないところを見るとちゃんと元の世界には戻ったんだろう。逃げられたとはいえ、一応これで後は古菲のことだけかな。

「……というわけなんだけど、分かった?」

「うゝむむ、つまり美優はポケモンでポケモンが人で……」

「ミュウ、古がそんな難しい説明を理解できるわけがないネ」

「確かにこれで理解できたなら超さんが言っていたとおり、お菓子のあられが降りそうですね」

「むむつ、それは聞き捨てならないアル」

「でも、事実でしょ？」

場所は変わって超の工房、古菲を連れて戻り、事情を説明って事になった。その時ついでにミューズのことも紹介しておいた。でも、古菲は結局理解できなかったみたいで頭を抱えている。超は絶対理解できないと断言し、ミューズも確かにと首を縦に振る。だからとりあえずこの世界に僕たちが事故で飛ばされたこと、古菲がバルキのパートナーになったこと、ポケモンの存在はばれたら大変なことになるから隠さなきゃいけないことを理解してもらった。で、魔法に関してだけど、そっちは後で学園長の部屋に連れて行くことにしている。魔法の秘匿って奴だ。ただ、超達のことはバラさない方向ってことで僕たちの話は進んでいる。それでも学園長にはバレているだろうけど、何も言ってこないから知らない振りをしていようかな。

「それにしても……古がポケアーマーを手にするとは思ってもよらなかったヨ。それだけ古との相性が高まった証拠ネ」

「ポケアーマー？」

「ワタシがつけた、この世界でのトレーナーとポケモンの相性や絆信頼関係が高まったことで使えるようになるとされている特殊な力の事ネ。過去にも魔法界での戦いの時にポケモンを使っていた魔法使いがその特殊な力を発揮したと言ひ伝えられているネ」

ちなみについて超と葉加瀬にもできるらしく、それを見せてくれた。四葉さんはまだできないらしい。

たださ……、

「アーマーチェンジエボリューション」

2人はそう叫んでいた。その瞬間、2人とアサナン、メタングの姿が光と共に目の前で重なり合い、僕とミューズはさっき古菲とバルキーがなったような変化を目にする結果に至る。変身は一瞬で終わっただけ、2人が言うには変身シーンはアニメのような感じで長く感じ、いわゆる美少女アニメの変身シーンのようなことが行われているという。多分これは当人同士が経験しないと分からないことなんだろう。何故かミューズが目を輝かせていた。で、2人の変化した姿だけど、超は青いチャイナドレスを着た姿に、葉加瀬は背中にパソコンのような装置を背負い、そこから繋がった金属製のハンマーのようなメカを手にした白衣姿に変わっていた。

「どうネ？ この姿の時はいつも以上に力が強くなた気がするヨ」  
「私はこの背中の機械が自動的に計算して導き出した内容を私の頭に流し込んでくれるみたいです。そして私が分析し、解析し、考えたことと連動して相手の分析内容がこの眼鏡に映し出されるようです。また、このハンマーも武器以外に使えるようですね」

これが2人の感想で、多分超のポケアーマーの効果は古菲と同じものだろうと思われる。ただ、アサナンはエスパタイプも兼ねているからその力もついていると思う。そして葉加瀬のポケアーマーは何かというか、メタングを身体に武装したって感じだった。これがメタグロスになったら個人要塞になるんじゃないかな？ 四葉さんとゴンベのは想像しにくいし、クラスにいるネイティ達も一体どうなる事やらで、ポケアーマーはおもしろそうだしロケット団対策の戦力になる反面、その結果がどうなるか分からないのが怖いところだろう。まあ、僕は面白いと思って傍観するつもりだけどね。

そして数時間後、とりあえず学園長のところに古菲を連れて行って登録と魔法の記憶の封印を施した。その際、ミューズのことでも登

録し、ミューズは学園長にだけ自分のパートナーかもしれない存在を耳打ちしていた。その話が聞けなかったのは残念だけど、学園長はもの凄く驚いた様子でミューズの方を見つめていた。そんなに驚く存在だったのか、誰なんだろう……？

ちなみに案の定、超、葉加瀬、四葉さんのことはバレているようで、そつと表を覗いたらザジさんも含めて4人分が既に書かれていた。でも、この表を誰かに公開するつもりはないようで、学園長も超達3人の部分は空白に見えるようにしている。その理由は定かじやないけど、とりあえず傍観してるって事かな。

ただ、ロケット団のことは驚いていた。

「そ、それは本当なのじゃな……、……近頃魔法使いの失踪が起きていると報告はあったが、まさかそんなことが起きておったとは……」

どうやら失踪と言うことで行方不明の報告はあったらしい。そして謎の暴行事件のことや、その時に魔法が使えなかったという話、自信を喪失した魔法使いの存在なども聞いた。

「ロケット団も無駄にしつこいからね、早めに対策を立てた方がいいんじゃない？」

「私とミユウで異次元の穴に攻撃叩き込んだから、相当向こうにも被害は与えたけどね……、アイツらのしつこさって半端じゃないもの」

そして数時間後、ロケット団の存在や彼らの脅威度は麻帆良にいる魔法関係者に伝えられる結果になり、対策は今後検討していくことになったらしい。また、同時に彼らが怪しくても遠くから傍観す

る、あるいはその場から立ち去り、対策が立てられるまでは彼らに  
関わらないようにという警告も出た。ただし、かなりの反発もあつ  
た。そりゃそうだ、正義の魔法使いが怪しい侵入者を見逃せるわけ  
がない。

「……そんなこと言つて、無力な存在がポケモン相手に勝てると思  
つてるのかしら？」

「それだけ正義を妄信してるって事だよ」

僕たちが呆れる中、何とか学園長は説得し終えていた。といつて  
も理解できたとは限らないけどね。大半は先日までの事件での被害  
状況を聞いて半ば納得せざるを得ないと判断したからだろうけどさ、  
僕たちもまだ奴らの機械が作った空間の中で何処まで魔法が使えて  
何処まで使えないのかは分からないから何とも言えないわけだ。ま  
あ、それは後日分かることだろう、ということにしておく。

その頃、ロケット団本部のとある一室にはメチャクチャに破壊さ  
れた大きな機械を前にロケット団幹部が頭を抱えていた。

「……せっかくミュウとキレイハナを見つけたという報告を受けた  
が、ここまでやられるとはな」

「あの世界にいることは判明した。しかし、これは治すのに相当か  
かりそうだぞ」



その機械はロケット団の団員や幹部を他の次元の世界に送ることのできる機械であり、団員達が持っている機械に連動して異次元の穴を開くことのできる特殊な機械だった。だが、問題はそれを行う場合、この部屋で機械の前で行わなければいけない。だからあの時ミュウ達から逃げようとしていた団員が穴を開いたときも、ミュウ達には穴の中ははっきり見えなかったが、この機械がその先にあつたのだ。そのため、ソーラービームと破壊光線はこの機械に襲いかかる結果にいたり、しかも攻撃の余波が異次元空間を共鳴させ、別の世界に飛ぶという特殊な工程を狂わせてしまったらしい。そして爆発も起こり、機械は大破した。せっかく魔法使いを捕まえたり、使えそうな人間や別の世界に飛ばされたポケモンを捕まえたりと悪事を働き始めた、そして別の世界への侵略を始めた彼らは水を差されたわけで、

「どうする、これでは何もできないぞ……」

彼らはすっかり頭を抱える羽目になっていたのだ。

だが、頭を抱える理由はもう一つある。

「予備の機械があるとはいえ、送れる存在が限られるからな……」  
「使えない下っ端を送ったところで何に……、……とはいえ、彼らのかつての功績はなかなかのものだ。かつてのように活躍できるのならそれに越したことはないがな……」

もう一つ機械はあるが、それは誰でも別の世界に送れるわけではなく、特定の人物に限られるらしい。多分全部の団員や幹部を調べて適正があるものを既に見つけてあるのだろ。ただ、その団員を送ることに躊躇しているようだった。

「あいつらかぁ、使えるのかしら？」

「俺たちもそうだったけど、出てくるたびにアイツらも失敗してたよな？」

とある2人も口々に言うが、その機械で送れると判断された存在はまだ4人しかいない。

この後、長い会議の末に決定されたか否かはまだはっきりしないが、多分ロケット団は彼らを送ることになるだろう……。

#### 第4話 頭の中身もそうだけど、『バカ』っていう存在も、存在してていいのよ

どうも、水竜です。久々によやく書けました。色々忙しかったのでエレメンタルはあまり進めれてないです。とりあえずポケアーマーのことも含めて書くことができたのでよかったです。

今回は予定では風香と史伽になるかと思っています。というより、正義の魔法使いがその存在を懸念している超をあまり表で動かせないで、それよりも動かせる存在が必要なわけです。だからこの作品だとミュウは愛衣ちゃんか、双子のどっちかと動くことが多くなるかと思っています。

また、次回にはロケット団から懐かしいあの2人も登場します。

というわけで、次回もお楽しみに！

第5話 最初から知っていてもよかったこともあるけどさ、知らない方がよかつ

＊＊：「はあ……、偶然というのは恐ろしいものね」

ミューズ：「あれ？　＊＊、どうかしたの？」

＊＊：「ええ、ちょっと驚いているの。作者もよくよく考えればって驚いて慌ててるみたいなんだけど、私の名前、新アニメに出てるじゃない？」

ミューズ：「えーっと……、……あああつ！！！！　そう言われ  
てみると出てるじゃん！！」

＊＊：「そうなの。だから急いで考えてるみたいなの。でも結局変  
更はなしになってそのまま行くみたいだけど」

ミューズ：「ああ、キャラがかぶっちゃいそうだけど実際かぶつて  
ないもんね。設定上の性格が全く違うけど、同じ名前ってこういう  
ときにやりにくいものよね」

＊＊：「そうなのよね。でも、まさか名前がかぶるとは思ひもしな  
かったでしょうね」

ミューズ：「作者が構想してるだけのポケモン作品の主人公の名前  
もそれだったし、幾つかの作品でもその名前を使おうと考えていた  
みたいだよ？　今全部考え直さなきゃって思ってるみたい」

＊＊：「野生児とモデルがヒカリちゃんみたいな子じゃ天と地の差  
ですもの、当然でしょうね」

＊＊：「……ところでそういえばミュウは？　前書きに出ることを楽しみにしてたでしょ？」

ミューズ：「あ……ああ、遅刻してるんじゃないの？　最近徹夜してるみたいだし……」

＊＊：「そう……、珍しいこともあるものね」

……本当は徹夜で寝不足だからって言われたから眠り粉盛った  
らなかなか目が覚めなくて困ってるだけなのよね。＊＊に頼んだら  
普通に目覚ましビンタ使いそうだから頼めないし……

＊＊：「ああ、ミューズ」

ミューズ：「何？」

＊＊：「目覚ましビンタが必要だったら言っただけ。どうせミュウの  
ことだから自分で眠り粉でも作って食べて起きられなかっただけな  
んでしょっから」

ミューズ：「う、うん……、確かめてから言っただけ……（バ、バレて  
るの？　バレてないよねー……）」「

## 第5話 最初から知っていてもよかったこともあるけどさ、知らない方がよかった

目が覚めたら目の前に天井があった。どうやら夢を見ているうちに変身が解けちゃって、そのまま宙に浮いちゃったらしい。何かすごく楽しい夢を見てた気がするけど思い出せないや。なんかミューズが大慌てになっていたような気がするけど、多分気のせいだよな？とりあえず変身して窓を開ける。

「うーん、いい風が吹いてるなあ」

麻帆良にやってきた1週間、僕がこの姿に変身してることもポケモンであることも知っているクラスメイトは相変わらず超、葉加瀬、四葉さんの3人しかいない。バカイエローの古菲はポケモンのことは覚えてるけど、魔法のことは記憶の封印で忘れてくれてるからいい。いやまあ、知ってても僕にも困ることもないからいいんだけど、超達が魔法使いとなんかよく知らないけど相性が悪いみたいだったから、学園長にはバレてるけど内緒ってことになっている。それ以外に変わったことは特になく、あれ以来は夜の麻帆良に出没しないようにしているせいかな刹那ちゃんや愛衣ちゃんに会うこともない。刹那ちゃんは教室、愛衣ちゃんは廊下で見かけるけどさ、話しかけるとバレちゃうし、刹那ちゃんは面白い勘違いをしてくれちゃってるから面白がつて話してないだけなんだよね、てへっ

それにしてもまだ朝早い、6時半を過ぎた辺りくらいだった。女子寮を出てる生徒も少ない。7時も過ぎれば朝練で登校する生徒が増え始めるはずだけ……、

「あれっ？」

こんな時間に珍しいなっという生徒がいた。私服で外に飛び出していく子がいる。僕のクラスメイトの……そうそう、あの見た目が幼稚園児に見える片割れの……鳴滝さんの妹の方だ。がさつっぽい風香ちゃんと違って、双子の割にこっちの方がおしとやかでまともで成績が若干マシな方だけど、何かキョロキョロしながら出かけていくのが見えた。全部上から見られてとは思っていないようで、何か大きなボストンバッグを肩にかけて、あの小さい身体でよくあんなに走れるなあって思える感じで駆けだしている。

「そういえば綾瀬さんが最近よく姉妹喧嘩をしてるって不思議がってたし……家出かな？」

とりあえず家出と認識することにした。

家出かどうかは学校に行ってから聞いてみようと思う。そして少しからかってみようかな？

「あ、今度は神楽坂さんだ」

神楽坂さんは毎朝アルバイトで新聞配達をしているらしい。両親がいないらしく、そう言う部分をおちゃらけていうのは流石の僕も出来ないよ、うん。

……今誰か、絶対からかってるって思わなかった？ 僕だって、そう言うところは割り切ってるんだよ？ うん、分かってくれればいいよ。

……今クスクス聞こえたような……、まあ、いいか。

神楽坂さんは真面目にバイトをしてると近衛さんも言っていた。

ただ、バイトで二度寝するから勉強が二の次になってるとかも聞いた。それってどうなんだろうって思ってた。聞いたなら、アルバイトでどれくらいボンバってるかを力説された。

「まあ、せっかくだから挨拶しておこうかな。おーい、神楽坂さん！」

窓から顔を出して手を振り、神楽坂さんは僕に気付いて手を振ろうとする。でも、ここからがおかしかった。僕に気付いたまではない、問題はその後だ。手を半ばあげかけた神楽坂さんの顔はいきなり硬直し、そのポーズのまま顔を青ざめさせ、石化したようにその場に立ちつくしている。僕は近くにある鏡で僕の顔を確認した。もしかして僕の顔に落書きがしてあるんじゃないかって思ったんだ。でも、全くその様子はない。おかしいと思って再び顔を出したら、どうやら家出じゃなかったらしい史伽ちゃんが早々と帰ってきていた。ただ、持っていたバッグはバッグごとなくなっていた。まあ、それは今はおいておこうかな。その史伽ちゃんも神楽坂さんと同じように硬直している。ただ、史伽ちゃんの方がすごい。なんというか、まだみんな14歳だから、エロ本の耐性とかないと思うんだよね。それを見ちゃったっていうような顔をして、顔がトマトみたいに真っ赤になっている。

まさかエロ本が壁に貼ってあるんじゃないかなって思ってた。少し顔を窓より外に出してみた。でも、そんな張り紙はない。

ただ、たくさんのラインが壁に引かれているのが分かる。ここからじゃよく分からない。だから私服に着替えて外に出てみた。

「2人とも、どうして固まっ……………なるほど、そういうことなのね」



2人に呼びかけても硬直したまま、呼びかけに答える様子すらなかった。だから仕方なく女子寮の壁を見て、僕も一瞬だけ硬直した。その後に関こえたのは僕のデジカメの音で、その音が若干2人の正気を取り戻させたのか、グギギッと音がするような、油の刺していないロボットのような動きで僕を見つめている。特に神楽坂さんの見つめ方は心底引きつっていて、僕にその写真をすぐ消してといわんばかりの表情をしていた。そりゃそうだろう、僕だってビツクリしたんだからさ。だから記念に取ったんだけどね。

「まさか神楽坂さんといいいんちよさんがここまでディープな裏のつきあいをしてるなんて、私もビツクリしちゃった……」

僕が何も行動してなかったせいか、ジリジリと目を光らせて近づいてくる神楽坂さんがいる。それを見てすっかり正気を取り戻し、怖くなってその場から逃げ出した史伽ちゃんがいる。で、僕はどうしたかって言うと、今の言葉をボソッと呟いた。今の神楽坂さんはそれで十分にダメージが与えられる存在になっていて、言葉をはかれると同時に硬直し、真っ白になり、消し炭へと変わる。その間に僕も避難することにした。

さて、女子寮の壁に書いてあったものはなんでしょう？

……なんていうクイズはまあ、別にいいだろう。答えは『全裸でベッドシーンを繰り広げる、口に出したらはばかれることを行っている真つ最中の神楽坂さんといいいんちよ』が描かれた漫画の1ページでした。なんかすごーくリアルに描かれている。それはもう、ここまでリアルに描いちゃっていいのって思うくらいリアルさであり、史伽ちゃんがあんな風になっちゃうのも分かるよ。たださ、僕は大丈夫なの。ポケモン達の交尾の立ち会いとか、かなりの数を重

ねてるから人間のアレを見たくらいで表情を変えたりはしないんだ。ただ、これはもしかするっていうのを感じたからかな。僕は自分の部屋には戻らず、別の部屋をノックした。

「珍しいですね、ミュウさんから訪ねてくるなんて」

「朝食でしたらすぐにミュウさんの分も作りますよ」

「ゴンベがいる以上、一人増えても別に構わないが、何かあた力ナ？」

訪れたのは葉加瀬と四葉さんの部屋。ちなみに超は古菲と一緒に部屋なんだけど、古菲は大抵後で四葉さんの肉まんを食べるのが朝食らしく、朝は鍛錬に出かけている。今はバルキーも一緒だからすごい鍛錬になっているとか超がいつていた。で、古菲がそんな風だからか、超は葉加瀬と四葉さんの部屋で朝食を食べるのが日課になっているらしい。といっても、2人が工房に泊まることや、葉加瀬が大学の研究室に泊まることもあるらしくて、状況は毎朝の状況で変化している。だから四葉さんも朝食を食べるのが一人増えてもすぐに準備できるそうだ。しかも今はアサナン、メタング、ゴンベがいるから作り甲斐が今まで以上とかで、腕を振るやすいんだってさ。

「うん、ちょっと女子寮の外壁がすごいことになってたんだ。で、これなんだけどね？」

僕が訪ねてくる理由＝事件が起きたと判断したのか、超が質問してきた。葉加瀬と四葉さんも若干気になっているようだった。唯一

気にせずにご飯を食べているのは（しかもしつかり箸を使って）ゴンベくらいだろう。四葉さんの料理がすごく美味しいからか、天使の微笑みって奴を浮かべている。僕はそれを横目に見ながら、超達がご飯を口に含んだのを見計らってデジカメの写真を見せた。

この直後、テロップで『お見苦しいものの変わりに綺麗な景色を流します』というのが出そうなことが発生したのはいうまでもなく、僕は爆笑したんだけど……、

「食事中はふざけないでください」

四葉さんの怒りに触れてしまったのもいうまでもない。コアラのようなほのぼのとした平和的存在の四葉さんは普段見せないような激怒の表情を僕に見せ、こう言っていた。

さて、しばらくしてから咳き込まなくなった超と葉加瀬（アサナ）とメタングはほぼ戦闘不能に陥ったからボールの中）は青筋を浮かべるものの、僕のデジカメをチラッと見ながら絵の持ち主を断定したようだ。僕を怒らないのは僕が普段から悪戯を好んでるかららしい。そんなにいたずらをしてるわけじゃないんだけどなあ？  
まあ、それはおいといて、本題に移ろう。

「……これはどう考えてもハルナの漫画のワンシーンと考えるのが普通ネ」

「確かにこれだけのものを描きそうな人は早乙女さん以外にいないと思われますね」

2人は壁の漫画の持ち主をクラスメイトで、僕の前の席の早乙女ハルナさんと断定した。そういえば綾瀬さんが早乙女さんはヤバイ漫画を描くのが好きだとか言ってたっけ。ただ、そういう暴走し

てる姿を見たことがないせいかわ僕にはピンと来ないんだけど、2人が言うにはこれくらいのもを普通に描けるのは彼女しかないそう。なるほどって思ってたなら、次第に廊下や外が騒がしくなっていた。どうやらこの外壁に気付いた人が騒ぎ始めたに違いない。一応この女子寮の近くには初等部の寮だったり、少し離れてるけど住宅地だったり、他の学校の寮だったり、いろいろなものがある。だからこの絵が外壁に存在していることはかなり子供に悪い影響を与えてしまいかねないものである。はっきり言ってしまうと、公の場所でもエロビが流されて、みんなが否応なしに目にしてしまうという状況だ。

「一体誰が描いたんでしょうね？」

「うん、それが分からないし、事件の幕開けだと思ったからここに来たんだ」

「でも、これは正直私たちでも誰の仕業かは分かりませんよ。ミウさんのお知り合いに絵描きさんはいないんですか？」

「いるにはいるよ。たださ、そいつはこういう趣味は持ってなかったはずなんだよね。こっちの世界に来てたとしても、ここまでバカなことをする奴じゃないはずだし……」

というわけで、特に事件が進展するような情報は手に入れられずに終わった。

分かったのはこの漫画を描きそうなのが早乙女さんだということだけで、それを示すように彼女のいる部屋に神楽坂さんが乗り込んでいくのが見えた。でも、結局進展はしなかった。というのも、早乙女さんは昨日からずっと部屋で寝込んでいたらしい。何でも大切なものをなくしてしまったことを気にしないようにし続けていたが、我慢していた分が破綻してしまったらしい。それで昨日から寝込んでいたらしいし、女子寮の外壁を一晚のうちに漫画のキャンパスに

するほどの技術が早乙女さんにはない。だから彼女の疑いはすぐに解かれたのだった。ただ、神楽坂さんはそれでも眠っている早乙女さんをベッドから引きずり出し、肩を思いつきり振って早乙女さんを気持ち悪くさせ、そんな状態で言葉をはかせようとしたという。そりゃまあ、あんな漫画が外壁に描かれていたんだから人間が変わってしまってもおかしくはないけど、なんか最近神楽坂さんはポケモンの技が、ポケモンと合体していなくても普通に使える一人なんじゃないかとさえも思えてきていたりする。あのムサシって言う口ケツト団員みたいだね。例えばメガトンキック、乱れひっかき、怖い顔、吠える、飛び跳ねる、火炎放射、メガトンパンチ、投げつけるとか……。

ちなみに、もう一人の描かれていた存在であるいいんちよこと雪広さんかというと、これまたクラスメイトに起こされる形で事件を知り、こちらも卒倒したようだ。ただ、早乙女さんが寝込んでいることは昨晚のうちに聞いていたみたいで、神楽坂さんみたいに早乙女さんを襲うという行動には出ることがなかった。たださ、僕が妙に気になってたのはその横にいる那波さんが、何かを知ってるのに黙っているような様子でいたことかな。何か知っていそうなんだけど……、まあ、正直に言う綾瀬さんや宮崎さん、長谷川さんの様子もおかしかったような気がしたけど、綾瀬さん以外とは殆ど話したこともなかったから、何を知ってるのか聞けずに終わっちゃったんだ。

でも、漫画のキャンパスになっていたのは女子寮の外壁だけじゃなかったんだ。

「うわあ……」

「こ……、これはすごいネ。街中がキャンパスになるヨ」

「しかも全てが目には毒です」

「……」

とりあえず登校する準備を済ませた超一行と僕が学校に登校して  
るわけなんだけど、あの漫画は至る所に描かれていた。大小様々な  
壁や道路、電車の車体から学校のグラウンドにまで描かれている。  
しかもどれも同じ色一色で描かれていたわけだけど、これを全部見  
ていると漫画の全貌を呼んでいる気分になってきて、正直僕もだん  
だん気持ちが悪くなってきた。それは超や葉加瀬、四葉さんも同じ  
よう、街の人たちも必死にそれを消そうと躍起になっている。普  
段は麻帆良だからと言っている人たちも、今は認識阻害の魔法の力  
が働いていても、さらっと適当に済ませることができない状態なの  
だろう。そして後で聞いた話だけど、今日は何処の学校も初等部は  
学校閉鎖になったらしい。中等部はいいのかと思えてきたけど、そ  
れはもう中等部の全ての寮の壁にこれがあったから隠すこともでき  
ないため、仕方なく……ってことらしく、少しでも子供達には悪影  
響を及ぼさないようにしようってことらしい。だったら中等部も学  
校閉鎖にしちゃえばいいのにね。

「全くいい迷惑よ、何であんなものを街中にかかれなきゃいけない  
のよ!!」

「同感ですわ。どうして明日菜さんみたいなお猿さんとあんなこと  
をしている絵を描かれるのでしょうか。正気の沙汰もいいところで  
すわ」

「ちよつと、お猿さんってどういう意味よ!!」

「そのまんまですわ。……申し訳ありませんけど、今日は私のそば  
に近づいてこないでくれません? あんなものを見せられた後では  
あなたの近くになど寄りたくもありませんわ」

「それはこっちの台詞よ!! なんであんなかと……」

教室では神楽坂さんと雪広さんが互いにあの絵のことで怒りの声

を発し、同時に口喧嘩を仕掛けてはやめるという行為を繰り返している。そしてあの絵が描けるであろうといわれている早乙女さんは……あの絵を見た後から更に様子がおかしくなり、今日は学校を休んでいた。

「ちよつとちよつと！！スクープだよ！！」

そんな時に教室に駆け込んできたのはあのパイナツ……じゃなくて、朝倉さんだった。どうやら報道部にあの絵に関係する目撃情報が送られてきたらしい。

「校庭にアレが描かれた直後らしいんだけど、用務員のおじさんが大きな絵筆を持った小柄の人影を見かけたらしいの。それが森の方にいったから、森に続く道を封鎖して犯人を捜し出そうって捜索隊ができるらしいよ。山狩りをして大……」

「山狩り！？」

朝倉さんが途中つかえながらもその情報を大声で喋っていたら、今度は史伽ちゃんが反応した。しかも結構な大声だったからか、朝倉さんの言葉が止まり、一同の視線が史伽ちゃんに集まっていく。

「史伽、何か知ってるの？」

「え……、う、ううん……」

「でもさ、最近よく森の方に行くじゃん。今日も朝行ってたよね？僕にも教えてよ……」

「そ、それはその……」

何か森と最近の行動に関係があるようだが、それを口に出そうとしない史伽ちゃんが出て、あとちよつとで怒り出すだろっ風香ちゃんがいる。朝倉さんはこの姉妹喧嘩に首を突っ込みたそうだけど長

瀬さんが止めていた。ただ、僕的に見ても山狩りはマズイと思う。今麻帆良にはポケモン達が潜んでいるから、この騒ぎによってポケモン達が暴れ出す危険性もある。あるいは別のトラブルが発生する可能性も。チラッと超達を見たら、僕と同じことを考えたのか、アイコンタクトでそれを伝えてきていた。だから、後で集まらなきゃいけないかってことくらいは思った。

最悪だ……、ホントに最悪だ……。

見つからないまま終わればよかったし、偶然私が見つけてホッとしたっていう展開だったらどれだけよかったかって思う。

でも、よりによって私の手にそれは戻ってこなかった。代わりに何故か私の漫画が麻帆良の至る所に落書きされている。私が描いたのとそっくりに至る所にペイントされている。その上、一番ヤバイシーン、私の最高傑作と言ってもいい奴がうちの寮の壁に描かれていた。

明日菜が部屋に飛び込んだときは原稿が見つかって読まれたんだと思った。だからつい、ごめんなさい、もうしませんが連呼してしまった。だから余計明日菜が怒ったわけで、夕映とのどかが取りなしても意味がないくらい明日菜が野獣になっていた。だけど、その後に駆け込んできた木乃香が壁に描かれていることを話してくれたから、私が『壁に描いた』んじゃないって分かって、そのまま私が描いた漫画でもないってみんなが信じ込んでくれる形になって、それで助かった。でも、本当に死ぬかと思った。本気で喉が締まっ



てて、このままあと少ししたら私死んじやうんじゃないのって思うくらい締まってて、こんなに空気が美味しいって思ったのは生まれて初めてだった。

「ハルナ……、正直身の破滅かもしれませんが、今日はどうしますか？」

「学校……、行く……？」

登校直前まで迷ったけど、朝倉達の話聞く限り、私の漫画はいるんところに描かれている。そしてそういうのに耐性がない人や大人達が苛立っている。いつばれて糾弾されるかも分かったもんじやないし、何を言われるかも分からない。私の漫画だってバレないかもしれないけど、それでも何らかの反応やリアクションを私はしてしまっただろう。それをしないためにも今日は登校することをやめた。ぶっちゃけ、今日は中等部も学校閉鎖にしてくれよって思った。

「それにしても……一体、誰の仕業よ」

古ちゃんの部活動が何かに襲われたり、最近変なニュースや出来事が多すぎる。麻帆良にいればそりやまあ変わったことがたくさん起きるわよ。それは麻帆良だから起きても不思議じゃないんだけど、それでもおかしすぎるが続けば気にもなってくるわね。

大体、何で私の漫画なの！？描こうと思えば他にも描ける漫画はいっぱいあると思う。それなのに私の漫画が選ばれた。一つだけ分かるのは、アレを描いた人が私の漫画を持っているということだ。

得意じゃないけど、パソコンで調べてみることにした。長谷川が色々パソコンのことに詳しいから、前に色々とセッティングしてもらっておいてよかったと思う。絶対何か隠してるところくらい、画

像を読み込んでアップロードしたり、画像を修正したりすることになり詳しくたし、さりげなく聞いたら何か言いかけて慌てたし、絶対長谷川は何かを隠してるに決まってる。ただ、面白そうだから放置してボロを出すのを待つてるところかな、長谷川は結構しつかり隠してるみたいだから。

……って、そんなことは今はどうでもよかった。麻帆良のことって何でか知らないけど、某大型掲示板には話題に載らないのよね。だから麻帆良のことは『麻帆ねつと』を見れば情報が色々と探り出せる。適当に今朝の漫画のことを検索してみると、掲示板で話題になっていた。大抵私みたいな人ってこの辺でもあまりいないから、きつと罵倒とかそういうのがいっぱいなんだろうなあって思ってたから、まさにその通りだった。でもま、私の趣味を全般的に理解してくれる人がいっぱいいるとは思えないし、そんな世の中だったら私としてはウハウハなんだけど、そこまでしたらちよつと怖い。だから普通の反応をしてる人が多いと思って掲示板を見ていた。悪口とかもあるけど気にしなきゃいいのよ。私の趣味を理解できない人に読ませるつもりで描いたわけじゃないんだもの。

「あつ、これかな？」

そんな中でよく探したら目撃情報があった。

・ 緑のペンキがニョロニョロした線と共に森の方に消えていくのを見た。

- ・ ベレー帽をかぶった垂れ目のおじさんだった
- ・ 変わった犬が走り去った
- ・ 長いロープみたいな筆を使ってる人がいた

集約するとこれくらいだろう。とりあえず目印は緑色のペンキと

ベレー帽の人ね。よし、いつも夜中に抜け出して図書館島に行く時みたいに寮母さんに見つからないように寮を抜け出さなきゃ！

こんな事件が起きちゃったんだもの、私の漫画が見つかった私に冤罪がかけられちゃったら溜まったもんじゃない。

いいんちよも勘違いしてくれたみたいだけど、もし元凶の漫画を描いたのが私だって知ったら何されるか分かったもんじゃないわ。

「ドーブルっていうんですか？」

「そう、絵描きポケモンのドーブル。こいつが犯人と考えて間違いないよ」

「確かに麻帆ねつとに目撃情報と姿形が合っていますね」

放課後というか、今日は流石にあの事件があつた影響からか授業も半日で終わり、早々に変質者に会わないようにと部活も休みにされ、生徒は帰宅を余儀なくされることになった。でも、僕は超達3人と一緒に工房に集まって作戦会議を始めていた。その時に僕がドーブルに『変身』した。どう考えても目撃情報の姿に合うポケモンはコイツしかない。

「しかし……、どうしてこんなことをしたカナ？」

「アイツらは尻尾の先から縄張りを示す液体を出すんだけどさ、同時に芸術家でもあるんだ。だからキャンパス代わりになる場所があったら落書きをしたくなる奴もいる。真面目に許可を取る奴もいれば、勝手に壁に絵を描く奴もいる。今回ののは後者なんだろうね」

「なるほど、その気持ち、私にも分かるヨ」

「えっ？ 超さん、分かるんですか？」

「何を言ってる力ナ、葉加瀬も同じネ。我々科学者は発明やアイデアを思い立タラ、まずはその数式を書いてみたくなるヨ」

「ああ、確かにそうですね。その数式を忘れないためにも何処かに書いておきたくなります。浮かび上がったものを忘れないためには思い立ったら即書かないといけませんからね」

「へえ、そういうものなんだ」

意外にドールと超や葉加瀬が接点を持っていたことに僕は驚くしかない。ただ、はつきりいつちやうとそれって人間にとってはた迷惑な行動でもあるんだよね。コガネシティのクルミちゃんやアカネちゃんもドールを持ってたけど、あの2人のは放し飼いだからちよくちよく落書きをやってたって聞くし。

「まあ、そういうわけだからまた何処かでその早乙女さんの漫画を描き始めるかもしれないから監視カメラをチェックする必要があるね」

「そうですね、ミュウさんやメタングがいうように早乙女さんはポケモンをまだゲットしてらっしゃらない方のですから、ドールを持っていないようですし……」

「昨日までの監視映像のデータを洗ってみるヨ。もしかしたら何かが映ってるかもしれないネ」

「よろしく頼むよ。僕はミューズに話を聞いてくるから」

でもミューズも意外と気付いてなさそうなんだよなあ……。

「あれっ？ 史伽ーっ！！」

あーっ！また逃げられたーっ！！一週間前に散歩部に途中で迷子になったと思ったら、それからずっとおかしいよ。拳動不審だし、朝早くからこそそと何処かに行ってる。同じ双子の僕に話してくれてもいいのにさ、僕にまで隠し事はするし、朝も放課後も部活もサボって何処かに行っちゃうし、絶対何かをこっそり飼ってるんだと思ったら、朝倉の山狩り発言で更に拳動不審になったし……。

「はあ……、だからってその辺の森に入ったくらいで史伽を見つけられるわけは……、……あれっ？」

今日の買い物当番が楓姉だったから、先に帰ってるって教室を飛び出したのはよかったものの、史伽のことが気になってつい森の方に来てしまった。史伽が話してくれないから気になるし、楓姉は『やましいことではないけどまだ話せる状態ではないでござる』みたいなことを言ってたし、でも楓姉も知らないみたいなんだよね。だからやっぱり気になっちゃった以上、史伽に会って話を聞かなきゃいけない。僕の方がお姉さんなんだから妹が何をしているのか確かめる必要があるよ。そう思ってるから森にやってきたんだけど、今変わった色の頭の人たちを見た気がする。

「ちょっと、この辺で会ってるの？」

「おかしいな、確かにここのはずなんだが……」

黄色いのと緑色の男女だったかな、何処の部活か同好会か分からないけど何かのアニメのコスチュームみたいな感じでしかもペアルックだった。遠目から見ても『イタイ』と思う。しかもあの時の顔つきからすれば大学部か何処かだろうな。いい年してよくやるよ、

全く。

「なんて言ってる場合じゃないか。史伽は何処かな？」

もしかしたらこの先の茂みの影にいるかもしれない。

そんなことを思ったりしながら奥に進んでみる。確かこことは別の方向の森には超の工房とか茶々丸が住んでる家とかもあるんだっけ。超の工房に行ったら史伽探しの道具とか貸してもらえたかもしれないな。ちよつと急ぎ過ぎちゃったよ。それに、まだあの変な男女が近くにいるから早くここを離れなきゃいけない。2人でこんな森の中で一緒にいるなんてあの格好からして怪しいし、もしかしてそういう趣味の人たちかもしれない！！ハルナの描く漫画みたいな、僕たちがよく知らないヤバイ世界の人たちなのかも！！ヤバイ！ヤバイ！見つかる前に早く逃げなくちゃ！！

「あら、こんなところに子供がいるわね」

「ちようどいいな、コイツを捕まえて……」

そう思ってたら木の枝を踏んで見つかった。しかも捕まえるって言ってる！？

「ちよつとそこのおチビちゃん、悪いことは言わないからお姉さんのところに来なさい」

なんか猫なで声が聞こえてきた。でも近くで見て分かった。この2人、どう考えても大学部の人じゃない！！男性は若く見えるけど、女性は化粧で隠して若作りしてるだけのおばさんだ！！ついていたら何されるか分からない！！

「ほーら、さつさとこつちに来なさい、いい子だから」  
「僕悪い子だからいいです!!」

僕は思いつきり森の中を走り出した。その直後に何か怒ったように聞こえてくる声が2つある。でもよく聞こえなかったからそのまま聞こえなくなるまで走り続けることにした。聞こえなくなるまで走らないと大人と子供じゃ追いつかれちゃうからね。でもそのおかげで……、見事に迷った!

「はあ……、ここ、何処だろ?」

ちよつと深すぎるところに来ちゃったなあ。史伽を探しに来ただけなのに、いいんちよが壊れて老けたらあんな感じになりそうなおばさんに出会っちゃうし……。

「もうー!! 史伽の奴何処に行っちゃったんだよー!!」

僕は適当に走ろうと近くの茂みの中を突っ込み……、

「え……、お姉ちゃん……?」

「あ、史伽見つけた……」

偶然にも少し開けた場所にいる史伽と、変わった色のリスと女の子のような姿の変わった生き物と遭遇した……。

「ドーブル？ さあ、街の様子は結構話題になってるから聞いたけど、この辺には来なかったわよ」

「そっか……、ん？ でも、いることは知ってたんだね」

「当たり前じゃない、この辺りを通るポケモンには目を光らせてたわよ。いつあんたが現れるかもしれないって思ったから」

ミューズに会いに世界樹に行ったら、案の定、ミューズはドープルの存在は知っていた。でもこの事件は世界樹周辺では起こらなかったらしく、ドーブルを今日は見ていないらしい。多分ミューズの機嫌を損ねて殺されることは避けようと思ったんだろう。

「あれ？ でもさ、何で話題になってるって知ってたの？」

「街を歩いたからに決まってるでしょ？」

「…… 大丈夫だった？」

「失礼ね、私だって無謀なことはいわないわよ。前に会いに行ったおじいちゃんいるでしょ？ あのクチートに噛まれたヤドンが突然変異しながら進化したポケモンみたいな学園長」

唐突にミューズが爆弾をぶっ放す。流石に僕も吹いた。そりやその通りだと思っただし、僕もアブソルもそれと同じことを思ったけどさ、どうやらあの後もミューズは学園長の元を訪れていたらしい。

「認識阻害の魔法を教えてもらったのよ。使えるかどうかも分からないし、使えたら遠出もできるでしょ？」

「なるほどね……、そういうえ君って頭で考えるよりも行動して始めるタイプだったっけ」

「誉めてるわよね？」

「勿論」

「許す。……それで、私達ポケモンでも使えなくなみたいだったのよ。だから覚えて最近よく出歩いてるのよ。それで今朝もその話



を耳にしてね、そういえば最近ダブルが封筒を大事そうに抱えてたなあって思い出したのよ」

「封筒？」

何気にミューズっているんなものを世界樹から目撃している。だから今回もミューズが何か重要な力ギになることを目撃してるようだった。なんていうか、突っ込みする以外に芸当がないニヤースより頼りになるね、うん。ただ、ニヤースがいないと突っ込んでくれないから最近だんだんボケれなくなってきたよ、うん。

「そう、封筒よ。封はダブルが切ったみたいだけど、中の束みたいな書類を取り出しては熱心に読んでたわよ。私が近づくと隠しちやうから中身は見れなかったんだけど、多分中身が今朝見た変な絵だったのね」

「そつかあ……、早乙女さんが最近大事なものを落としたとか聞いたけど、それってヤバイ内容の漫画の原稿だったんだ……」

確かに神楽坂さんと雪広さんの関係を描いたヤバイ漫画なんて、落とした挙げ句、本人に読まれてもしたらヤバすぎるだろうね。だからあんなに落ち込んでたんだろ。封筒には名前も何も書かれてなかったみたいだし、ダブルがああ絵を見てどういうわけか、気に入ったってことだね。

「ダブルも意外とゲテモノが趣味だったとは……」

「あら？アイツは前からよ？ 私、前にもあんとニヤースのラブシーンの絵を見せられたことがあるもの」

「……………えっ」

「その時は流石に変なものを見せるなって怒って……………そういえばアイツの住処に破壊光線叩き込んでやったわね」

「前にダブルの家が崩落した原因って……………君だったのか……………」

なんか聞かなきゃよかったことも聞いた気がした。でも、これに繋がった。早乙女さんのパートナーはアイツに間違いない。ゲットされてないし、してないけど、早乙女さんのパートナーはアイツで確定だ。趣味が同じなんだから。ただ、僕も見つけたら破壊光線をお見舞いしてやるうつと。流石にそんなえげつないものを書かれてたなんて分かったんだから、一発食らわせとかないと気が済まないよ。ドーブルがミューズに原稿を見せなかった理由も、この辺に落書きを書かなかった理由も過去の出来事が関係してるんだって思ったし、ドーブルを探すには早乙女さんを探して監視した方が早そうだな。

「ミューズ、何とか助かったよ。……ちょっと疲れたけどさ」

「気にしない、気にしない。……あのさ、ミュウ、ドーブルのこともいいんだけどさ、私、もう一つ気になるものを見てるのよ」

「気になるもの？ ……何？」

「実はさ……」

ミューズの口から出た名前は、つい先日聞いた2人のことだった。

「クチートとパチリス……？ ああ、アブソルも見かけたって前に言ってたっけ」

「そう、あの切っても切れないような親友の関係を作ったあの2人よ。その2人が最近森の中に潜んでるらしいんだけど、よくこの辺を散歩してる糸目の忍者とちっちゃいツインテールのおチビちゃんと一緒にいるお団子の子が接触してるみたいなのよ」

糸目の忍者……長瀬さんか。ちっちゃなツインテールは風香ちゃんだね。ってことはお団子は史伽ちゃんか。なるほど、史伽ちゃんの最近の行動は2人に会いに行ってたからか。

「そつか、最近よく朝とかに出かけてると思ったらすういうことだったわけだね」

「なんだ、知ってたのね。……それはまあ、別にいいのよ。ただ、アイツらが最近、ムサコジコンビの同類を森で見かけたっていったの」

「え……？」

アイツらの同類ってことはロケット団に変わらないわけで、ミューズが同類と称するってことは誰なのかは大体想像がつく。

「クチートもパチリスも気付かれる前に逃げたらしいんだけどさ、私達前回ロケット団の機械を壊して異次元爆発起こしたはずよね？」

「うん……、……でもさ、もしかしたら団員が頻繁に来れなくなっただけで特定の誰かが来れるっていうこととかだったりするんじゃないかな？」

「それ本気で思ってる？」

「本気というか、エスパークタイプの予兆というか……、あの2人が来るとしたらそんな理由じゃなきゃ実際に起こらないんじゃないかな」

それでも、なんか嫌な予感がした。だからミューズの案内でクチートとパチリスのところに行くことに決めた。

「……流石に来ないわね」

「来ないと言いますか、ハルナ、これは何でしょうか？」

「何って、罨に決まってるじゃない」

学校から帰った私とのどかが部屋で目にしたのは、ちょうど窓から外に抜け出そうとするハルナでした。話を聞くと、罨を仕掛けて原稿を持っている謎の人物を捕まえるといいだったので、ハルナだけでは危険だと思い、外出届を出してハルナと共に街を繰り出したのですが……流石の私も呆れたです。

「のどかを連れてこなくて本当によかったです。こんな古典的な罨で捕まる変質者は単純すぎて何をされるか分かったものではありません。だからのどかを連れてこなくて本当によかったですよ」

「ちよつと夕映ーっ！ーそれじゃ私がバカみたいなことをしてるみたいじゃないのよ！ー」

「というより、こんなものを仕掛けておくのはバカとしか思えないです」

ハルナは怒って頭をぐりぐりしてきますが、なにげに私は内心喜んでもいます。ようやくいつものハルナに戻れたようです。ここ一週間はハルナが寝込んだりしていて私ものどかも心配で気が気ではありませんでした。……ああ、木乃香もです。とりあえず寮母さんにはハルナの体調がよくなったから元気になるように食事をさせてくると言っておいたので、多少遅くなくても連絡さえすれば大丈夫でしょう。寮母さんもハルナの異変に関しては心底心配していましたから。ただ、寝過ぎてバカになりすぎたかもしれないですね。私とハルナがいるのは麻帆良学園近くの商店街の一角です。人通りが少ないそこに、周囲の店の人に許可を得て罨を張ったわけです。この辺りは被害が少なかったためか警戒してらっしゃるようで、この罨を仕掛けるとハルナが話したら流石に開いた口は塞がらなかったようですが、意外に賛同してくださり、了承してくださいました。そこで道のど真ん中に大きなザルをひっくり返し、つかえ棒を引

っかけ、その足下にハルナの過去の漫画のうちで相当ヤバイ作品を3冊くらい置いておきました。私も見るのが初めての作品だったのですが、ハルナが言うにはお蔵入りして私達にさえも秘密にしていたものだそうです。確かにアレはやばすぎますし、この罨に気付いて近づいた人も一番上の冊子の表紙を見て何も見なかったふりをして素通りしていました。そしてつかえ棒につけられた紐は近くの段ボールに隠れている私達の手に握られています。

「……………全く、いつの間にあんな本を書いたんですか」

「うーん、前に夕映と木乃香とのどかが手伝ってくれた夏コミのすぐ後かな。調子づいてたからささっと作って一緒に出しておいたのよ。記念だから一冊しか作ってないけど、バレたらヤバイでしょ？だから参考程度の品にしようと思ってお蔵入りにしてたの。他の2冊は入学してすぐだったけどね」

正直、本当に呆れて開いた口が塞がりません。一つはエヴァンジェリンさんと茶々丸さん、次に桜咲さんと龍宮さんという、クラスでも一緒にいることの多い2人のエッチな漫画、そして一番上のは最もヤバイです。

「明日菜さんに殺されても知りませんよ」

「でも、あそこまでやばかったら釣られてくるんじゃない？」

「その前に高畑先生がやってきたらどうするんですかー!!」

「大丈夫よ、今出張中だから出したんだもの」

「……呼び出されるときはハルナだけにしておいてほしいですね」

「何よ、薄情ねーっ!」

「薄情も何も、明日菜さんと高畑先生のエッチな漫画を描いたハルナに言われたくありませんよー!!」

表紙の絵自体が口に出すことも憚れるものなのです。それだけヤ

バイ漫画です。ただし、高畑先生の姿は表紙には書かれていません。それがせめてもの救いですが、もしアレを手にとって読む人が現れた場合、私達にとっても高畑先生にとっても身の破滅でしょう。だからさっさと切り上げたいのですが、商店街の方々もわざわざこの事件を解決しようとかこんな漫画を集めてきてくれたと思いこんでくださっているのでそれでもないんですね。ハルナが元凶だと知ったらどうなるのでしょうか？

「夕映ー、何か変なことを考えてない？」

「気のせいではないですか、ハルナ」

「でもさ、いくら待ってもこんな罠に引っかかる人はいないかな？」

「やっと真面目にそう思ってくれましたか。だから私は……」

その時でした。私とハルナが目を離した直後、棒が倒れてザルが倒れる音が聞こえたのです。

「「引っかかった!？」」

そしてザルの中で何かの声が聞こえてきます。一つは嫌な予感があるほど聞き覚えのある声ですが、もう一つは男性っぽい声でもあります。

「夕映、行くよ!」

ハルナが走って行ってしまったので私も行くしかないのですが、そうしてる間に何かがザルの中から飛び出して、本を2冊ほど持って駆け抜けていってしまいました。そのせいでハルナはそっちに走って行ってしまい、私がもう一人の方をザルから助け出すしかありません。それにしても何故夕映に2冊だけだったんでしょうか？表紙を見る限り、一番上のものではありませんでしたし……。

「ちよつとお！！全く何よ、これは！！」

近づいた直後、この声を聴いた私はくるっと回れ右をしたくなりました。そりゃそうでしょう、私が今一番会いたくない方でしたからね。

「あれゝ、明日菜ゝ、何処行つたんえゝ」

そのまま私も通り過ぎて逃走しよう、そう思っていたときです。そうしたら、今度は木乃香さんが現れてしまい、私と目が合ってしまった。

「なんや夕映やん、ハルナと一緒にじゃなかったん？」

「あ、あの……、ちよつとこれには深いわけがありましてね……」

これは何と言いましようか、なんとも最悪なものを引いてしまったようです。バカレンジャーと言われても平気だったせいか、こういう場合、何を引くと言われていたのかを忘れてしまったです。

「え、夕映ちゃんがそこにいるの？　ちよつとお！！　これって仕掛けたのは夕映ちゃんなの！？」

「あー……、明日菜さん、おとなしく聞いてください。それは私ではなくハルナの仕業で……」

仕方ないので私はハルナに責任を全部被せるつもりでこうなった理由を話すことにしました。すると木乃香が苦笑し、明日菜さん（が入ったザル）が怒りで拳を振るわせるようにわなわなと震えているのが分かりました。そりゃそうでしょう、あの漫画を描いた元凶がハルナであることも話しましたから。

「なあ、夕映。そないなこと話したら、いいんちょも怒ると思うえ？」

「ああ、それでしたら問題はありません。いいんちょさんに関しては那波さんが許可してくださいましたから」

すると、ここで明日菜さんの動きが止まりました。木乃香はほんとハテナをぶら下げてるようですが、明日菜さんには何となく伝わったようです。まあ、詳しい話はどうなっても寮に戻ってからになるでしょう。それにしても不思議ですね。

「どうして明日菜さん箱の本を拾ったのですか？こんな分かりすぎるほどに怪しくて古典的すぎる、引つかかる方も馬鹿馬鹿しい罠があったのに……」

「えっ？ 私はただ遠目からこの本のページが開けたのが見えたときに高畑先生の姿が見えた気がしたからつい……」

冷たい風が私達の間を通過したような、そんな気がしました。

木乃香さんの苦笑に呆れが混ざりました。

「……明日菜さんの認識を少し変えなくてはいいけませんね」

どうせなら聞かなければよかったですね、明日菜さんがこんな罠に引つかかるほどバカレッドの素質を持ちすぎている存在だったとは。



いつか言わなきゃいけないとは思ってたです。お姉ちゃんがすごく心配してるし、楓姉もできれば話してほしいって言ってたです。でも、信じてくれるかどうかが分からなかったなので、言っに言えなかったんです。

私が一週間前に散歩部の途中で何か変わったものを見た気がして、そっちに歩いて行って迷子になってしまいました。その時色々歩き回っていて出会ったのは、水色の耳とラインが入った、普通のリスよりも少し大きくて可愛くデフォルメされたリスさんと、一見すると黄色いスカート姿の女の子だけど、その頭にはギザギザの歯がついた大きな口を持った生き物でした。リスさんは怪我してるみたいで泣いていて、私を見ると怖がって謎の生き物さんの陰に隠れました。そして謎の生き物さんが私を威嚇するように大きな口をパカッと開けてこっちを睨んできたんです。正直に言えばとっても怖かったです。今までにこんな生き物を見たことはありませんでした。だからお化けにあつたと思ってその場に座り込んで、動けなくなっちゃったんです。ただ、そのおかげで危険がないって判断してくれたんでしょうか、謎の生き物さんとリスさんは私に近づいてきてくれました。その時に私は持っていた絆創膏や傷薬でリスさんの怪我を治してあげました。それで謎の生き物さんやリスさんと仲良くなりました。それだけなら、その後には私が別れを告げて終わりだったんです。だけど、いつから持っていたのか分からないんですが、私の携帯のストラップについていたボールが光り出して、リスさんの前に転がって止まったんです。謎の生き物さんもリスさんも驚いてまた私を警戒していました。何が起きたのか、私も全く分かりませんでした。

「ふう〜ん、あなたたち、パートナーなのね」

そんな時に現れたのは水色の長い髪をした綺麗な女の人でした。その人が誰なのか、私はよく分からなかったんですが、謎の生き物さんとリスさんは安心してみたいでした。だからその人に色々教えてもらって、謎の生き物さんとリスさんがポケモンという別の世界からやってきた生き物であること、そのお姉さんも実は人間に変身している生き物であることを教えてくれたんです。それはもう、とってもビックリしました。そんなことがあるんだって本気で驚いてしまいました。でも、麻帆良ならこういうことはありかなって思いました。麻帆良なら当たり前かなって何でかよく分からないけど、そう思えてきて、それで納得していました。とりあえず深く考えることでもないんだと思うです。お姉さんはその後に姿を消したんですが、パートナーだと聞いても私はリスさんを連れて行くことはできませんでした。だって、リスさん……パチリスは謎の生き物さん……クチートととっても仲がいいんです。それを引き裂くことは私にはできません。でも、一緒に遊んだり食事したりもしたいです。だから、私はちょこちょこ家を抜け出して、会いに行くようになりました。クチートとはそうじゃないんだけど、パチリスとは何故か普通に会話もできるようになっていて、クチートとパチリスは鳴き声を上げているのに、パチリスの声は人間の声みたいに聞こえるんです。だからクチートの言葉を通訳してもらいながら会話も楽しめちゃいました。けれど、こんなこと、お姉ちゃんが信じるとは思えなくて、だから言えなかったんです。でも……、

「え……、お姉ちゃん……？」

「あ、史伽見つけた……」

偶然なのか、今日教室で朝倉さんの言葉に反応してうつかり叫んでしまったからでしょう、お姉ちゃんがこんなところにまで来てしまいました……。

「史伽、ここにいたんだ！！　もーっ、心配しちゃったじゃないか！！」

「そ、それはごめんなさいです。……あ、あのお姉ちゃん？　実は……」

お姉ちゃんはちょっと怒ってるみたいでした。ただ半泣きにも見えるから多分私を追いかけて迷っちゃったからだと思います。私も結構怖い物とかお化けは嫌いです。でも、お姉ちゃんはそういうのがものすごく嫌いで、2人で怖い物見たさに怪談番組を見ていると、数時間後にお姉ちゃんの姿が消えていることがよくあります。理由は、お姉ちゃんが布団の中に隠れるからです。その時のスピードは楓姉でも捕らえられないって言うてたです。だから相当怖かったと思うんです。だからお姉ちゃんにもこの子達のことを頼んで、2人で飼うことにできないかって思いました。そうすれば一緒に寮に行けるんじゃないかって思ったからです。そう思って顔を上げたとき、お姉ちゃんは意外な行動に出てました。

「うわっ！！　この口すごい！！　ロボット！？　生きてるの？　恐竜！？」

パチリスには目もくれず、お姉ちゃんがクチートに近づいてました。クチートも驚いてるみたいです。でも怖がっているんじゃないくてジロジロ見られてすごいって連呼されて嫌ではないみたいでした。次第にお姉ちゃんがクチートの頭を撫でたり、大きな顎に触れて中を覗き込んだりして面白がってます。時々クチートがやめてという声を発すると、お姉ちゃんは「痛いの？」って会話をしてたんです。パチリスがいうにはお姉ちゃんはクチートと会話しているらしくて、どうやら私とパチリスのような関係になれるクチートの相手はお姉ちゃんだったみたいです。次第にお姉ちゃんが誉め始めるとクチー

トの様子も変わりました。

最初はちよつと頬を赤く染めてるだけでした。

でも、徐々に顔が真つ赤になつて照れてます。

「お姉ちゃん、実は……」

「史伽、コイツすごいね！！　なんていう動物なんだろう？　史伽はその子を飼つてるの？　うちの部屋で飼おうよ！！」

私はこれまでのことをお姉ちゃんに話そうと思いました。でも、お姉ちゃんはそれを言うよりも早く、私が言いたいことを言い始めました。その直後だったでしょうが、私とお姉ちゃんがいつから持っていたのか分からない、小さな丸い玩具みたいな物が光り始めて、そしてクチートとパチリスに向かつて飛んでいったんです。その直後、お姉ちゃんのボールにクチートが、私のボールにパチリスが入っていきました。なんか自分から飛び込んでいったみたいでした。そしてボールは私達の手に戻りました。

「史伽、これってどういうことだろ？」

「さあ……？　私にもよく分からないです」

ただ、一つだけ分かるのは何かこれで本当に一緒になれるっていう気がしたことです。

でも、いきなり今度は茂みから誰かが飛び出してきました。お姉ちゃんがすごく反応して、私もそつちを見ようとしたときでした。でも、何かが爆発したような音がして、私とお姉ちゃんは思いつきり吹っ飛ばされて、舞いあげられてしまったんです……。

「ちょっと待ちなさいよーっ!」

ようやく見つけたと思ったら、意外に速いスピードで道路をそれは駆け抜けていく。私が自転車でダッシュして追いかけるのがやっとなつてくらのスピードで走っていく。超が前に作った発信器を本につけておいたから見失っても探すことはできるけど……不意に商店街のある方角を振り返り、私は合掌した。ザルから聞こえてきた声は確実に明日菜だ。一瞬だったけど木乃香の姿も見かけた。だからきつと、明日菜と木乃香に今回のことは伝わる。私が元凶だつてもことも確実にバレル。

「はああ……………」

正直、もう明日菜に一度怒られちゃってるせい、身の破滅とか思ってる割に何故か気にしなくなってきた。それだけ最近まで寝込んでいたりしたことが不思議で仕方ないくらい、私は気にしているようで気にしていなくなっていた。夕映が残ったけど、これって貧乏くじって言うのよね。夕映が貧乏くじを引く感じで取り残されたから、事情の説明とかは何とかしてくれるんじゃないかな。まあ、いいんちよの耳にも入るだろうし、私の部屋が家捜しされる可能性もあるけど、こうなったらもう仕方ないと思うしかない。本の大半はここに来る前に私しか分からない暗証番号で床下収納の奥底の金庫の中に全部入れたし、漫画を描くための道具も全部隠してきたから明日菜達に没収されることもないと思う。仮に見つかっても暗証番号を入れなきゃ無理だ。それにしても明日菜は何であの罠に

引つかかったんだらう？もしかして高畑先生の書かれたページが風でめくれて……、……んなわけないわね。そんな漫画みたいなことを地でやるとは思えない。明日菜もそこまでバカじゃないはずよ。きつと怪しい影を見つけたか、明日菜の絵が描かれてるのを見つけてつい手に……、……それでもバカには変わりないか。

「……で、この辺りよね」

途中で公園の駐輪場に自転車を止め、私は超達の工房とは別方向にある森にたどり着いた。森というか、森林公園の入り口だ。そのまま深い森が奥まで続いているから、自由道から外れたら迷子になることも確実だって言われてる森でもある。でも、超の工房や茶々丸さんの家がある方は他人の敷地も混ざってたりしてるから、森林公園はここにしか作れなかったって聞くのよね。実際、本当は何があったのかなんて私には分かるわけないけど、色々とあったんだと思う。今度適当な噂でも流しておいたら朝倉当たりが調べ出すんじゃないかな？私の噂って結構広範囲に広がってくれみたいだし。あ、そういえば朝倉って最近変なオウムを飼い始めたとかいってたなあ。言葉を教えてるのをドア越しに聞いた覚……、……いた！

私は偶然だったかもしれないけど、私と夕映とのどかと木乃香が手を繋いで囲むのがギリギリできるかできないかってくらいの太さの幹の大樹が生えている一角で、その幹の穴の中にベレー帽みたいな物が見えた。たまにこういう大きなくぼみがあって、子供が秘密基地にしているって話を聞いたことがある。こうして実際に見るのは初めてだけど、多分こういうのなんだらう。

「あーっ、私の原稿……！」

そーっと覗いてみたら、中には私がなくした原稿入りの封筒があ

った。そしてその近くには何か変わった生き物がいて、私が仕掛けた漫画を手にしていた。しかもまさに読んでいる途中っていう感じで、私に見つかって焦っているようにも見える。それはベレー帽をかぶっているように見える頭をした2足歩行の白い犬で、耳や目の周りが茶色、尻尾の先が絵筆みたいになっているという特徴を持っていた。その犬は私の声に驚いたまま立ちつくしているが、私が仕掛けた罠にあった百合系統の本をしっかりと小脇に挟み、手に大事そうに持ち続けている。何か嬉しい予感を感じさせてくれる気はするんだけど、とりあえずスルー。まずは話しかけてみるのが大事のような気がした。漫画を持っているんだし、漫画が読める犬かもしれないけど、何か話を通じそうな気もしたの。

「あのさ……、それ、その封筒、私が落とした物なの。返してもらえない？」

封筒を指さしてそう告げると、その犬は「えっ」と驚いたような顔をする。話を通じるって喜んだんだけど、唐突にいぶかしげな顔をされた。そりやそうよね、普通に私のだっていつてもその証拠がないんだもの。その後に持っている本が私の書いた物だって説明したけど、それでも納得してないみたいだった。何か警戒してるって思えてくるけど、もう少し慎重にやってみようと思う。ちょうど適当なメモ帳を持ってたから、

「……こんな感じ、これだったらどう？」

適当だったけどさっき明日菜の声を聴いたせいかな、明日菜といはんちよのラブシーンの絵をささっと描いてみた。そうしたら、向こうがジェスチャーを始めた。封筒とメモ帳を見比べて、指を指して「君の？」ってやってる。頷くと、驚いた顔をもう一回して、私の中にに入れてくれた。途中胸がつつかえたのはご愛敬、何か本と封筒

を返してくれたかと思えば、何故か土下座された。そして懇願したり、抱きついたりと変わったことをしてきている。やられて嫌ではなく、むしろ嬉しいことは嬉しいんだけど、何でかはよく分からない。それが分かったのは、突然さっきの本の1ページを木の幹に書き始め、それに矢印をつけてハートマークを書いたからだった。

「……もしかして、あなたもこういうのが好きなの？」

そしたらその犬は激しく首を縦に振った。

まさにその犬は同士だったわけで、ジエスチャーと絵で会話を続けてみたところ分かったのは、どうやら私の絵に感服したらしく、同じような絵を描きたいと思って至る所に漫画のすばらしさを伝えるべく描きまくったそうだ。そして同じような絵が描けるように練習もしていたという。ちょっとはた迷惑だった気もしなくはない。でも、それをされてとんでもなく嫌だと思っていた感情はいつの間にか消えていた。なんていうか、弟子とか漫画を通じて気の合える仲間を見つけたからじゃないかと思う。

「そっか、そういうことだったんだ……」

犯人捜しとか怒り爆発とかそんな感じだった私だけど、いつの間にかそういう怒りはなくなっていた。この生き物がどんな生き物なのかは分からないけど、それでも気が合う仲間であることに代わりはない。せつかくだからその犬と一緒に封筒の中身を見ながら変更する場所がないか相談をしていた。なかなかいいセンスを持っているらしく、明日菜といいんちよのラブシーンがドンドン進化している。口では言い表しちゃいけないほど濃密でエロくて、本人が見たら憤死するくらいレベルが上がったんじゃないかな。どうしてかは分からないけどこの犬と普通に会話ができている気もしたし、その



おかげでアドバイスが分かりやすかったりする。普通に私が話して、その犬が鳴くんだけけど、その犬の鳴き声が普通に人間の言葉みたいに聞こえるのよね。だから分かりやすくっていいって感じしか思っ  
てなかった。そんな時、ちよつと離れたところで何かが爆発したよう  
な音が聞こえてきた。そつと外に顔を出すと、遠くの方で煙が上が  
っているのが見える。そしてなぜだか知らないけど、とつても聞き  
覚えのある悲鳴が聞こえた。今日はどういうわけか学校に行つてな  
いにもかかわらず、やたらと外出すればクラスメイトに会う日らし  
い。とりあえず同士が近くに潜んでいることを知った私は、知り合  
いが何かに巻き込まれてるかもしれないからと言つことを示して木  
を飛び出した。そしたらあの犬もついてきて、近づいてみると聞き  
覚えのある声がまた聞こえてくる。そして思いもよらない話を聞い  
た。

「リーフストームッ!!」

偶然というか何というか、僕とミューズが嫌な予感を感じてクチ  
ート達がいるはずの森にやってくると、先日感じたような気配も感  
じた。だから急いで飛んでくると、ちょうど風香ちゃんと史伽ちゃ  
んが巻き上げられるところだった。それを見たミューズがリーフス  
トームで風を起こして2人を受け止めている。その間、僕はサイコ  
キネシスで飛んでくる岩を全部受け止めていた。その岩の向こうに  
見えるのはよりにもよつてアイツらで、ミューズが言つてたとおり、  
本当にアイツらがいた。

「2人とも大丈夫だった？」

ミューズが蔓の鞭で2人を抱えて近くまで引き寄せると、僕は近づいて声をかけた。ロケット団にあって事件に巻き込まれた時点で別人の振りとかはできない。僕は魔法を使えないし、ミューズが使える魔法は自分の認識阻害ただ一つだけ。だから僕のことにもバレてもいいかなって思っ、いつもの声で聞いてみた。とはいえ、普段からヒカリちゃんの姿を借りている僕だけど、声は僕とヒカリちゃんの声を足して割ったような声を出している。だから僕が普通に今の姿で聞いても、僕と認識することはできるはずだ。できないのは神楽坂さん達バカレンジャーと刹那ちゃんくらいじゃないかな？刹那ちゃんは未だに本気で気付いていないし。で、僕が声をかけたら案の定、2人は普通に振り向いて、風香ちゃんは目を見開き、史伽ちゃんは一瞬ぼかんとして、その後に、

「ええええーッ!?」

ちゃんと驚いてくれました。ただ、こっちも驚きました。

「ミ、ミュウなの!? え、でもその姿って、えええッ!? どういうこと!?!」

「ミュウさんなんですか!?!? あ……でも水色の髪の毛の女の人がそっういえば私以外にも人間の姿でいる生き物がいるって言うてたです。……ミュウさんもだったですか!?!」

僕とミューズの顔が一気に史伽ちゃんに向いたからでした。というのも、史伽ちゃんの言葉は聞き捨てならなかったんだよね。水色の髪の毛の女の人って間違いなく、ミューズと同じ山守りのアイリスのことだもん。どんなポケモンかは秘密だけど、アイツもここに来てたんだって思った。そして僕にもミューズにも気付かれないで史伽ちゃんに出会ってるとは思わなかったよ。ただ、風香ちゃんに説明

するだけで済みそうだな、史伽ちゃんには軽く説明するだけで理解してくれそうだし。

「実はさ風香ちゃん……」

僕はミューズにアイツらを任せて2人に、特に風香ちゃんに話を始める。その辺はささっとだけどしっかり教えた。数分もかからないし、ミューズがソーラービームを5回くらい日本晴れ状態で連打してるだけで十分に説明ができたから。でも、説明し終えた瞬間に、別の声が近くから聞こえてきた。

「なるほどね、何か変だと思ったたらミュウってポケモンだったんだ。……ん？ ってことは、さっきの同士もポケモンなのかな？」

「アレ、何でハルナがここにいるの？」

「ハルナさんも奇遇ですね」

「早乙女さん、いたんだ……。うわッ、ダブルもいる」

いきなり現れたのは僕が超達と探していた早乙女さんで、ドープルも一緒にいた。っていうか、何か変なタイトルの本を持ってる。とりあえず今はそれに突っ込んでる暇もなかったからスルーした。ああ、僕がボケなんだけどなあ。ちなみにこの時はミューズがリーフストームをもう一回使って、アイツらのサイドンとラッタを戦闘不能に追い込んでいた。

「いたわよ、ちょっと離れた場所に。で、話は分かったし、ミュウのことも分かったけどさ、……アイツらって何？」

「可愛いお花さんがさっきからビーム出してるのにそれでも近づいてくるですね。何なんですか？」

「うわッ、あのおばさんしつこッ！で、一体なんなの？」

とりあえず早乙女さん、風香ちゃん、史伽ちゃんはポケモンの存在、僕やミューズ、そしてポケモン達が別の世界からこっちに来ちゃってること、ポケモンの存在がバレたらやばいことが起きそうだから隠していること、みんなが持つてるボールはパートナーになるポケモンが現れたら仲間にするときに使えることを理解することができたみたいだった。史伽ちゃんは既に一部をアイリスが話してたみたいだし、風香ちゃんはこういう内容のゲームとかはやった経験があるから理解できるみたいだし、早乙女さんは漫画を描いてるだけあってこういう自体に直面しても理解できるだけの頭の柔らかさを持っていた。だからすぐに分かったみたいだった。先日の古菲との違いがよく分かる。……なんだろ、もし神楽坂さんや佐々木さんがこういう事態に直面したら説明するだけで時間がかかりそうな気がする。しかもこういう状態でも意味が分かんないとか言ってる足引っ張ってきそうだな。そしてロケット団のことを話そうと思ったんだけど、3人はまさに地雷？っていうか、あの2人が反応しそうな言葉を言った。その瞬間、何故かバックミュージックが流れ出し、ミューズも久しぶりなのか攻撃をやめていた。まあ、自己紹介をするような物だから一応やらせておこうかな。

「『アイツらって何？』『何なんですか？』『一体なんなの？』つと聞かれたら……」

「答えないの普通だが……」

「まあ特別に答えてやろうー！」「」

「答えないでほしいのが心情だけどね」

「ミューも思う？ 私もよ……」

「地球の破壊を防ぐため……」

「地球の平和を守るため……」

「愛と誠実の悪を貫く……」

「キュートでお茶目な敵役……」

「ヤマト!!」

「コサブロウ!!」

「宇宙を駆けるロケット団の二人には……ッ!!」

「シヨッキングピンク、桃色の明日が待ってるぜッ!!」

口上が終わり、バックミュージックも止んだ。ただ、そのまま寒い風がヒュッって、僕たちとアイツらの間を吹き抜けていく。3人とも何とも言い難いような反応をしていて、

「地球の破壊を防ぎ、平和を守る、ね……。もうちょっとかっこいい言い方はないの? っていうか、めんどくさそうな人たちよね」  
「うんうん、ペアルックで化粧が濃くて、何か見てるだけで痛々しいよ。しかも愛と誠実って……」

「シヨッキングピンクに世界が染まっちゃうのは嫌ですーッ!!」

見事にヤマトとコサンジがズッコける返答が帰ってきた。特に最後の史伽ちゃんの言葉はトドメだった。おかげで僕とミューズは思わず吹きだした。確かにシヨッキングピンクの明日は嫌だな。

「あんたたち!! 人が真面目にやってるのにそんなことを言っているって思ってるわけ!!」

「そうだぞ、お兄さん達は仕事でやってるんだ!! 子供が理解もせずにバカにするのはやめなさい!!」

「でもシヨッキングピンクは嫌ですーッ!!」

ヤマトとコサンジに対して史伽ちゃんは再び言う。これにはアイツらもまたこけた。

「あんたたち……、ホントにいい加減にしなさいよ!!」

「そうだ！大人をバカにするんじゃない！！」

「でもそれ以前に古くさいわよね、その口上」

「ずっとそれでしょ？ ムサシ達みたいに少しずつバリエーションを増やした方が面白いけど、それじゃ面白みも何もなくて聞き飽きるね」

「えっ、あの人達10年以上アレで名前を語ってるの？ うわあ…

…」

「……ミュウ達もすごいね、何かすごく厄介な人たちにつきまとわれてるんだなあ」

「あの歳でキュートでお茶目は似合わないです」

ヤマトとコサンジは怒って言い返してくるけど、僕とミューズだけじゃなくて僕たちの会話に反応して入ってきている。あのピカチュウのトレーナーが旅をし始めてからだから、もう結構前のことだ。30後半にもなってよくやれるって心底思えてくる。

「それでさ、ミュウ、あの2人って結局何？ロケット団って？」

「ああ、ロケット団って言うのは僕たちの世界にいた、ポケモンを捕まえて悪事を働くとっても悪い奴らなんだ。僕たちがこっちの世界に飛ばされたから、僕たちを追いかけてこっちに来て、ポケモンを捕まえて、そしてこっちの世界を征服しようと企んでいるんだ」

「ミュウ達の世界を征服できてないのに？」

「うん」

「へえ……それは何……？ こっちの方が征服しやすかったから？ それとも……あっちではマイナーすぎて相手にされてないとか？」

「漫画で言う悪の組織ってもう少しカッコいいんだけどなあ……、

あの格好、ださいし」

「えっとあの人達は悪い人たち、極悪人なんですよね？ ……そうには見えないですね」

「確かにそうね。むしろ10年以上もやってて幹部すらなっていないのよね?……もしかして雑魚?」

早乙女さんがまた地雷を踏んだらしく、2人の背中にグサツと包丁が突き刺さったのが見えた気がした。多分ムサシ達が幹部になっていることで焦ってるんだと思う。でも、何かあの2人は下っ端臭が抜け切れてないね、うん。風香ちゃんはこっちの世界に攻め込んできたことを呆れた様子で見ているし、史伽ちゃんは早乙女さんの言葉に同調している。ミューズはそれを聞いてさっきから笑い転げていた。そのせいか、2人のプライドを傷つけたらしかったけど、その後に面白いことが起きた。

「あんた達ね!! さっきから言いたいことを何ぬけぬけと言ってるのよ!! こっちはもうすぐこの世界の魔法とかが使えるようになるかもしれないのよ!!」

「あっちゃー……」

「あゝあ、こんな時に何言い出すのよ、ヤマトの奴」

「魔法……? この世界の魔法って言ったわよね?」

「うん、確かに聞いたよ」

「ポケモンだけじゃなくて魔法使いも存在してたんですか!?!」

「そうだ、魔法は存在しているんだ!! そんなことも知らないガキどもだとはな!!」

「そりや秘匿にされてるからね」

「へえ、本当に魔法が存在してるんだあ……、あの人、えつと名前なんだっけ……」

「あのケバイおばさんはヤマトで……あのおっさんは……アレ? コサ何とかだったよね?」

「コサノスケじゃなくて……、そうです、コサンジです!!」

「そうだ!コサンジだった!!」

「そうそう、そうよね、そういえばコサンジって言ってたわね。あのクールっぽく振る舞ってるけど全然格好良くないおじさんがコサンジね」

「違ーーーーーうつ!!! 俺の名前はコサブロウだ!!」

全く、礼儀の一つも知らない奴らだな!! だがそれも今のうちだ!!今は転送マシンが壊れたから俺たちしか来ることができないが、今この間にも魔法の研究は進んでいるんだ!!こっちでの潜入作戦も水面下で進んでいるし、ポケモンと魔法の融合も始まっている!!そんなことも知らずにのうのうと生きているお前達に今にロケット団の征服攻撃が行われるんだ!!」

「そうよ!!あんたたちも今から捕まえて向こうの世界で洗脳して新たな団員にしてあげるんだから!!既にこの世界の人間が2人も洗脳されてこっちで活動してるのよ!!あんたたちも同じようになりなさい!!」

2人は切れたからなのか、僕たちが誰も何も聞いていないのにいるんなことを話し始めた。かなり言っちゃいけないことを暴露しているらしい。とりあえず後で学園長に報告しておくとして、こいつらといい、先日の下っ端といい、大事なことを簡単に喋りすぎていると思う。そんなことでよくロケット団をやっていると思うけど、ムサシが相変わらず金の亡者だったし、言葉に翻弄されやすかったから、結構すごそうに見えてもロケット団はバカが多いんだって認識した。ただ、問題なのは3人に魔法の存在がバレたことだった。ポケモンのことだけ話して魔法のことは知らないようにするつもりだったけど、見事にバラしてくれちゃった。3人とも最初は驚いて喋ってたけど、だんだん暴露話が進んだからか、一気に口数が少なくなってくる。呆れてるんだ、アイツらを。ただ、やっぱりコサブ



ロウはコサンジという名前に間違えられていた。3人とも口上はちゃんと聞いてたんだけど、何故かコサブロウのことをコサンジって認識したらしい。本人は怒ってるけど、僕とミューズは大爆笑だった。

「ねえねえ、それにしてもあの2人、あんなに喋っちゃってもいいのかしら？」

「何か壮大な計画だよ」

「捕まりたくないです。でも……どうして教えてくれたんでしょうか？」

「教えたんじゃないくて切れて言いたい放題行っちゃっただけよ、アイツらだもん」

「そうそう、ヤマトとコサンジだもんね」

僕たちがそうやって話していると禁則事項のようなことを暴露しちゃったことに気付いたのか、アイツらはようやく焦りだし、

「よくも私達の計画を知ったわね!!」

「計画を知られたからには生かすわけにはいかない!!」

いや、お前らが喋ったんだ……って、聞いてないな。

「ユレイドル、行きなさい!」

「行つてこい、ヘルガー!!」

ヤマトは昔の時代の植物のような姿をした岩坪ポケモンのユレイドル、コサンジは悪魔とかみtain姿に酷似しているダークポケモンのヘルガーを出してくる。対して僕とミューズが前に出ようと思った。でも、いきなり早乙女さん、風香ちゃん、史伽ちゃんが僕たちの前に出た。

「ミュウ、私達に任せて！」

「ヤマトとサコンジは僕たちが何とかするね」

「えっ？ でも君たちは……」

「大丈夫です。なんか私の頭の中に『一緒に戦ってくださいです！』ってパチリスの声が聞こえてきましたから、何とかなるですよ、ヤマトとサモンジは」

「そうそう、僕と君の絵心を見せつけようって私には聞こえたわよ。ヤマトもコタンジも軽くやっちゃうわよ！」

「僕は一緒にアイツらをはね除けちゃいましょうって聞こえたよ！」

3人がそういったときだった。風香ちゃんと史伽ちゃんの手にしていたボールと、早乙女さんに寄り添っているドーブルが光り出し、ボールからはどうやらゲツトし終えていたらしいクチートとパチリスが光りながら飛び出してくる。そして光りと共に3人と重なり合っていく。超のところで見た『ポケアーマー』が発動したらしい。特に早乙女さんと史伽ちゃんの光は結構強かった。多分、今日出会ったと思われる風香ちゃんよりも結びつきが強いんだろう。そして光が消えたとき、3人の姿はそれぞれ変わっていた。それにしてもコサプロウ、ドンドン名前が間違えられてるよ。本人は完全に怒り狂ってるみたいだね。

早乙女さんは頭にベレー帽をかぶり、右手に大きなスケッチブックを抱え、エプロンを身につけた姿だったが、ドーブルと同じ尻尾が生えていて、その尻尾を左手が持っている。風香ちゃんはフード付きの黄色いパーカーと黄色いスカート姿になり、手には巨大ハンマーをてにしていた。そして史伽ちゃんは前にポケットピアというポケモンバトルが楽しめる場所を覗きに行ったときに見かけたパチリスのコスプレをしたお姉さんと同じような姿になっていた。ただ、その手には綺麗な白と水色の縞々模様で塗られた、鎖のついた鉄球

がある。ファンシーな姿だけど、それはどう見ても荒くれものが使う野蛮な武器、モーニングスターだ。

「ふんっ、ポケモンと合体しようがどうしようが、こっちはナンバ博士の特殊メカが組み込まれたユレイドルとヘルガーなのよ！ あんな達に負けるわけがないわ！ 行きなさい、ユレイドル！」

「行け、ヘルガー！ アイツらにお前の恐ろしさを思い知らせてやれ！！名前を間違えた怨みも晴らしてやる！！」

ヤマトとコサンジは驚いたみたいだけど、すぐにユレイドルとヘルガーを差し向けてくる。同時に風香ちゃんと史伽ちゃんが駆けだした。

「ユレイドル、あの小娘達にストーンエッジ！！」

「ヘルガー、あの眼鏡娘に火炎放射だ！！」

ユレイドルが大量の岩を出現させて一気に撃ちだし、ヘルガーは風香ちゃんと史伽ちゃんを飛び越えるように高く飛び上がって紅蓮の炎を放出する。でも、史伽ちゃんよりも前に飛び出した風香ちゃんがその岩の前に立ちはだかって仁王立ちをし、早乙女さんは火炎放射に向かってスケッチブックの白紙のページを向ける。風香ちゃんに大量の岩が襲いかかったけど、それら全てがはね除けられていた。風香ちゃんに怪我はなく、史伽ちゃんが守られた態勢になっている。風香ちゃんの黄色い服に当たった瞬間、岩が粉々に砕けていた。どうやら『鉄壁』のガードで攻撃を防いだようだ。その隙に史伽ちゃんが鎖をぶんぶん振り回し、その先の鉄球をユレイドルに叩き付ける。しかも走りながらのそのスピードはパチリスみたいにはしっこく、鉄球は振り回されながら光っていた。多分『アイアンテール』だろう、ユレイドルがダメージを受けている様子から考えるに。あの鉄球の正体は史伽ちゃんに尻尾がついていないことから

尻尾が変化した武器のようだ。そして早乙女さんに向けられた火炎放射はスケッチブックに触れかけた瞬間、スケッチブックの中に吸い込まれていく。火炎放射が『スケッチ』されていた。これにはヤマトもコサンジも驚いたみたいで、

「な……っ、ナンバ印の強くなれちゃうぞチップが埋め込まれてるのに!？」

「くそっ、予想外のパワーじゃないか!! ヘルガー、スモッグで視界を塞ぎ、シャドーボールだ!」

「ユレイドル、根を張って体力を回復するのよ!」

それでも2人も負けじと反撃に出ようとしているらしい。ヘルガーが排気ガスのような煙を放出し、その隙にユレイドルが根っこを伸ばして体力を回復し始める。ポケアーマーの状態の時はトレーナーはパートナーポケモンの声が理解できる状態にあるからだろう、風香ちゃんと史伽ちゃんが背後に下がってくる。その時早乙女さんの持っているスケッチブックの白紙のページが開き、白い触手のような光が飛び出して僕とミューズの身体に触れ、そしてスケッチブックに戻っていく。すると白紙のページには僕の『サイコネシス』とミューズの『リーフストーム』の絵が『スケッチ』されていた。

「私は初めての攻撃だったら最初だけはこのスケッチブックで『スケッチ』できるの。そしてその攻撃をこの尻尾の筆で書けるのよ。これで排気ガスなんか怖くないわ!リーフストームよ!」

早乙女さんがリーフストームを起こしてスモッグを吹き飛ばすと同時に、史伽ちゃんが勢いよく走り出し、その身体が激しい光りに包まれる。それは『フラッシュ』で、スモッグがなくなった瞬間に起きたそれがヤマトとコサンジ達の目を眩ませる。それと共に早乙女さんと風香ちゃんが走り出し、早乙女さんの火炎放射がユレイド

ルに、風香ちゃんの持つているハンマーの一撃、多分『アイアンヘッド』がヘルガーにぶち当たった。ユレイドルは根を張っていたから逃げる事ができず、火炎放射をもろに食らってぶすぶすと黒煙を上げ、焦げ目を見せている。そしてヘルガーも土手っ腹を殴られてそのまま目を回していた。目がようやく眩まなくなり、ヤマトとコサンジが目を開けると目の前にはユレイドルとヘルガーが戦闘不能になっている。そして僕とミューズが光を集める態勢に入り、早乙女さんが赤く燃えさかる炎を覗かせる筆を、風香ちゃんがキラキラと鋼のように光るハンマーを、史伽ちゃんがぶんぶん回している尻尾の鉄球を向けていた。完全に彼らの方が分が悪い。

「嘘っ！？　ここまでなの！？」

「……くっ、今日のところはこれで許してやる！！　ヤマト、引き上げるぞ！！」

完全に不利だと感じたのか、2人は煙玉を使った。だが、同時に早乙女さんがリーフストームを起こしたから煙がすぐに吹き飛ばされていき、2人は慌てて転送マシンを作動し始める。

「なんだろ……、今日はイツらに追撃かける気がしないな」

「そうね、やっても面白みがなさそうだし」

「色々言ってくる割に結構弱かったわよね、やっぱりヤマトと『股間痔』って雑魚？」

早乙女さんが明らかにわざとらしい間違いをすると、コサブロウの動きが止まった。顔を真っ赤にしてこっちをジロリと睨み付けている。

「ハルナ、そういうことは本当のことでも言っちゃいけないんだよ」  
「そうですよ、本当のことを言われたら反応しちゃうから言っちゃ

いけないって楓姉が言ってたですよー」

「あはははは、そうね。そういえばそうよね、だから反応したんでしょね」

ここに追撃をかけたのは風香ちゃんと史伽ちゃん。コサブロウは流石にぶち切れた。そしてモンスターボールを投げようとしたんだけど、その後ろではゲートを開いたヤマトがコサブロウの服を引っ張って逃げようとしている。

「せつかくだからやってあげよつか」

「そうね、せつかくここに来てそのまま逃げさせるのも何だし」

その直後、僕の破壊光線とミューズのソーラービームがアイツらを襲ったのは言うまでもない。

「「やな気持ちっ！……！」」

2人のおきまりパターンと共に再び異次元爆発が発生し、激しい突風と空圧が発生した。だが、後には何も残ってなく、アイツらが逃げ延びたことは確実だろう。

こうしてロケット団の襲撃は幕を閉じた。

でも、戦いが終わってもこれで終わりではない。ポケアーマーまでできるこの3人は魔法のことを知ってしまったからだ。3人はポケアーマーを解除し、早乙女さんはダブルをボールで今になってゲットした。その後でこれが始まった。

「ねえねえミュウ、あなたのことは話さないでいるけど、その代わりに魔法のことなんだけど？」

風香ちゃんと史伽ちゃんは大丈夫だったけど、早乙女さんはようやく本性を露わにした。今までグツタリしていたのが、ようやく事件も解決し、どうやらなくなった物も見つけたからだろう、元気になりすぎて僕が困る状況が発生している。

でも、ここで救いの手が現れた。突然早乙女さんが倒れたからだ。何か鈍器のような物で殴られる音がしたかと思うと、背後にはポケアーマー状態の超と葉加瀬が立っていた。どうやら葉加瀬が殴ったらしい。

「間に合いましたね、ミュウさん。戦いは終わってしまったみたいですが……」

「流石にハルナに魔法がバレるのはよくないヨ。だからハルナには忘れてもらうことにするネ」

風香ちゃんと史伽ちゃんは僕的に考えても麻帆良の中をくまなく知っているから今後も力を借りたい存在だ。クチートとパチリスのコンビは僕もよく知っている。ただ、ポケアーマーから感じられる僕への視線は相当怒っている様子だったけど。というわけで、早乙女さんは僕たちのことやロケット団の存在は覚えてるけど、魔法の存在は忘れてくれた。そして風香ちゃんと史伽ちゃんはバレたらポケモンとも別れなきやいけなくなると聞いたからか、魔法のことを絶対に話さないことで約束された。その代わりに超達の肉まんも食べ放題になったのがきいたのかもしれない。でも、これでポケアーマーを使え、ロケット団にも立ち向かえるトレーナーが2ーAには増えた。ある意味、僕やミューズに協力してくれる、ポケモン事件を解決するための仲間がね。現在超の工房にはクチートとパチリス、ドーブルも増えて楽しいことになっている。ミューズはと言うと、ロケット団のことを伝えるに学園長のところに行ってもらった。

ついでの特レーナー情報もね。ただし魔法バレは内緒と言うことで。早乙女さんも魔法のことだけを忘れてくれているから本当に助かった。これで朝から起きた変な事件も幕を閉じて、めでたしってことだね！

全く今日は色々なことがあった。私の作品が至る所に描かれることから始まり、転校生のミュウがポケモンだったこと、異世界からの侵略者に私のパートナー、魔法と思えるくらいすごいとんでもパワーの変身能力、そしてかけがえのない同士の存在……、本当に噂にして喋りたいような出来事だった。超や葉加瀬、四葉さんまで持っていたこと、ミュウから聞いてどうやらザジさんも持っているらしいこと、通り魔事件の真相まで知って本当にビックリしてばかりだ。でも、私も今回のことは喋らないでおこうと決めた。喋ったらせつかくの同士がいなくなる。それにリアルなとんでも話は創作意欲がわくし、それに巻き込まれて色々と体験できるなんてサイコーじゃん！！漫画のネタがごろごろ転がってそうな気がするし、人生生きててまたとないチャンス！！これはもう、秘密を共有しながら色々と経験しちゃってネタを集めちゃおうじゃない！！あのミュウズっていうキレイハナちゃんが言うにはミュウの為に存在するような突っ込みもいるらしいし、そのポケモンはかなり人生経験が豊富らしいから、早く見つけて色々ネタも仕入れたいところ！！

「……って、そういえば……私、明日菜にバレたんだよね」

女子寮に近づいて妄想溜まりまくりの私だったけど、ふと思い出



した。夕映に貧乏くじを引かせてそのままドールを追いかけたんだから、あの罠には明日菜が嵌っていたはず。ドールが持つてなかったから、明日菜と高畑先生のあることやこんなことを描いた漫画は明日菜の手の中にあるはずだ。そうなれば確実に夕映の口から明日菜に伝わっている。さっきもそんなことを思ってたけど、私が帰ってきててもそんなに寮が騒がしくなかった。つまりバレてない？いや、夕映が怒り狂った明日菜を前にして冷静になれば、貧乏くじを引かされた仕返しをしてくるはずだからバレているはずだ。では、何でこんなに私が来てもチラチラ見たりとか、そういうことが起こらないのか？それを不思議に思いながら帰ると、夕映が出てきた。

「あのハルナ……、罠に関しては撤去しておいたです。さっき学園から通達で何故か事件が解決して犯人が捕まったとか言う連絡も入ったです。……一応、ハルナは明日学園長に呼ばれたですが、話を聞く限り、軽い注意程度らしいですよ」

夕映は心配そうにしながらそう話してくれた。多分ミュウがうまくやったのだろう。ミュウが言うにはこの治外法権的な学園に人間の姿で入ることができたのは学園長の力添えがあったかららしい。どうして学園長がそこまで力を持っているのかは分からないけど、まあ、気にすることもないだろう。とりあえず、明日の出頭は分かった。ただ、よく見ると玄関にはもう1足、靴がある。

「ハルナが元凶であることは広まっていないです。むしろ、そうならないように学園側が動いていたことが驚きです。ただ……明日菜さんには喋ってしまったですよ、流石に怒り狂った明日菜さんを前にしたら私も対処は難しいです。……ただ、明日菜さんは高畑先生絡みならば何でもいいらしいです、明日菜さんの認識が変わりましたし」

夕映はそれだけ言うと、のどかもいるらしい明日菜と木乃香の部屋に行った。つまり、私と明日菜の二人つきりと言うことだ。ちょっと待ってよって叫びたくなったけど、夕映の様子からして首をかしげることがある。明日菜の様子のことだ。夕映の態度、様子から考えて明日菜が怒っているから疲れたという表情はしていない。むしろ、明日菜の何かで夕映が気疲れしたようだった。

「ちょっとパル、何そこで突っ立ってるのよ！ 早く来なさいよ！」  
そう思ってたら明日菜が奥から出てきた。

見るからに全然怒っていない。

そして数分後、私はあることに絶句した。

「お願い！！ この本の続きが読みたいの！！ この本、全部私に譲って！！！！！！」

夕映が気疲れした理由と、妙に部屋が荒らされている理由が何となく分かった。

どうやら明日菜は私が描いた高畑先生とのいちゃいちゃ本を心底気に入ったらしい。高畑先生と恋人同士であんなことができるんだっただけがわしくても全然OKというのが明日菜の心情なのだろう。しかも断ったらいいんちょにバラすとまで伝えてきた。だから私が頷いて、明日菜をモデルに描いた作品で高畑先生や高畑先生らしき人物が相手になっている作品、合計10冊を明日菜に挙げたのと言っただけでもない。ちなみに何でそんなにあるかって言うと、身近にいる単純で、かつ、乙女心を殆ど毎日晒している存在ほど、作品

のモデルにしやすい存在はいないからだ。明日菜は終始高畑先生のことを好きで好きで仕方がなく、その妄想癖まで出してるくらいだったからモデルにして、BLや百合の本を作るネタを考えるにはうってつけだったのだ。それにしても明日菜がこんな本に手を出してまで高畑先生と一緒にになりたいとは、本当に私も明日菜の認識を変えたくなるよわね……。

そんな時、私の部屋のインターホンが再び鳴った。

私は玄関に向かうんだけど、それが地獄の処刑台に続く道のりだとは気付いていなかった。

「はいはい、どな……、……っ!？」

「早乙女さん、お元気になられたようですね。……先ほど明日菜さんがとても嬉しそうにしていましたから色々とお伺いしてみたら楽しそうに話してくれましたのよ」

……この日、夜遅くまで女子寮に少女の悲鳴がこだましていたという。

第5話 最初から知っていてもよかったこともあるけどさ、知らない方がよかった

ミュウ：「ふう〜……、久々に投稿されたよ……、長かった……」

ニヤース：「この話の書き出しは8月後半だったからにや〜……、  
まともに書き出すまでで作者も苦労してたにや」

ミューズ：「でもそのせいでクチートとパチリスの話にダブルが  
加わってこうなったのよね。加わった理由はキャラクターがグッ  
タリしたままでいさせるのが作者的に心苦しかったかららしいわよ」

ニヤース：「何処ぞの誰かとは違って作者は優しいにや〜」

ミューズ：「それは確かにそうよね」

ミュウ：「え〜、僕だって優しいじゃん!〜!」

ミューズ：「っていう話はおいといて……」

ミュウ：「突っ込んでーっ!〜!」

ミューズ：「次回っていうか、原作に関わるまでに後5話分あるら  
しいわよ。ただ、その5話はどれもいいみたいなのよね」

ニヤース：「らしいにや、にゃーはまだおみゃー達と違って登場し  
にゃーがにゃ」

ミューズ：「双子のおチビちゃんに古菲ちゃん、触覚眼鏡のハルナ  
ちゃんがポケアーマーの使えるトレーナーになったからどの話を先

にやっても話が成り立てる状態になったのよね。ヤマトとコサンジも登場したからなおさらしいし」

ミュウ：「これを先にやらなきゃいけないような重要度を強く持つ話ってわけじゃないけど、順番が違っても成立可能な状態になったってことだね。勿論、僕の功績がとても大きいからこうなったわけさ」

ミューズ：「っていうことも置いといて」

ニヤース：「作者も流石に迷ってるようにや。ちなみにその5つに副題をつけるとしたらこうなったそうにや」

ミュウ：「ねえ、突っ込んでよーっ！」

ミューズ：「副題は、『禁忌コンビ確定？』、『ナマハゲとの邂逅』、『西洋の問題児』、『頑張れさちゃん、そして高音さん、強く生きてください……』、『卵を巡ってファンシー合戦』らしいわよ」

ミュウ：「突っ込みどころが満載だね。ああ、ホントに突っ込んでくれないや……」

ニヤース：「5番目は兎も角、他のはどんな作品が想像できる読者もいると思うにや」

ミュウ：「とりあえず、どれか読みたいのがあったら作者に言ったら順番が変動するかもしれないんだよね。ちなみにヤマトとコサンジが登場する予定なのはこの中の2〜3個だよ」

ミューズ：「ゲットする話は全部にあるみたいね、内容によっては

長かったり短かったりするそうよ」

ニヤース：「それからイツシュ地方のポケモンをどうするかも考え中らしいにや。既に一人、進化後のポケモンをゲットさせたい生徒が現れているそうにや。イツシュ地方のポケモンでの希望も使う使わないは別でお待ちしてるにや」

3人：「と言うわけで応援よろしくお願い（しまーす！・するにや！・ねー！）」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2550m/>

---

ネギポケ漫遊記

2010年10月12日20時01分発行